

の始は晴信固く佛教を信じて動かず。父義貞の遺言に反き、切支丹の葬儀を行ふことを拒み、一時は宣教使を追放し切支丹を禁止せんと試みたのだが、宣教使ワリニヤーニ大に晴信の爲に謀る所あり、又熱心に勸諭したる結果、晴信遂に發心して洗禮を受くるに至つた。教名をプロタースと云ふ、是れ天正七年にして晴信時に歳二十であつた。其の奥方も亦洗禮を受けた、教名ルシーと云ふ。晴信は切支丹大名中最も熱心なる信者にして、彼が如何に日本の切支丹の爲に努力せしかは今後の日本切支丹歴史に昭々たりである。彼は受洗後、間もなく、有馬に學校を設け、生徒をして西洋の繪畫、彫刻、樂器及び時計製造等を學ばしめ、又數ヶ所に寺院を建設し、又宣教使を保護し、爲に島原半島は盛大なる基督教社會の中心となるに至つた。

四 九州の探題大友義鎮、宗麟

九州の探題大友義鎮、三非齋、宗麟は最も古く切支丹に接せし大名の一人なるが、彼が初てザビエールと會見せし以來二拾有七年間に於て大に領土を擴張し筑前、筑後、肥前、肥後、及び豊前の五ヶ國を使せ、都合六ヶ國の太守として其の勢九州に冠たりしも未だ洗禮を受くるに至らなかつた。然も其の間大に宣教使を保護し、九州各地の切

支丹布教に勢援を與へ、其の居城臼杵に教會堂を建て、又其の都市府内には廣大なる土地を寄附して教會堂、病院、宣教使の住宅等を建設せしめ、之れは夥多の歳入を附した。而して其の領内の信徒は二千人以上の數に達して居たが、然も其の多くは貧民にして宣教使團の扶助を受る者多く、中流以上の士民にして切支丹を信ずる者は甚だ稀であつた。前に述べた所のアルメーダが創設せし癩病院、孤兒院等は一方世に切支丹の慈善を紹介するの因となつたが、他方より觀察すれば却て布教上の妨害となつた、何となれば當時切支丹に歸依せし信徒は多く此等の慈善團中より起つたので基督教會は宛がら貧困者や施療患者の集團なるかの如き觀があつて、中流以上の士民には却てつまづきとなつたと云ふ事だからである。

義鎮は宗教に熱心して、基督教を研究しつゝあつた際にも、時々京都より名僧知識を招待して佛教を學んだのだが、(京都洛北大徳寺の招雲、和尙は其一人なりと)其の結果彼は切支丹に眞理ありと認めたるが如し、然も尙ほ基督教の社會上に於る利害得失を探究せんとして、特使を媽港に派遣して之れが取調をなさしむるなど、最も慎重の態度を執つたのである。彼が剃髮して宗麟と號せしはあながち佛教に歸故せしが故にあらず、當時の風習によつ

洗禮を受くる
理由の遅れたる

たものならん、其の剃髪の時日は永祿五年の五月なりと云ひ、或は其の後なりと云も詳ならず。その洗禮を受けたのは天正六年六月下旬（一五七八年八月廿八日）にしてザビエーに初めて會見せしより廿七年九月の後であつた。彼は基督教に傾き居りながら久しく洗禮を受ることを得なかつた理由は數ヶ條あり、その一は領土の不安を惹起せんことを虞れたるが故である。宗麟自ら進んで公然切支丹に入門せんか、さなきだに、國主が新宗教を保護するを憤慨しつしあつた佛教徒の反抗を激甚ならしむるのみならず、領内不平の徒が之れに籍口して騒亂を起すの虞があつた。一五五六年（弘治二年）日本に來朝せし印度の支部長ヌゲー師が、宗麟を見て説得し、切に洗禮を受くることを勧めし時、宗麟の之れに對する答辨は能く其の事情を説明し得て餘りあり、曰く、「寡人深く天主の教を尊敬すること詐ならず、且つ此の教法を眞正の道なりと信ず、因て自ら之れを遵奉し國中へ弘むるの志あれども、國家多難にして素志を達する能はず、今や豪族十二家反亂の餘燼未だ全く消せず、隙を窺ひ再び燃えんとす、佛僧徒も亦機會を待つて亂を起さんと謀る、抑も教法の得失は民心動搖の一大根元にして兇徒兵を擧ぐるの最大口實なり、されば騒亂の餘燼に教法を改むることあらば彼等

大友家麾下の
三種族

は此の機に乗じて祖先の教法を廢する者を亡ぼすのだと稱し、隣境の諸候と結んで予を攻むること必定なり。然るに、寡人之れに抗するの威力なし、故に今洗禮を受くれば亡滅を免かれ難く、奉教人等一時國主を社友となすも、久しからずして滅亡することあらば、何の益かあらん、後日漸く安全の目的立つの時、必ず此の約を遂げやう、願ふ所は天主此の赤心を照覽ましまして聖教に歸するの好機會を授け玉はんことを」と。此れ一時の遁辞なるやも知るべからずといへども、其の言辭は能く當時の事情をあらはしたるものだ。佛教徒の反抗は、宗麟がザビエーに會見せし時より既に已に其の萌芽をあらはし、次第に激烈となりつゝあり。麾下の中にも反感を懷きしものなきに非ずで宗麟の言葉の中に豪族十三家の反亂の餘燼未だ全く消せずとあるは如何なる事實を指せるものなるや判明せずと雖も、當時は歴史家の所謂下剋上の時代にして、日本全國、何れの處にても、無名の英雄、豪傑が機會を得て主家を壓伏し新に家を起こしつゝあつた時なれば、大友家麾下の士にして野心を懷包せし者が不軌を企てしことも蓋し尠なからずであつたのだらう、由來大友家の麾下には三種族あつて各々其の門閥を争ひ、互に嫉視反目して排擠を事として主家に累を及ぼしたと云ふ。その三種族

とは、一を同紋衆と云ひ、大友氏の血族にして宗家と等しく杏葉の紋を使用するの權利を有する者だ。その二を國衆と云ひ、古來より豊後に居住せし毫族にして大神、丹部、宇留島、宇佐氏の末裔がそれだ。其の三を下り衆と云ひ、建久年中大友家の祖先能直が豊後へ赴任の際、鎌倉より隨従し來れる者だ、此の三種族は平素より互に勳功、閱歷を争ふて相和せず、しばしば争亂を起して君家を惱ませり。既に先代義鑑の時に於てもその軋轢爆發して一大騷亂となり、中村、本庄、賀來の國衆派にぞくする三家は、冤罪を蒙つて討伐せられ、柵牟禮の城主佐伯薩摩守惟治の欺き殺されたるあり、重臣朽網下野守親滿の叛逆を企つることもあつたが、此れ皆種族軋轢の結果であつたと云ふ。義鎮の宗麟立つに及んで、政治を正し將士の心を收攬するに意を用ひたので、種族軋轢の騷動も漸く下火となるにはなつたがその餘燼未だ全く滅せず、政治の風向が如何によつては何時、復、再燃せんとも知るべからざるの情況にてあつた。

その二は宗麟の德行修らず基督教の要求する倫理と氷炭相容れないものがあつた故である。彼は天質凡庸の器にあらざると雖も、その性質勇猛にして放縱の所行多く、若き頃より兵法早業を好み、常に長刀を横たへ平素の容貌怒れるが如く、科なき者をも少し

洗禮を受くる
理由の二

く心に背く者あれば乍ち之れを手討にし、その上鷹狩、山狩、川遊を好み民の疾苦を顧みず人の誹謗をも辨へず心に叶ひぬれば、忠なき者にも賞を與へ、心に叶はざれば、累代の功臣をも外様の如く冷遇し、媚び諂ふ族を近づけて、心のまゝにふるまひ居たので爲めに父義鑑の不興を蒙つて父の間離隔するに至つた義鑑がその家臣の爲めに弑せられしは義鎮の不行跡その因を爲せりと云ふも誣言にあらざるべしだ。されば義鎮が立つて大友家の主君となるや、重臣六名連署して封事を奉つて其の不行跡を極諫し、之れを補佐して國政の改善を謀つた故、大友家の隆盛を見るに至つたのだ。然るに、宗麟が老臣の諫に従ひしは一時のことにして其の性癖容易に改善せず、家運の隆盛なるにつれ、いつしか氣弛み、心驕り、復また政治を怠り、以前に勝る不行跡となり、京都、堺其の他の國々より美女を招き下して閨中に戯れ、歌舞、酒興に耽り、我意を恣にし賞罰明かならずで家運再び傾かんとし、重臣等の苦心一方ならずであつたが、爰に大友家の一族に戸次丹後守鑑連と云ふ者あり、忠義稀なる人物であつたが諫言を奉らんとて、日日登城しけれども、義鎮避けて對面しなかつたので鑑連ふと一計を案じて、京都より麗しき女子を夥多招き下し、晝夜歌舞音曲を演ぜしめて見物し

けるにその噂いつしか洩れて義鎮の聞く所となり、戸次は武藝にのみ目を送り、遊興の如きは人の爲すをだに諫むる程の堅ぐるしき人物なるに、近頃遊興に耽るとは心得ぬ事共かなと、不審せしが、何は兎もあれ其の歌舞を一見せばやとありければ、戸次はしずましたりと大に悦び、直様踊子を引具して登城し、三つ拍子と云ふ踊を演ぜしめて御覽に供せしかば、義鎮大に喜び感賞措かなかつた、爰に於て鑑連謹で申しけるは、屋形様の武威は旭日の昇るが如く隣國に輝き、今や九州の中六ヶ國までも其の掌中に握らせ給ふに至り、その御威光は御先祖に十倍せり。然るに、此の頃は。政治を抛たせ給ひ色を重んじ、酒興に晝夜を忘れさせ給ふ故、六ヶ國の政治の善惡につき兎角申上ぐべきやうも候はず、殊に中國の毛利は時を窺ひ當家を滅して九州を手に入れんと相工み候折柄、御領國中より叛逆人出で來り候は、一大事に及び候べし。然る時は逸樂を御好みなされ、美女を愛せられ候事、當然當家滅亡の基とならん。國の爲め主君の爲め御先祖の爲め御子孫の爲め、將又家臣等の爲めに候へば、偏へに御行跡を改められ候へと、涙を流して諫められたれば、義鎮黙黙として座を立ち奥へ入てしまつたが納得やしたりけん、翌七日の式日には義鎮威儀を正して登城の諸士に對面したの

で、家臣等皆よろこびあへりとかや。それは元龜元年頃のことだと云へば、ザビエーに會見せし時より十九年の後である。然るに義鎮は尙ほ今後もしばらく老臣の諫言を受けしと云へば、其の不行跡は容易に改まらなかつたので、到底基督教徒たるの資格はなかつたのだ。唯だ併しながら老臣等の諫むる毎に、その都度之れを容れたのは彼の美點であつた。

其の三は家庭に於ける紛糾せる事情である。宗麟の正妻は丹後の領主一色右京太夫義幸の女であつたが、何故か之れを離婚し、執權田原近江守親堅紹忍の妹を納れて正妻となし之れを寵愛した。然るに彼女は切支丹を嫌惡し、佛教に熱狂したる餘り、佛僧等の傀儡となつて切支丹信者を苦しめ、其の夫君宗麟を惱ましたること幾度なるや知るべからずで、宗麟の美女を愛することを嫉み、又其の切支丹を保護するを惡み、國中の僧侶、山伏に命じて義鎮を呪咀せしめたとの風聞あり、義鎮怒つて僧侶、山伏を搦め捕へ之れを追放せしことあり。又時に夫君を弑せんと密かに謀つたことさへありと傳へられる。切支丹の人々は彼女を呼んでイゼベルと云つた。イゼベルとは以色列王アハブの后にして、偶像禮拜を奨励した奸婦人だ、(舊約書列王記上十六章卅

洗禮を受くる
事の遅れたる
理由の三

一節)

以上列擧したる三箇の事情は、義鎮をして公然洗禮を受くることを逡巡躊躇せしめた理由であるが、その最も重臣なる原因は彼が基督教に關して確乎たる信仰を有しなかつた故だ。彼にして相當の信念を有せんが、其の操行の改善せらるゝは勿論云ふまでもなく、如何なる困難があつても萬難を排して基督教を遵奉すべしであつた。然らば彼は何故に初から洗禮を受くることを約束し、又切支丹を保護したかと云へば、其の理由は別にあつたやうだ。即ち切支丹と密接の關係ある外國貿易を獎勵せんが爲めに外ならずである。當時外國より日本に來つて貿易せる者は、葡萄牙人のみにして、其の貿易は切支丹と離るべからざる關係を有して居たので、外國貿易を盛にせんには切支丹宣敎使を好遇せざるべからざるの事情があつたのだ。傳へ云ふ「義鎮天資聰明にして氣宇豪爽、夙に武將たるの器あり嬉戲尙も、軍紀に擬せざるはなく、日々衆童を集めて戰鬥の狀を爲し、又は老臣を會して軍事を聽くを以て無上の樂しみとす、一日近侍の家臣を從へ由須原八幡ゆすはらに參社す、時に義鎮踵母の拜殿かぶらに額づき、久しく默禱するを熱視し、問ふて曰く、汝何事をか祈ると、曰く、世子疾に長じ立つて九

義鎮天資聰明
氣宇豪壯

其の最も重なる理由

國崩の威力、

州の主たらん事を祈ると、又問ふ、九州とは幾許いげの國ぞ。曰く九ヶ國なり、義鎮喜ばず、云ふて曰く、僅に九ヶ國の主たるが如き、寧ろ祈らざるに如かず、何ぞ五十ヶ國、六拾四ヶ國の主たらん事を祈らざると。時に義鎮年九歳、左右之れを聞く者其の志に驚かざるは無かりしと云ふ。」(佐藤氏第大友宗麟未刊本)此の如き大志を懷いた宗麟が、天下に覇たらんとするに當り、先づ必要なるものは軍用金の豊富と武器の精銳とである、而して之れを得るには外國貿易を獎勵するに若くはなし、是れ彼が葡萄牙商人を領内に招待して貿易を盛にし、家臣を海外へ派遣して武器を輸入した所以なりだ。彼が大友家の主君となつてより數年にして九州の中、六ヶ國を掌握するに至つたのは、將士の忠戰與つて力あつたとはいへ、又以て資金の豊富、武器の精銳に因らすんばあるべからずで。當時國崩くにぶと稱せし大砲の如きは恐らく大友氏の專有にして、他にその類がなかつたのだらう、後年宗麟の居城丹生島城にぎしまが薩軍の猛撃を受けて落城しなかつたの要害堅固であつたが故のみに非ず、國崩の偉力あづかつて功あつたのだらう。要するに、宗麟がその初め切支丹を保護せしは、新宗教を尊崇せしが故ならで外國貿易を昌盛ならしめんが爲めの外ならなかつたのである。

五 切支丹に關する大友家の紛争

義鎮の諸子

義鎮に數子あり。長を義統よしひだと云ふ、世子たり。次子を親家と云ひ、三子を親盛と云ふ。(一に親廣)君夫人田原氏、イゼヘルは次子親家を佛僧たらしめんとて、白杵の訪諏の森に一大寺院を建立して之れを親家に授けた。然るに親家は父義鎮と共に宣教使に會すること數次、遂に基督教の教義に感じ僧侶たるを嫌忌し母の意に反し洗禮を受て、切支丹信徒となつた。教名セバスタチャンと稱す、又彼女の生家の兄田原近江守親堅入道、紹忍の養子親虎は京都の公家柳原大納言きんたちの公達なり。七歳の時より田原家の養子となり豊後へ降つたが、義鎮夫妻之れを愛して殿中に居らしめ、娶すに其の愛女を以てせんとす。然るに義虎も亦親家の後を追ひ切支丹教徒たらんと決心した。養父紹忍大に之れに反對し百方手を盡して其の決心を驕おごらしめんと試み、或は京都へ送り還すべしと脅威し、或は其の居城に幽閉して以て之れを訓戒したるも頑として承服しなかつた。爰に於て紹忍書をカブラル師に送り親虎をして父母に従順ならしめんことを説諭せられたしと請求した。カブラル直に書を裁して親虎を諫め、神の誠命に反かざるかぎり務めて父母に孝順なるべしと教ふ。親虎之れを容れ以て父母に孝順なるべきを誓ふ

田原親堅の養子親虎

た紹忍大いに喜び直に幽閉を赦して自由の身とならしめた。然るに紹忍すゐにんの意は親虎をして全く切支丹の信仰を放棄せしめんとするにあるのを見て、親虎大に哀み、竊に遁れて宣教使の許に至り、其の決心を語つて洗禮を願ふた。終に其の志を達するを得た。親家ちかいかへ、親虎ちかともの二公子改宗せし以來藩中の子弟にして之れに習ふもの續々起り、その數五十名の多きに至つた。彼等は毎週數回臼杵うすきのゼスイト宣教使の宅に集つて切支丹の教義を研究し、出ては佛教の僧侶と争論して止まず、其の舉動ますます過激となり、聖子降誕祭すんごすまの日親家一隊の青年を卒すめて府内に至り、佛寺を毀ち、佛像を壞つた。佛僧等は之れを以て宣教使の教唆に歸し、倍々反切支丹の氣勢をたかめた。

親虎の洗禮を受るや、其の養父紹忍大に怒り復之れを一室に幽閉して日夜手段を盡して轉宗を迫つても其の効なきを見て、宣教使カブラルに書を贈り親虎を諭して佛教に歸依せしむるか、然らずんば宣教使に報いる處あるべしと告て之れを脅威した。カブラル固より之れを容るべきに非ず、斷然紹忍の請求を拒絶したので、紹忍憤つて人を遣はし宣教使を殺さんとした。信徒等之れを聞き皆武裝して宣教使の宅に集り保護の任に當つた。其の中には紹忍の弟某夫人あり、又女子の一隊もあつたと云ふ事だ。

親虎洗禮を受け養父に遺責せらる

蓋し紹忍が領主義鎮の命を待ずして恣に宣教使を殺さうとたくんだのを惡みしが故だ。爰に於て親家紹忍に對して大に争ふ所あり、因て紹忍已を得ず事の始末を義鎮に上申して之れが裁決を仰いだ。宣教使及び親家も亦義鎮に訴ふる所があつた。當時義鎮は城外に出て獵し、久しく歸城しなかつたので、是れ等は皆留守中の出來事であつたのだ。かくて義鎮雙方の訴訟を聞き、宣教使に決して惡意なきを聲明し、之れに危害を加ふべからざる旨を嚴命し、傍ら紹忍を諭して幸に事なく解決するを得た。されどイゼベル及び紹忍夫人の怒尙解ずして遂に親虎を殿中より放逐するに至つたれば、親虎は府内に赴き宣教使フェローの許に身を寄せた。義鎮之れを聞き人を遣はして親虎を慰諭し、宣教使に之れが保護を倚托した、偶々是の時外交上の紛議起り、義鎮意を内政に注ぐあたはざるに至り、暫くこの争議を中止するに至つた。

六 豊薩の關係

外交上の紛議とは日本と外國との關係を云にあらざ、狹義の外交にして大友家と島津家との間に起りし交渉を云ふのだ。伊東氏は日向の名家だ、その始め伊豆に在ること五代日向に移りて二十七代、通じて三十二代約七百年間綿々として第卅二世義賢の

時に至り、其の祖父從三位伊東大膳太夫藤原義祐は都於郡城に在つて日、薩、隅三洲を治め探題として令名あり、文武兼備の名將であつた、後ち入道して全總持永平直翁照眼大和尙と稱す、單に三位入道を以て知らる。其の夫人は大友義鑑の女にして、義鎮の妹である。その世子義益は永祿十二年（一五六九年）二十二歳にして卒し、其の寡婦及び二孤を父義祐に托す。爰に於て義祐その嫡孫義賢を立て、領主とす。伊東氏常に島津氏と善からず、戦闘相つぎ互に勝敗あり。天正五年十二月義祐島津氏の爲に飯野木崎原に敗られ、家族を擧げて豊後へ通れ來り、大友義鎮に依り、其の援助を得て領土回復の策を講ぜんとす、義鎮其の請を容れ、天正六年三月義鎮、伊東義益の遺子の爲に島津氏の與黨土持彈正少弼親成を撃て日向を恢復し、其の將佐伯宗天を日州務志賀の城に残し置いて島津氏の再擧に備へ、己も亦久しからずして此の地に移らんと欲し、一地を卜して兔裘の地となし、此處に切支丹的都邑を建設せんとて畫策する處があつた。斯くて義鎮は一先づ豊後へ凱旋して國政を處理し、家政を整理し、領地を其の子左兵衛督義統に讓つて隱退した。斯くて日向へ移轉するに先んじ、前約に従ひ其の女を以て親虎に娶はせんとせしに、義鎮の夫人イゼベルは親虎の切支丹信者と

大友義鎮洗禮を受く

なつたのを惡み之を拒んだので、義鎮遂に彼女を離縁し、其の子親家の妻の岳母を納れて後妻となし相共に臼杵に於て洗禮を受け切支丹宗に入門した。是れ天正六年六月下旬にして（一五七八年八月廿八日）義鎮四十八歳の時であつた。同年の秋義鎮の宗麟は其の後妻並に親家夫妻及び親虎を具して日向に移つた。宣教使カブラル、修道士アルメーダ及びジャンも（日本人）亦隨行して新都邑へ赴いた。（宗麟隱退の地を津）然るに、此の年十一月大友氏の兵島津氏の兵と日向の高城に戦ひ耳川に大敗し多く其の良を失ひ親虎戦死し、宗麟も亦臼杯に還り丹生島城に居る。或は云ふ宗麟が家督を義統に譲つたのは天正七年二月十一日にして耳川大敗の後である。

大友氏高城に大敗す

大友氏の武威大に衰ふ

高城大敗後、九州の豪族大友氏に叛くもの多く、筑前の秋月種實、筑紫上野介廣門等を始め其の外肥前の城主等皆島津義久にぞくし。又龍造寺隆信は肥前、筑後を侵し、大友氏の家運日に傾く、佛僧及宗麟の先妻は、是の不幸の原因を以て切支丹に歸し、宗麟が切支丹に歸依せしにより神佛の憤怒を招致したるものとなし、紹忍等と相謀り義統に迫り、宣教使殺戮、切支丹寺破壊及び切支丹嚴禁、佛教再興を以てす、義統之れに動かされて切支丹を迫害し始めた。切支丹武士大に之れを争ひ、宗麟亦之れ

伊東氏の一族及び大友家老臣洗禮を受く

に聲援す。爰に於て父子相分離す。是の時に當り大友氏の威勢ますます衰へ、肥、筑及び豊前を失ひ、僅に豊後一國を除すのみで、然も其の豊後も亦内部一致せず累卵の危に瀕した。爰に至つて義統悔恨し宗麟に謝罪して國內の平和を謀り、萬事宗麟の指揮を仰ぎ、己も亦自ら洗禮を受けんとせしが、佛教徒の妨害する所となつて果さなかつた。宗麟再び政を執るに至り切支丹復大に勢を得、貴族老臣の歸依者續出した。宗麟の第三子親盛洗禮を受けバンタレオンと稱す、田原紹忍の養子たり、伊東義益の寡婦も其の二子と偕に臼杯に於て受洗す、長子義賢をバルトロミーと云ひ、次子義勝をゼロームと稱す、安土の切支丹學校にあり、義益の妹にして伊東修理之助の妻も亦其の二子と共に切支丹を奉じた。兄をマンシオと云ひ、弟をジャスタ云ふ。伊東マンシオは即ち後年大友家を代表して羅馬へ派遣されたる使節の一人だ、義賢の叔父に當る飢肥伊東氏の藩祖たる祐岳も嫡男祐慶と共に信者となる。唯一人義祐のみは改宗しなかつた。是の時又大友家の老臣にして改宗したる者三十有餘人、士民の洗禮を受けし者數萬人であつた。老臣の中最も知られたる者は宗麟の女婿たる清田重時及び志賀小左衛門とす、志賀は數名ハウロと稱す、是れ後に大友氏の爲に島津氏に對して奮戦し拔群の功

をあらはし秀吉の感賞にあづかつた功臣である。(其詳なる事跡は西教) 宗麟又ワリニヤ
一ニを召聘し、白杵に於て二箇の學校を一時に經營した、一校には「ノウース即ち見
習僧十六人を置き其の半は印度より來た者にして他の一半は日本人である。」又他の一
校には生徒十六人を收容し之れには神學哲學を教授せりと云ふ。

大友氏の武威が如何に衰墜し居たかは天正八年二月戸次鑑連(立花道雪)が豊前の
岩屋城より豊府の諸老臣に宛て贈つたる書翰を見て察するに足るものあり。左に掲ぐ
る書翰は即ちそれである。

歳の慶を納む、去歲生葉の役遷延引退西軍益亟し。僕紹連と謀り僅に支持す、西討
の師己むを得ず、去歲公(義鎮が)屢々書を賜ひて言ふ、歳改まれば親ら師を日田
に出すと嚴駕の發するを日日跂望す、田原親貫の叛に屬ふて前七日北伐の命を聞
けり。知らず何の狀をか作す、眷々の懷已むあたはざるなり。故に特に急脚を遣は
し聞え奉らんとす。方今國家安危の機なり。設令ひ親貫猖獗なりとするも諸君の必
ず能く節を效し死を致めて善縮苟も名を墜し宗を辱かしむるを免がるゝは是にある
か、老夫犬馬の齡も溘焉遠きに非ず、肝膽を披瀝して隱諱あること無し、罪實に多

し。吉岡宗歎、白杵鑑連の歿せしより批政日に聞ゆ、天命佑けず、師旅屢々挫く、醜
聲流播して五尺の童子も憫笑せざるなし、此頃秋月豊府の惡三十九餘條に過るを疏
て遠近に暴示す。意ふに諸君も亦微かに之れを聞かん。首めに豊府の宗成大臣皆異教
を奉じ、寺觀、祠廟を毀ち神主佛像を擧げて水火に卑するを擧ぐ、近頃聞く、寺觀
廟社の田は悉く奪ふて臣僚に給與すと。豈此事あるや否や。源平以來毎に神佛に祈
禱し正道に由りて以て征討を行ふ亦著に甲令に在す、今反て其像を毀ち以て薪蒸に
充つ、僕愚昧にして事の是非を未だ明知せずと雖も、竊に聞く日本神道を以て邦を建
つと、豈尊奉せざるべけんや。宜しく天道に循ひ悔瀆することある無かるべし。公
春秋方に富む、能く政を勤め下を憫れまば其れ誰か慶幸せざらん。諸君補導して事
毎に正に由り非義に陥らしむるなかれ。人聖賢と雖も過ち無き能はず、萬一公に過
舉あらば相與に諫争し顔を犯すに至りて而して後臣節盡く、若し嚙默言はず、専ら
身の爲めに謀らば國事日に非なり。復た補弼の義に非ず、從今而往諸君其れ心を協
せ力を竭し、務めて國家に裨益せば願慮有ることなし。

知る親貫を討つ近頃師を出すべし。冀ふ所は力を行陣に竭し以て報塞を圖れ。道路

皆言ふ田原紹忍謹まず、親貫の父承龜末だ死せざる時、之れを遇するに道を以てせず、其の家人忿恨を致す、公室慰め解くと。僕以爲らく己に恨を釋き命を聽くものと、意はざりき親貫乃ち逆謀を懷き、浦部所在に火を擧げて號となし、堡を築きて之れに據る、惡逆宣露、復宥すべきなし。誅戮するに非ざるより豈他事あらんや云々。(井樓纂聞)

七 大友宗麟の排佛毀社

大友宗麟が神社、佛閣を破却し山伏、僧侶を追放したることは、世にかくれなき事實であるが、その中最も著名なるものは萬壽山の燒打、彦山の攻撃で。前者は元龜元年後者は天正五年の出來事にして、宗麟が切支丹に歸依する以前の事なるは注意すべき點だ。

大友記は宗麟の排佛、毀社の狀を記して曰く、宗麟公は夫の佛、神は我宗の魔なり、しかれば國中の大寺、大社、一字ものこらず破却せよとて一番に住吉大明神の御社(破却)を森紹庵に被仰付、紹庵馳せむかひやきはらひ、玉体にちかく押掛うちくずす、紹庵三日をすぎず死にけり。次に豊後の國彦山へ清田鎮忠に三千の人數を

排佛毀社の理
由如何

大友記にあら
はれたる排佛
毀社の記事

相添へつかはさる、山中三千の山伏身命を捨て防ぐといへども、死生不知の溢れも
の弓、鐵砲を揃へ責入れれば、山中の衆徒山々谷々へ逃げ散れり。鎮忠上宮までせめ
のぼり、一字ものこさず灰燼となしける處に、山伏一人高聲によばはり、大友七代
までの怨靈とならんと罵りて腹かき切り猛火の中に飛入りけり。扱て又萬壽寺破
却の承りは橋本正竹にて、彼寺へ行向ひ山門より火をかくる、時しも辻風はげしく
吹かけて、會廊、本堂、常行堂に燃つきければ寺中須臾の間に灰燼となつて佛像、
經論、聖堂忽ちに寂滅の煙と立のぼる。東堂、西堂は徒跣にて行末をもさだめず、ま
よひ出給ふ、まことに稀代不思議の惡逆かなと眉をひそめぬ者ぞなき。抑も彼
萬壽寺と申すは由利右大臣御建立の靈地として、往古より今まで、あいつゞきたる三
百餘町の寺領をめしあげられ、方八町の寺内に三百餘箇所の大伽藍いからをなら
べ建たるを只一片の煙となす、されば其のとがや有りけん、正竹にはかに重病をうけ
冷しき風にむかへ共、盛なる火のごとく、ひややかなる水を飲めども、沸きかへる
湯のことくあら熱つや堪へがたや、これたすけよと、悲み呼び悶絶しければ、醫師
看病のもの共、近づかんとするに、あたり四五間の中は猛火のさかんに燃へたるや

うに熱くして左右に近づく人もなかりけり。病付て五日にあたり、終にもがき死にぞしにたりける。吉弘内藏助國中の佛神薪にせよと仰付られれば、山山、谷々に走りて佛、神の尊容を日々五駄十駄づゝとりよせ、打わり薪となす其の時内藏助、阿彌陀觀音、釋迦の尊容を取集て湯をわかさせけるに、釜の中に鐵砲ほどのひゞきあり、下人は是を怪みて内藏助にいひければ、それは膠のやける音にてこそあれとて、少も騒がざるに、雷ほどの動搖して鳴りはためき、もえさし、ひとつ家の上にとびあがり、燃え來り、折しも魔風煽を吹きたて猛火既に壯にして、餘煙十方に覆ひければ、心づよき内藏助も周章ふためき出でんとするに、方向を失ひ身をもふて終に焼死にけり云々。

此の記事によれば宗麟は切支丹を信じたが故に亂暴にも神社、佛閣を破却し、衆徒を殺戮しやうだが、其の實然らざるものがある。既に前に述べた如く、宗麟が切支丹を保護せしは政路上より打算したる點が多く、基督教を尊崇せざるに非ざるも、其の教義に就て確乎たる信念はなかつた。さうして漸くその信仰を告白して入門する迄に二十有七年の歳月を費してのだと云へば、其の間佛教を排斥するの理由なく、却て之れ

を保護せしこと基督教と異なるなきの形跡がある。又しばしば名僧、知識を招聘して佛教を研究したることもあつた。宗麟が大友家を繼ぐに當り、其の制定したる大友家政道條々中の第一に、神社、佛閣を尊奉すべきを令し國中の神社、佛閣破損の時は所在の代官或は領主兼て出訴して修理を加へ、竝に祭禮等古法に背くべからざる事を命じ。又天文二十一年先公義鑑三年の忌辰には佛祭を殿中に設け、同慈寺の住職月心を召して厚く冥福を修せしめ、又酒を賜ひて語り、以て五常の義を問ひ、月心古書を繕いて其の義を申談しければ、義鎮大に喜び爾後しばしば之れを召して其の説教を聴聞したとある。其の髪を削り休庵宗麟と號したるは永祿五年にして、翌六年丹生島城を築き、豊府より此處に移りたる後も、祐範上人の高標を欽慕して、爲めに一字の寺院を産が島に建立し、此處に居らしめたるが如き、又海添に一寺を建て、寶岸寺と名づけ、以て其の菩提所となしたるが如きに徴するも、未だ國內の寺院を故なくして破却せしむるの意なかつたのや知るべきだ。而して宗麟が終に排佛、毀社の舉に出でしは、愚味の巫祝、奸僧等が切支丹の隆盛ならんとするを嫉視し、愚民を煽動して暴動を起さしめ、或は大友家を呪呪して滅亡を祈り、或は大友氏の敵に内通して反逆を

企たつる等、しばしば敵意を表して横暴を極めたるが故にして、畢竟、佛僧等が自ら招いた災害であつたのだ。大友記に宗麟公キリシタンに成りたまふと題して記して曰く、

南蠻國よりキリシタンと言ふ宗旨亘りて府内丹生島に一字を建立し其の宗旨をとく、清田鎮忠、田原近江守親堅紹忍彼宗につき日夜聴聞す。宗麟公御聞あり、近江守をめされ切支丹宗の儀を尋ねたまふ、近江守九國一の守舌人なれば、切利支丹外道の仔細をさも面白くこそかたりけり。宗麟公被仰はむかし頼朝公の仕置にも、佛神をしづめよは第一に見えたる大法なれば、某も佛神をかつげうす、さればよき事はなくして世の禍多し、諸佛諸社を破却せんには外道宗にあらんば成りがたしとの給ひ、吉利支丹にこそなり給ひけれ、一年國中の社家義鎮公を調伏仕ことあり。此の儀御みまに立ち大きに御きげんあしく。予が武道長久のきたうなどこそ尤もたるべきに、さはなくして、某を調伏すること手がひの犬にすねをくはるゝ通りなり。事をよくせんとて悪くすると云ふ斯様の儀なり一人も残さず死罪にをこなはるべき由仰出されけれ共、吉岡宗親とどめ奉り、御領内を拂ひ、宗麟公其いきどをりを

宗麟公切支丹に成りたまふと云ふ大友記の記述

佛教僧侶の横暴

散じて吉利支丹になり給ふとぞ聞えし。」

當時佛教僧侶は、都會にしても、地方にしても、何れの處にても、押なべて横暴を恣にせし時なれば、大友領内の佛僧等も其の態度極めて専横放恣はして動もすれば政治の妨害をなさんと巧んだので、宗麟も之れが統御に一方ならぬ苦心を感じたのであらう。殊に宗麟が外國貿易の關係上切支丹を保護せるを妬み、領主調伏の暴擧に出でたもののやうだ。

又宗麟が由須原八幡の祭禮の差止めたる動機を記して曰く、

豊後國の領主由須原八幡の御神事は毎年八月十四日なり、明る十四日まで放生會御祭として上古より取をこなふ。今年も恒例なればとて、八月十四日午の刻はゆづはらよりいくしの濱かたんの湊へ御幸をなし奉る。供奉の人々には先一番に隨兵の先陣にて高崎、上野、牧橋、賀來、宗像以上六騎聲花によろい其の勢三百餘人めしぐして二行につらなり先行す。二番にちんとうとて鬼の面をかけ、其さま鬼形の如く出立てつかいたり。三番に供僧衆百二十人御こしの前後に供奉す。四番に宮司、小宮司、きたいぐうじ、さいしよなどと云もの我も我もと金銀をちりばめて打つ、

由須原八幡の祭禮に關する珍事

く。大宮司は狭間三十騎計にて打たりけり。いくしの濱の御警護には田北紹鐵、山下和泉守色々の毛糸の太く逞き馬にあつぶさかけて乗りたりけり。相隨ふもの三千餘騎てり輝やく許りに甲冑をたて、濱の手をかためらる。見物の貴賤巷に充満してゆゝしき壯觀かなどさゞめきあへる所に、恐怖なりし事こそあれ、御與俄に重くならせたまふ事大磐石のごとくにして、御與をあげ奉らんとしけれ共、敢てうごき給はず、如何にせんとあきれたる處に、老僧一人御與の前に畏り三度首をかたむけ、みくじをととりて、御神事を遊ずはらへ還行をなしたてまつりしはたゞ事ならぬありさまなり。

御神事の爲體宗麟公へ申上る。屋形きこしめし、さては世の障りなる祭をば渴仰すべきにあらず、但し祭禮をとどめんにはしかじ、永くどどむべきとの給ひける云々。

由須原八幡宮の祭禮は一家年中行事の

由須原八幡宮の祭禮は大友家年中行事の一にして生石と云ふ所に御旅所あり、六十一年毎に大神會と云ふを執行す、神與は六年毎に改め造り舊き物は國中所々の八幡宮に與へらる。神事の時大守は諸老臣を召具して參列するを例となす。然るは此年の神事には祭禮半ばにして御輿動かず、何事か神怒を惹起せしものあらんと疑念を生じ

人心恟々として騒動したので宗麟之れを聞いて祭事を差し止めたのだと云ふ。思ふにこれは奸僧等のたくんで宗麟を威嚇せんともくるんだことのやうだが、却て宗麟の爲めにそのうらをかゝれたのではあるまいか。夫れ祭は豊年にも不増、兎年にも不減とこそきくに、上古より此方關ぐる所なかりける祭禮を此時にいたつて永く捨てければ神慮もいかかとはかり難くぞ思ひける」とは反切支丹の徒が宗麟を非難せし誣言であつた。畢竟、義鎮の宗麟が名山、大寺を破却せしには皆それ／＼相當の理由があるので必ずしも一把一束に焚焼せしめたのではないのだ。たとへば、有名なる大寺萬壽寺の焼打の如きは、宗麟の侍臣にして罪を犯せし工藤帶刀なる者を寺内に隠匿し置きながら宗麟の使者に對し僞て工藤なる者の寺内にあらざる旨を陳辨し、之れが引渡しを拒絶せし結果であつた。慈悲を旨とする佛徒が寺内に身を投じて救助を求めた者を保護しやうと試みたのは、さることながら、進て之れが命乞をするの美譽に出でず、僞て宗麟を欺かんとせしは何事ぞ、宗麟たるものみす／＼罪人の寺内に匿れ居るを知りながら、僧侶等の拒絶に遭ふてをめぐ／＼と引退くべきに非ず、怒つて之れを焚滅せしは無理ならぬ事ならずや。一つを以て他を推すべしだ。以下彦山攻撃の顛

未を叙述して之れが真相を明にせしやう。萬壽寺は是れより十五年後の天正十四年薩軍豊後に打つた時、再び島津兵の爲めに焼かるとあれば、その後再建を許されて居たものの如しだ。

八 彦山の攻撃

彦山、又の名を英彦山と云ふ、筑前、豊前、豊後の三州に跨り、朝倉、田川、下毛日田の四郡に渉る、標高三千七百尺の高山にして、峯勢八方に分れ、數里に延く、長野山、秋谷山、高千穂峯の三峰環立して馬蹄の跡をなし、西方に向つて開口し彦山川其の間を流れて遠賀川となる。金山、火山質、集塊岩を被り、耶馬溪一帯に及び、風化水蝕して奇景を呈す、其東嶺來菩提山西嶺寶禰山最も有名なり、山上に神社あり、姫嶽と相對峙し皇孫尊の靈蹤を傳ふ、老杉簇立雲霧深く銷し、眞に靈場の感をなせり。山中に十谷四拾八屈ありと稱す、西山二〇七五尺の所に、多少の平地を存す、此處に彦山市街あり、もと此の神社の供僧坊なる靈山寺の在りし所にして、中世以後は修驗道者の行場となり、戰國時代の盛時には、堂、塔臺を駢べ山中の衆徒三千の坊舎あり、兵杖を蓄へ、割據自ら封じ、富强諸侯に匹適せりと云ふ。(日本百科辭典、大日

彦彦山の縁起

本地理) 又其の縁起に曰く、大古天津日子忍骨尊の靈蒼鷹に化して此嶺に降止し、水晶石に影向し本體を顯し給ふ。之を高住宮と申す、役行者小角、高住宮の舊跡を求めて登山せし時、更に少年の姿を現して行者の大願を讚歎し給ひ、行者云々の言によりて忽ち夜叉の形に變じ、大身忿怒の相を現し給ふ即ち今の豊前坊大行夜叉、飛行夜叉の尊體なり、然りしより靈驗日夜にあらはれ時に或は山岳を鳴動し、巖壑を震駭す、故に世の人之を天狗倒と云ふとかや。九州軍記は彦山に關する通俗的傳説を叙して曰く、彦山は僧房三千、彦山權現と崇め、本地西天竺の靈神となり、崇神天皇の御宇に當りて天竺國より五つの劔を東に向け投げ給ひ、吾が縁の有る所に留まるべしと誓ひ給ふた、一は紀伊國室の熊野に留り、一は下野國日光山に留り、一は出羽國羽黒山に留り、一は淡路國乙鶴羽峰に留め、今一は豊前の彦山に留る、彦山に飛び參らせ給ふ時は、其の形八角の水精(晶)にて御身三尺餘りに見え給ふ、其の後繼體天皇の御宇に、大唐より善正和尚來朝有て此の山を草創ありしかども、未だ佛法流通の時に至らずして頓に歸唐なりにける、慶雲二乙巳役行者彦山の峯を開き玉ひしに權現の靈現れ給ひ、夫れより以來靈驗九州に普く、嵯峨天皇の御宇に法蓮上人中興し、種々の神異

を示さる、其の頃大唐より異賊襲ひ來ることありしに、由里右大臣を大將として數萬の軍兵を西國へ指し向らる其時彦山は殊更に丹誠を抽でべく由、法連上人別勅を蒙り、肝膽を推き祈りける實に神佛の加護にや、異賊一戰して敗北して僅に討殘されて歸りける云々。法連上人は其功によりて大和尚の位を賜はり、嵯峨天皇の御宇に至り始て勅願所となりぬ。始め彦山座主は衆徒の中より碩徳ある者を選ぶの習慣なりしが、選舉毎に競争はげしく、騒動止まざりしかば、後には親王を請じて貫主となさんとの議起り勅許を得て助百親王を迎へて貫主となしぬ、此れ當山座主要帶の始なりと云々。

此の如き神秘的由緒を有する彦山に對する人民の渴仰一方ならず、隨て此處に奉仕する衆徒を畏敬すること甚しかりしかば、山伏、行者は之れを利用して私慾を逞ふせしより、次第に墮落し遂には王命をも恐れず、守護の下知をも用ひず利さへ隣國の溢れ者を集め、動もすれば往來の旅人を煩はし、民家を脅かし諸人の迷惑一方ならざりしかば、宗麟しばし使者を以て座主に注意する所ありしかども、惡僧等は管に座主の諭告を奉ぜざるのみならず、往古より守護不入の山なりとて、ますく我意を

彦山の山伏
行者の横暴

募り、果ては秋月家に通じ、大友家に敵せしかば、宗麟大に怒り當家の下知に背くのみならず、一山衆徒擧て秋月に加擔するとは奇怪千萬なり、急に之れを退治すべし、とて清田阿波守鎮忠、上野權正鎮俊を大將とし、其の勢四千三百人、彦山に對て出陣せしめた。豊筑亂記は記して曰く、「近年僧坊の榮華身に餘り昔より守護不入の山なりとて、惡僧共己が氣儘に振舞ひ、他國より如何なる惡徒、叛徒と雖も、山内に遁げ込みて行者、山伏共に頼みければ、皆之れを留めて一人も歸すことなし、故に若き山伏等は彼の惡徒を語らいて、徒黨を企て、近國の在々を駈廻りて、夜盜、押入を爲すもの多かりける、豊前、豊後、筑前は大友麾下の國々なるより、宗麟公より使者を座主の御坊に遣はし、惡僧等の狼籍者に下知を致し諍讞にすべきやう數回仰せ越させるも、大勢の惡僧共座主の御坊の下知をも耳に聽入れず、惡業いよ／＼募りければ、宛がら曠野に火を放てるが如く、所詮手に餘りけるにぞ此の上は武威を以て制するより外なしとて、豊府は日田、玖球の侍に下知し、成敗の沙汰に及ばれければ、山僧共は自ら豊後を敵とし、秋月種實に心を寄せたりける」云々。此處には大友氏先ず令を下して成敗せし故、衆徒等秋月氏に寄れりとあれど豊薩軍記には惡僧等我儘をなし、秋

月家に與黨し、大友家の政務に従はざりし故、軍兵を差向けられし如く記せり、何れにしても彦山衆徒の横暴なりしは諸書の記する所一致したる事實である。

宗麟其の家臣
清田、上野の
兩將をして彦
山を攻撃せし
む

大友宗麟が其の家臣清田、上野の兩將をして彦山を討伐せしめたのは天正四年四月であつたが、如何なる故にや、此の時は單に山の腰を取圍むのみにて、敢て山上に攻上らなかつた、流石に猛き武夫も斯る由緒ある神秘的の靈場を攻撃するを氣味悪く感じたのであらう。蓋し是れ等の大將の一人清田鎮忠の如きは是れより二三年の後、洗禮を受けて切支丹となつたのだが、當時は未だ偶像に對する迷信家であつたのだ。其の後大友家の軍事多忙にして彦山を攻むるの餘勢なく、僅に之れを包圍して牽制し居たるもの、如く、天正九年に至り、終に山上に攻登り、權現の社頭を始め、僧坊、民屋に至るまで、一字も残さず、焼拂ひ、佛像、祭器、經卷等皆一時の煙と化せしぞあはれはかなき事であつた。傳へ云ふ、此時二人の山伏高聲に呼ばはり、大友宗麟七代までの怨靈となんらと罵詈で、腹かき切て猛火の中に飛び入つたと云ふ事だ。死に臨んでも尙自己の罪惡を反省せず、却て領主を呪咀するが如き、惡僧の怨靈何程の事かあらんだ、宗麟たる者毫も之を怖るゝことはなかつたが、一山の衆徒の遁走せし者共

が、大友家の敵なる島津、秋月の軍に投じて種々の謠言を放ち、豊府の宗室大臣等は皆異教を奉じ、寺觀、祠廟を毀ち、神社、佛像を擧げて火中に投ずと唱へ、邪宗徒征伐を宣傳して衆心を惑亂せしは、大友家に取りて尠なからぬ打撃であつたらう。其の後大友家の武威衰ふるに至り、彦山復再び惡衆徒の巢窟となり、亂暴狼籍を恣にせしかば、天正十五年秀吉九州征伐の砌り隣國の訴により之を破却しやうとしたが一山衆徒の嘆願により誓紙をとりて之を赦したと云ふ事だ。

九 土佐の國主一條兼定

其の頃土佐の國主一條兼定は長曾我部氏の爲に追はれ豊後に來て、大友氏に寄り、宣教使に接し回心して洗禮を受た。そもく土佐の一條家は京都の公家一條家の別家である、應仁の亂後京都大に亂れ、公家諸姓の人々も住馴れし金殿玉樓を盡く兵火の爲に焼拂はれて、住ふに家なく、難を避けて四方に離散せしが、此の時一條教房卿は西海に漂泊し、御子房家卿は土佐に遁れ、長曾我部に寄り後將軍義政より土佐の國司に任せられ、幡多郡中村に治した。數代を経て、房基に至る。其の簾中は大友義鑑の長女にして宗麟の姉妹であつた、永祿年間房基の子兼定國司になつた。兼定素行修

土佐の
一條家
の由來

らず、晝夜只酒宴遊興に耽り、又は山河に漁獵を事とし佞人を愛して忠臣を退け、租税を重くして領民を虐げしかば、民心離散す、初め兼定伊豫の小名宇都宮氏の女を娶つて子ありしも民間の美女を愛して之れを容れ、遂に宇都宮氏を離縁し、後ち又其の子を質として大友宗麟の娘を娶つて室とした。然るに其の頃長曾我部元親長岡郡岡豊より起つて既に土佐六郡を略取し、全國を併呑するの志あり、反間の謀を廻らして一條家の忠臣土居宗算を殺さしめ、是の機に乗じ兼定を廢して之れを國外へ追放し其の國政を専らにするに至つた。

兼定の追はれて豊後に至るや、宗麟厚く之れを遇し臼杵に假の屋形を構へてこゝに居らしめ、使を土佐に遣はし御臺所姫君を迎へ參らせたので兼定も聊か慰安する所ありしも、其の寂寥たる生活は往事の思出となり、姑蘇台の秋の露深く、萩の葉傳ふ風の音、凡て見聞するもの一として心を傷ましめすと云ふ事なく、僅に詩歌を翫ひて閨々の情をやつて居た。然るに測らずも宗麟の紹介によつて宣教使に接するの機會を得て、爰に始めて切支丹の説教を聞き、又親しく交際するに當つて世に斯る有徳の君子あるに驚嘆し、深く宣教使の人格に感服し、モンツ師より受洗して切支丹に歸依した。

兼定の受洗

兼定の末路

教名をパウロと稱す、(天正四年一五七六年なり) 彼や放縱によつて國司の職を失ひしも、今や悔悟謹慎して不思議なる神の恵に接するに至つた。其の後兼定伊豫に入り譜代の郎等家の子を集めて土佐へ打入りしも戦利あらず、退て伊豫の戸島に陣し、法花律則延に寄る。兼定再三の失敗によつて其の身の不幸をかこち、是れ何かの罪惡の報として來る懲罰の一種だらうと思惟し、書を宣教使カブラルに寄せ、其の身にふりかゝる艱難頻出の源因は如何なる罪惡の報酬なるかと質問した。カブラル直に書を贈つて彼を慰諭し、艱難必ずしも罪惡の報酬に非ざる旨を辨じ、世の仁人君子にして往々甚大の艱難に遭遇する者少からざるの例證を聖書より引照して之れを教へ、其の誤解を正す所あり、兼定大に悟り、運を天に任せて以て今後の處置をなさうと考へ、當時十三歳の少年なる其の長子内政を宣教使に托して有馬の學林へ送り、其の身は敬虔の生涯を送つて居たのに、長曾我部氏の派遣せし刺客の爲に重傷を負つて復た立つ能はざるに至り、其の信仰愈々厚く、數年の後遂に天の召を蒙つたと云ふ。其の後長曾我部元親兼定の子内政を招き其の女を以て之れに娶せ、赤岡の大洋城に置いて國司となし、己れ後見として權を專にせしが、二年にして復之れを追出した。内政時に歳二十、二子あり、

妻子を携へて伊豫に遁れ後ち遂に殺さる、其の二子は京都の一條家へ引取られたと云ふ事だ。

第五章 近畿地方に於る切支丹の布教

一 京都及其附近の布教 其の一

後奈良帝の天文十九年耶蘇組の宣教使フランシスコ、ザビエー始て京都に來り、切支丹宣布之勅許を得んと試みしも、故ありて果さず、滯京僅々十五日にして退去せしは、前章既に叙述せしが如し。其の後同組の宣教使ガスパル、ヴィレラ Gaspar Vilela の京都に來つて布教に着手せしは永祿二年にして、當時を去ること六年の後であつた。是れより先き比叡山の老僧某なる者近頃九州地方へ渡來せし新宗教の噂を傳聞し書を以てトレー師を招き其の教義を聞かんことを求めたが、トレー師は其の身老て長途の旅に堪へざるのみならず、九州地方の傳教に忙がはしくして、今は登山の望なきも他日同組の宣教使をして代て訪問せしむるを約束し、贈るに和譯の切支丹要義を以てせしが、爰に至りてヴィレラ師を遣はして其の招聘に應じたのである。斯てヴ

比叡山の老僧
宣教使を招く

宣教使ヴィレ
ラの上京

イレラは日本人の傳道士魯連須^{ろくんでんす}及び他の傳道士一名を伴ひ、豊後より船出して泉州堺に上陸し、進て比叡山の麓なる坂本村に至り、トレー師を招いた老僧の安否を尋ねしに、豈計哉夫の老僧は數日前病死せりとの訃音に接せんとは、爰に於てヴィレラは渡に舟を失ひし心地にて一時痛く落膽せしが、幸に老僧の後繼者である大善坊と云ふ僧侶の同情を得て、一日其の寺院に於て説教を試み、且つ其の忠告に従ひ天台座主に會見して切支丹布教の允許を受んとて、延暦寺に至つた。然るに門卒等ヴィレラ等の異容を怪み、門内に入ることを拒んだので、已を得ず登山の目的を放棄し、其の年十月を以て皇城の地に入つた。

初め比叡山の僧侶等が遙々書を寄せて九州より切支丹の宣教使を招待し其の來るに及で之れに同情を表せしは、宣教使が印度を経て來朝せしを以て新佛教を宣傳するの徒だらうと思惟せしに由るならんか。當時基督教のことを俗に切支丹佛法と稱し先に山口の大内氏が切支丹の布教を許可するに當て、其の令書に新來の切支丹宗を佛法として明記せしは既に述べた通りだ。又實際宣教使中殊に佛法僧の姿をなしたる者もあつた。現にヴィレラの如き京都へ登るに當り、髪と髭とを剃り落し、身に僧服をまと

比叡山の僧侶
が宣教使を招
いた理由

ひ、一見佛僧と異なるなき容姿をなして居た。是れ比叡山へ登らんが爲だつたと云ふ事だ。

其の頃京都にては足利義輝將軍として政を執り、三好長慶其の執權職となり、多年の戦亂漸く治り戦國中稍小康を得たる折であつたが、ヱイレラの一行は京都に入りてより十日間専ら断食祈禱を勤行して宣教の準備を整へ、期日に至り、身には佛僧の服装を着け、手には十字架を持ち、京都市中の最も繁華なる街頭に現ははて路傍説教を試みた。人々珍奇の事として四方より來集する者數百人の多きに達したが、ヱイレラの奇異なる舉動と、其の調子ばつれの日本語とは、群衆嘲笑の目標となり、喧騒甚しく説教に耳を傾くる者はなかつた、然るにヱイレラは群衆の罵詈、讒謗を毫も意に介せざるものゝ如く、毎日路傍に立ちて説教を續けて居たが、其の熱誠なる態度と、其の説く所の教義とは、いつしか聽衆の心を感動し、其の名聲頓に擧り、有力なる佛僧及び市民の改宗する者起り、山科の土豪某の如きは其の朋友拾名と共に洗禮を受けるに至り、其の勢將に盛ならんとするに至つた。爰に於て佛僧等大に狼狽して之れか妨害を試み、蜚語、流言を放ちて宣教使を傷けた、終に家主に迫つて宣教使を退去せしめ

たので、ヱイレラ等は己を得ず漸く他に一家を僦して住居することにした。其の家に屋根あれども半ば破壊して雨雪を凌ぐあたはざる牛小屋の如きあばらやであつた。ヱイレラ等は是處に在つて毎日夜となく、晝となく群衆の侮辱瓦石を浴て安眠すら爲し得ざる状態であつた。然も心ある人々はヱイレラの忍耐廉潔なるを愛し、窃に訪ひ來る者多く、終に三好長慶に知られて其の面前は於て説教するの光榮を得、その庇保によつて足利將軍義輝より切支丹布教の免許を得るに至つた。或は云ふ其の前後大友氏の紹介狀と、或る高僧の案内とによつて義輝將軍に謁し多大の恩命を蒙つたのだと。ヱイレラは既に將軍の保護を受け、切支丹宣布の特許を得たれば、佛教徒の反抗も一時静謐となり、是れより公卿、佛僧、武士の切支丹に歸依する者多く、義輝の父翁近衛殿の如きも、しばしばヱイレラを訪問して其の教を受けたと云ふ。而してヱイレラは是れ等奉教人より寄附金を集め、漸く一大家屋を買ひ其の一部を天主堂となして切支丹の布教に努力して居た。

改宗して基督教徒となつた佛僧侶の中有識の者尠ならずであつたが、就中博學熱心を以て有名なる佛僧某の改宗せしことは京都市民を驚嘆せしめた。この佛僧の姓名

詳ならず、西教史にはケンシウと云ふ、禪宗の僧侶に慧春と云ふ者あり改宗して梅庵と稱す、恐らくは同人ならんと云ふものあれど、是の佛僧は禪宗に非ずして法華宗であつたやうだから多分別人だらう。そは兎もあれ、是の佛僧の改宗始末に關し西教史に記する所を略記すれば左の如し。彼は山中に籠居すること四拾年にして佛敎の奥義を極め其の著書も尠ならず學博く徳高く、當時の佛僧中有數の善知識であつた。其の室内に掲ぐる所の秘藏の匾額あり、枯木の原頭に在るの圖を畫き其の下に左の意味の題辭を書て居た。

原頭に枯木あり、誰か汝を此處に置けるやと問は、是れ造化の主なりと答へん然らずんば薪とせられんのみ。

嗚呼人間は奇異の物なる哉、是れ生死有無を以て成る、常に足ることを知らずして却て足ることを求む已に生るや死に赴く。

彼は近頃京都に來た新宗教の宣傳者ヱイレラの博學なるを聞き、一日ヱイレラを訪問し傲然として語りて曰く、我は佛法の教師にして世人を濟度する身なれば、宗教の奥義は能く知る所だ。されば我の來たのは敎を受けん爲に非ず、異國の珍談、奇聞を

聽かんが爲であると、ヱイレラ師は佛僧の驕傲なるに反し、容を正し、禮を盡し、最と謙讓なる態度を以て、貴顯にして有徳なる名僧の來訪を辱ふし下問を垂るゝの光榮に接す、何の幸か之れに過ぎんと、辭を卑ふして懇懃に彼を迎へ因て以て其の心を緩和し、それより尋て懇々と切支丹の要義を説いた所、ケンシウ大に感動し、直に改宗を誓ひ四拾年來の苦心に成つた佛書を火中に投じ其の決心を示せりと云ふ。ヱイレラ師の京都へ來る二十年前或夜ケンシウ夢むらく、僧あり西域より來つて天國の道を敎ふと、其の翌日不思議にも聖フランシスコ、ザビエーの山口に來たのを傳聞した。然るに其の後何の沙汰もなく杳として聞く所がなかつたのに、近頃ヱイレラの名聲近畿地方に弘まつたので、是れ必ず夢に天國の道を敎へた其の人だらうと思ひ、其の説敎を聞かん爲め本國播磨より京都へ來り、爰にて先づ敎を受け、一旦歸國して後ち再び來つて洗禮を受けたのだ。この夢の話はヱイレラ師がケンシウより聞いた事だと云ふ。ケンシウ改宗の後品行方正にして切支丹の宣布に熱中して居たが、之れが感化を受けて改宗せしもの尠からずで、叡山の僧侶にして信者となつたものも十數名あつたと云ふ事だ。

永祿四年ウイレラは、トレー師長の命により堺市の傳道を開始した。堺は當時日、支貿易の良港にして百貨輻輳頗る繁榮を極め富豪多くして逸樂の風習全市を覆ひ、切支丹の説教を聴く者は多くあつたが、信ずる者は甚だ尠なく、其の効果少しもあらはれなかつた。西教吏は是の時堺の君主一家舉て改宗せしことを記載せり。思ふに是れ戰國諸侯の失敗して此の地に隱退せし者の一人だらう、前さきの高屋たかやの城主にして三好氏の爲に退けられた畠山高政はたけやまたかまさは是の地に於て洗禮せし者の一人なるも、そは永祿八年の事にして是の時より四年の後なれば、夫の君主と云は何人なるや詳ならず。斯くて、ウイレラは堺市の布教望少なきを以て速に京都へ赴かんと思つて居たが、當時京都には三好氏對六角氏の戰爭によつて騒亂を極め居たれば、已を得ず堺に止まること二年、漸く永祿六年を以て再び京都に至つて布教した、さうして今回は豊後より孤兒院の兒童を招集して、少年傳道隊を組織し、盛に布教に活躍し、傍ら佛教を攻撃非難したので佛僧等大に怒り、叡山の僧侶相議し、切支丹の許すべからざる理由十三ヶ條を擧げ松永久秀に上書して切支丹を訴へた。

叡山僧侶の横暴なりしは世人の周知する所なり、彼等は皇城鎮護を以て自任し、京

叡山の僧侶十
三ヶ條の理由
を以て切支丹
を訴ふ

都を以て其の勢力範圍となし、之れが爲めしばしば一向宗及び法華宗と衝突を起した。佛教他派に對する關係にして此の如し、焉ぞ切支丹宗の蠶食を等閑視せんや、又況哉切支丹宗は飽まで佛僧を誹謗する排他主義なるに於てをやだ。されば佛僧等はしばしば新宗教切支丹の宣布を妨害し、時には朝廷を動かして以て宣教使を皇城以外に放逐しやうと謀つたが、三好長慶等の爲に妨げられて果さず、苦心の結果終に訴狀を呈出するに至つたのだ。其の十三ヶ條の一に曰く、神道は皇國開闢以還の國教なるに、切支丹ウイレラは神佛ともに破壊せんことを謀れり、彼は神道、佛教の宗敵にして殊更彼は外國人なれば、希くは之れを日本國外へ放逐せられんことを乞ふと。又其の第二條に曰く、日本國內に切支丹教の根柢を絶滅せんが爲に國禁を設け、若し切支丹を奉ずるものあらば死刑に處すべし、抑も切支丹宗は國亂を醸し、黨派を起し國家を顛覆するの基なり、故に切支丹者の在る都邑は處として騒亂を醸生せざるはなしと。松永久秀訴狀を受理し、佛僧に論して曰く、一旦將軍の命を以て京都に在任するを許せし外僧を故なくして退去せしむる能はず、依て先づ切支丹の是非を檢案し、其の教旨にして果して訴狀に云ふ如く、國家の安寧治安に害あるものならば、其の旨將軍に具

檢斷の結果と
支丹の勝利と
なる

申して以て其の裁下を仰ぐべしと、久秀則ち當時の公卿中識者の譽高き大外記清原賴賢、及び長慶の弟にして河内國高屋の城主三好山城守康長（笑岩と號す）の二人に命じて檢斷せしむ、二人則ち教徒ジャクなるもの、所説を聽き、又傳道者魯連須の理を盡したる辯解に接して大に感服し、檢斷者二人は嘗に切支丹宗を是としたるのみならず、彼等自身も亦進て切支丹信者となり其の理由書を公にするに至つた。始め佛僧等の訴狀を提起するや、グイレラは教徒等の勸告に従て一旦堺市へ退き判決を待ちつゝあつたが、今此の不思議な意外の報告に接して夢がとばかりに驚喜し、半信半疑の間に京都へ還り、賴賢、康長に接して始て其の信仰の確實なるを認め喜んで、之れに洗禮を施した、是の時三好長慶の親戚にして河内國飯盛の城代たる白井備後守も亦洗禮を受けサンセズと稱し其の子も亦改宗してマンシオと稱した、爰に於てグイレラは魯連須を飯盛及び三箇島へ遣はして布教せしめ、尋て自ら出張して白井サンセスの臣下五百六十人及び三箇島領内の士民五千人に洗禮を授け、是處に壯麗なる切支丹寺を建設した。この白井父子は最も熱心なる信徒にして爾來宣教使の艱難を救つたこともしばしばあつたと云ふ事だ。

西教史參考

西教史には審判者二人の名をサマシ殿と云ひシコン殿は皇帝の式部長官にして教部事務を兼任する人なり。又ザマシ殿は三好殿の主簿官たりとある。前者は大外記清原氏なるべしと雖も、後者は或は山城守康長に非ずして三好三人衆の一人たる岩成左道にはあらざるかと思はるゝふしがないでもないが、確證なきを以て本文は切支丹大名記の説に従ふ、又本文白井とあるは原文 *White* 三箇殿と稱す、三好實休の事だらうと云ふ人あり。長慶の弟に實休と稱する人二人あり、義賢、冬康が是れた。然るに義賢の實休は永祿三年島山氏と戦て死したれば冬康の實休ならざるべからずだ、然るに、冬康も亦久秀の讒言によつて長慶の爲に殺さる。切支丹大名の記者は *White* は *Shirai* の誤だと云ふ、其の是非明ならず。

佛僧徒憤激す

切支丹宣教使を放逐しやうとたくなんだ佛僧等は斯くして却て彼等に不利の結果となつたのを憤慨し、尙ほも彼等は佛教徒を煽動して切支丹の徒を迫害して止まなかつた。然るにグイレラ等は三好長慶の保護によつて危害を免かるゝことを得たるのみならず、宣教師フロエーの所に九州より來つて應援するあり、其の勢倍々盛大となり、諸侯の改宗せるもの頻々として起るに至つた。

二 京都及其附近の布教 其の二

佛僧等が訴狀を提出せし年即ち永祿六年より永祿八年足利將軍義輝の弒せらるゝに至るまで、二ヶ年の間に近畿地方の大小名にして改宗せし者を舉れば、先づ指を高山

近畿地方の切
支丹大名

氏に屈せねばならぬ。足利將軍の近臣和田惟政の弟にして後攝州高槻の城主となつた人に高山飛彈守なるものがある。彼は學識を以て誇り其の技量能く切支丹を説破し、宣教使をして其の非を覺らしむるを得ると自信し、グイレラに會して論難攻撃を試みたが却てグイレラの爲に説破せられ、傳道者魯連須ルレンスより教を受くること數日、終に其の所説に感じ妻子と共にグイレラ師より洗禮を受けた。教名をダリオと云ふ。其の長子は即ち高山右近南坊にして教名をジャストと云ふ。右近は此の時僅に十四歳の少年であつたが、これぞ後に日本切支丹宗の歴史に大關係ある人物である。飛彈の兄に澤某なるものあり、松永久秀の家臣となり、伊賀の國澤の城代たり、彼も亦改宗して切支丹宗を奉じフランシスコと稱す。其の仲兄和田惟政は未だ改宗せざりしも切支丹を是として之れを保護した人だ。是れ皆高山飛彈守の誘導によつたものだ。丹波龜山の領主内藤德庵とくあな（如安）も亦是の時代の有名なる切支丹大名だ。彼は足利氏の直臣にして其の主君に對し最後まで忠義を盡したる人である。其の母は熱心なる佛教信者であつたので其の死するに及び主義と孝道との兩立せざるが如き破目に陥つて大に心を痛めた。佛式によりて葬儀を營まんか、切支丹主義に戻るを如何にせん、其の主義を固執

して佛式を排せんか、孝道に欠くるの觀あり、然のみならず、當時佛式の葬儀は徒に華奢に流れ、數百の僧侶に與ふる布施の爲に多くの財寶を要し、子孫爲に貧困するを憂ひ此の惡風を改めたいとの念切なるものがあつて、爰に一計を案じ、佛式の葬儀に要すべき多額の資財を領内の貧民に施與して亡母の記念として佛、基兩教徒の賞讃を博したと云ふ。（内藤の改宗は永祿七年なり）其の他管領家の子孫たる前の高屋の領主畠山高政は永祿八年堺に於て受洗し全家切支丹となり、三好長慶の老臣にして河内國八尾の領主池田丹後守も亦改宗してシメオンと稱した。

グイレラが京都へ召喚されてより以來、毎年正月、拜賀の爲め足利將軍の殿中へ參内するを例とせり。永祿八年の正月にはグイレラ新來の宣教使フローエ師を帶同して參殿し、親しく將軍義輝及び御臺所近衛氏に謁見し、水晶の大鏡、少許の麝香「シウエット」香水、其の他小玉等を献上し、日本の佛僧に對するよりも遙に優等なる待遇を辱ふした。次日三好義繼及び松永久秀を訪問し新任の挨拶旁々其の保護の厚さを謝した。又彼等を招待して切支丹寺を見物せしめた。其の折教義を説明したるに、義繼久秀の二人も亦大に感ずる所があつたと傳へて居る。西教史には此の際宣教使等が時

の帝正親町天皇に拜謁したることを記載すれど、恐らくは足利將軍義輝に謁見したることの訛傳だらう。蓋し外國人は日本の朝廷と幕府との關係を明にせずして時の主權者を指して往々皇帝と稱して居るからだ。後年阿蘭陀人、西班牙人等が徳川家康を指して皇帝と稱したるは明白なる事實であつた。

如此上政府の保護を受け、下人民の信任を得たる京都の切支丹は、日本全國中最も隆盛なるものにして、其の勢恰も旭日の天に冲するが如く、近畿地方を切支丹化するの日將に近きにあらんとするの形勢なりしに、俄然意外の政變突發して此の氣勢を挫折するの不幸に接した、其の政變とは何ぞや、足利將軍義輝が家臣の爲に弑殺されたことがそれだ。是れより先き永祿七年三好長慶薨し、世子義繼嗣ぐ、義繼實は長慶の弟十河一存の子なり。三好三人衆と稱する三好日向守長逸、三好下野守政康、岩成主税助左道、及び松永久秀等權を專にし、長慶の遺命に反き、阿波の足利義榮と通じ義繼を擁し、永祿八年五月不意に義輝を襲ふて之れを弑し、其の一族を廢にす、京都復大に亂る、此の機に乗じ法華宗の僧侶頻りに三好黨に迫り、切支丹を禁じ、宣敎使を殺戮せんことを主張し、又朝廷を動かして其の目的を果さんと謀つた。久秀等は其の

身法華宗の信者たるのみならず、政路上當時京都の一大勢力たる佛僧等の主張に耳を傾けねばならなかつた。然るに其の部下には有力なる切支丹武士が尠からずで、彼等は極力法華宗の計畫に反對して之れを妨害したので、松永躊躇して久しく之れを決しなかつた。宣敎使の方に於ては、將軍義輝の弑せらるゝを聞くや、累の其の身に及ぶを覺悟して備ふる所あり、既にして三好の部下の有力なる信徒より報あり曰く、三好黨佛僧等の言を聞き宣敎使を殺戮せんとなす、我等力を盡して之れを防止しつゝありと。此の報告を傳聞したる京都の信徒の切支丹寺に集まるもの三百有餘人、誓て宣敎使の身邊を保護しやうとして居たので、三好氏之れを見て容易に手を下すことが出来なかつた。されど四圍の情況は日に危険の切迫し來るを報ずること頻々たりであつて。信徒等宣敎使に向て一先づ難を避けて退京せんことを勸めて止まなかつた。爰に於てヴィレラ先づ去て飯盛に赴き。尋てフロエーも亦其の跡を追ふて退京した。而して京都にては其の日を以て宣敎使迫放令が發布せられた。是れ實に一五六五年（永祿八年）八月二日であつた。斯くて宣敎使退京後の京都の信者は佛僧より改宗したる傳道者トマスなる者之れを管理し、又退京したる宣敎使は一旦飯盛城に赴いたが此處は三

好義繼の城下なれば安然の地に非ずとて轉じて堺市に赴き、是處を本據として布教し、多数の人々を教化せりと云ふ。

其の後三好三人衆及び松永久秀は、互に猜疑して權力を争ひ、衝突其の間に起り、三好三人衆は義繼を奉じて飯盛より高屋に移り、久秀は大和志貴多門城に在りて、根来の衆徒及び畠山高政等を誘ひて三好黨に當り、互に勝敗あり、永祿十年三好義繼三人衆を離れて久秀に投じ、戦亂相續き、いつはつべしとも見えなかつた。此の戦争中敵味方と別れ居た信者の切支丹紳士の舉動として傳ふべき美談がある、永祿十年三好義繼、松永久秀の兩軍、堺の附近に對陣せし時の事である、フロエー師書を兩軍の切支丹信者に寄せ、堺の切支丹寺に來つて偕に基督降誕祭を祝せんことを勧めた。兩軍の信徒等皆喜で本寺に集り、敵味方の區別なく、基督に在る兄弟として、相互に敬禮を盡して、降誕祭を祝ひ、彌撒祭に列し、終て後ち宣敎使の響應に成りし愛餐を供にし、楽しく一夜を過した。去るに臨み、先づ宣敎使の好意を謝し、次に相互に手をととり、主基督に在ては兄弟たるも、互に主君を異にするが故に、戰場に於て相戦ふの己を得ざるの責任を語り合ひ、涙を吞んで相分れ、各々其の陣營へと歸り行つた。

三好黨の軋轢

兩軍の信者共に集り基督降誕祭を祝す

(西敎史には此戦争を和田惟政と松永久秀の對陣として)斯くて宣敎使等は堺に在て布教せしが、ツイレラは在豊後トリス師の召命に應じて九州へ赴き、フロエー師は永祿十一年の政變により、再び京都へ赴くこととなつた。其の始末は次編に叙述する。

第六章 宣敎使之動靜及其の配置

一 司祭と修道士 其の一

フランシスコ、ザビエーの印度へ歸還した以後バルタザル、ガゴ一行の渡來、尋て印度支部長ヌゲー師來朝の始末等は、既に叙述せり、其の後、一五六三年(永祿六年)ルイ、フェロー Louis Frez、ムブチステ、モンツ Bapiste Monts 修道士ジャクエス、ゴンザレス Jacques Gonzalez の三人來朝し、フロエーは直に平戸の鷹島に派遣せられた。尋て翌年(永祿七年)ゼアン、カブラル Jean Cabral、メルキオル、デ、フイグレドゥ Melchior De Figueredo、バルタザル、ド、アノスタ Balthazar d'Aosta の三師父平戸へ來る、而して第二回目に渡來せしバルタザル、ガゴ Balthazar Gago は平戸より轉じて博多に赴き、彼處に於て布教せしが、大友氏對龍造寺氏戦争の時、捕

宣敎使の数

虜となつて具さに辛苦を嘗め、後ち赦されて府内へ歸りしも、爲に健康を害し、精神も亦異狀を呈したれば、トレイ司教は彼を印度へ送還せり。爰に於て永祿七年の頃、日本在留の耶蘇組即ちゼスイト派の宣教使は拾五名となつた、即ち司祭七人修道士八人である。司祭即ち師父はトレイ、ヱイレラ、フロエー、モンツ、フイグレドウ、アコスタ、カブラル、にして修道士は即ちフェルナンデ、アルメーダ、ゴンザレス、サンチセズ、日本人ロレンス(魯連須)ダミヤン、アスチン、或はオギユタン、メルキオルである。トレイ司教之れを各地に派遣す、其の配置左の如し。

フロエー 京都 ヱイレラの補助。
 アコスタ 平戸 天門寺の牧師。
 カブラル 鷹島及び其の附近の島々。
 モンツ 豊後府内。
 トレイ 肥前口之津。
 フイグレドウ 同上。

フロエー、アルメーダの二人は一五六四年の十二月(永祿七年)卅一日豊後を發

宣教使の配置

フロエー師旅
行中の危難

し、翌年一月三十日泉州堺に達す、彼處には既にヱイレラの布教によつて數名の信者があつた。然るにアルメーダは突然病に罹り、急に起つたはざるを以て、彼を堺に留めフロエーは二名の信徒と、一名の異教人とを伴ひ、大阪に至り、同行異教人の家に投じた。夜半人定て後、市中俄に騒動しければ、何事ならんと起き出て見れば、それは石山本願寺の火災であつた。偶々此の夜風はげしくして火勢猛烈、僅々四時間にしてさしも壯嚴なる本願寺御堂を嘗め盡し、火焰は延て市中の商家に移り、遂に九百軒を焼失するに至つた。是の時フロエー師の宿せし異教徒の家は、親戚故舊の避難者にて混雜したれば、フロエーは此の家を去り、同伴の信徒と共に或家の一室を借て移轉せしに、此處は石山本願寺の附近であつたので、本願寺より派遣したる番卒ども數名來つて警戒を嚴にし、旅人を搜索すること頻で、當時フロエーは此の家の二階に潜伏して難を避け居りしも、今にも番卒等の發見する所たらんかと恟々として安き心もなかつた。當時大阪は一向宗本願寺の根據地にして、石山に嚴然たる一大城郭を構へて一方に割據し、宛ら一大諸侯の如く、權勢最も盛にして、彌陀の利劍を振ふて戰國の渦中に投じ、東争、北代、寧日なく、時恰も越前の朝倉氏と確執中であつたので、其の

警戒も亦一層嚴重であつた。火災の起つたのも、或は敵國の間者の仕業ではないかとの疑もあつたのだらう。フロエーは固より戦争に關係なきも、切支丹は即ち本願寺の教敵なれば、發見次第如何なる憂目を見るか知れなかつたのだ。然るに、翌朝幸に信徒等の保護により無事に重圍を脱出して、急行京都へ至るを得たのである。

永祿十年（一五六七）ゼヤン、フェルナンデは平戸に於て病死した。彼は元と葡萄牙コルドバの富商であつたが、歳僅に二十二歳にしてゼスイト派に入門したのだ、其の次第は左の如しだ。彼一日商用にて葡國の首府リスボンに來た時、偶々友人の招きに應じてゼスイト派の集會に列した。師父の説教を聴聞して大に感ずる處があつたが、其の時最も深く彼を刺激せしものは集會者の舉動であつた。當時其の席に列せるもの貳百有餘名、彼等は皆均しく暗室に集つて、痛悔と祈禱とに餘念なく、其の深刻なる痛悔、其の熱誠なる祈禱一として彼の心を動かさるものはなかつた。更に彼等が各々鞭を執つて其の背を打ち、血を流して以て神に罪の赦免を乞ふの切なるを目撃するに至つて、感奮己まず、直に馳て師父の許へ至り、頻に入門せしことを乞ふて止まなかつた。その時師父ロドリゲスは此の青年の能くゼスイト派の難行に堪るや否やを

フェルナンデ
死す

其の略歴

試みんとして、問ふて曰く、汝は能く絹布を身に纏ひ、盛装して背を前に、面を後にして逆に驢馬に騎り、リスボンの市街を通過するの勇氣があるかと、少年答へて曰く、唯命是れ従はんと、即ち決然起て直に驢馬に逆に騎り、群衆の嘲笑を浴びつゝ、市街を縦横に乗廻して師父の許へ歸り來た。そうして始めて入門を許されたのだ。是れ實に一五四七年（天文十六年）の事であつたが、それより九ヶ月を経て印度へ航し、ザビエー師に隨て日本へ來り、布教に従事すること八年、しばしば危険に遭遇せしも痺まず、奮闘努力最も務めたものであつた。彼は日本語を能くせしを以て、宣教使の通譯として宗論の衝に當り、又日本語を以て書籍を著せり、彼は學校教育を受けざりしも能く基督教の大意に通じ、其の説教の巧なる屢々宣教使を後へに瞠若たらしめた。其の平常に處する、頗る謹嚴にして、日本人を躓かせざらん爲に、一切肉食を避け、米菜のみを食して、劇しく勤勞せし結果、疲勞、衰弱、中途にして夭折するに至つたのである。師長トレー彼を評して曰く、「日本に於て基督教會を建設せしものはザビエー師なるも、フェルナンデの能く之れを援助するなくんば焉ぞ能く之れを維持發達せしむるを得んやと。日本の傳教多事ならんとするに際し、此の良傳道師を失なつ

たのは惜むべきであつた。

二 司祭と修道士 其の二

有力なる傳教師フェルナンデを失ひしゼスイト宣教團は、傳道區域の擴張によつて宣教使の不足を感じ、收稼は多く工人は少なし、速に夥多の工人の收稼場に送られんことを其の稼主に乞ふて止まなかつたのであるが、恰も好し、是の時印度より派遣せられた三名の宣教使が口之津へ到着した。バルタザル、ロペー Balthazar Lopes アレキサンドロ、ワリニャーニ Alexandro Valegnani 及び修道士 ミスセル、ワゼートがそれだ。それは一五六八年（永祿十一年）のことだが。それより二ケ年を経て、一五七〇年（元龜元年）にフランシスコ、カブラル Francisco Cabral 及びソルジ、オルガソチノ Soldi Organtino の二人がまた志岐島に來航した。カブラルは支部長則ち教會長として老師長トレー師に代り、日本に在るゼスイト宣教團を統轄するの任務を帯ぶる者だ。されば此の時機を利用して志岐に宣教使會を開き種々の協議をなした。京都に在りしフロエー師の外、日本全國に散在せる宣教使は皆悉く參集して、日本傳道に關する將來の方針を定め、宣教使の配置を變更して左の如くにした。

- ゼヤン、バプチステ、モンツ
 - バルタザル、ロペー
 - バルタザル、ド、アコスタ
 - アレキサンドロ、ワリニャーニ
 - ソルジ、オルカンチノ
 - メルキオル、ド、フイグレド
 - コスモ、ド、トレ
 - ガスバル、ヰイレラ
- 豊後府内。
 - 口之津。
 - 平 戸。
 - 五 島。
 - 京 都。
 - 大 村。
 - 志 岐。
 - 印度へ歸還。

フロエー師は依然京都に留りオルカンチノ之れを補助する事となり、支部長カブラルは先づ大村へ赴き、領主の家族に洗禮を施し、それより日本各地の傳道視察の途に登つた。

然るに志岐に居て休養しつゝあつたトレーは會議の始まりし頃より少しく發熱を感ぜしが、次等に衰弱して終に起す、此の年十月を以て天命に應じて昇天した。享年七拾四歳、彼は西班牙の人だ。トレー師自身の語る所によれば、彼は若年の頃より其の

老宣教使のト
レーの昇天

心宗教に傾き居りしが、世のさまざまの慾望に擾されて迷路に入り、苦悶すること數年にして、彼自身にもわからぬとりとめもなき何物をか探求せんとて一五三八年本國を去つてカナリー島に渡り、轉じて西印度及び新西班牙の大陸に赴きしか、如何なる幸運にや接しけん、彼は此處にて四年の間。飽滿なる成金の生活を送るに至つた。然るに物質的の富貴歡樂は、後の精神的欠陥を充す能はずして、終始不穩の念に驅られ、其の位置に安ずる能はず、現在の生活より一層確實なる、より偉大の何物をか追求せんとの念頻りに起り遂に一五四二年新西班牙の艦隊に乗込み遠征の途に登つた。此の艦隊は六隻より成立つものにして新西班牙の總督が有名なる航海者マゼランによりて發見されし大平洋中の島々に廻航し、之れを占領するの目的を以て派遣したるものである。斯くて航海五十有五日にして偶然洋中に碁布する小島、大島より成立つ數多の群島を發見したるが、其の住民は魚肉と樹皮とを食物とする所の未開の人々だつた。それより航行十日にして棕櫚を以て覆はれたる美しき島に到着したるが、風波の爲め上陸するを得ず、又進むこと十日及至十二日にして、ミンダナオに達す。此の島は周圍約百リーグ（一リーグは約三哩）の大島なれど住民は極めて僅少だつた。それ

より南方に針路を轉じ、米と肉とに豊かなを小島を發見して上陸せしが土人との争闘により毒矢にあたつて死するもの六ヶ月に四百人の多きに及び、已を得ずこゝを去つてモラツカに赴き滞在二ケ年其間艦隊破損し到底新西班牙に歸還する能はざるの否運に陥り、困危の極漸く葡萄牙知事の援助により臥亞に送られたと云ふ。トレーは其の間終始艦隊に乗込み居たが、ゴアに送らるゝ途中アムボイナと云ふ所にて初めてザビエーに會見し、その所説を聽いて再び若年時代の宗教心を喚起し、ゴアに達して後決心して身を宗教界に投じ、ゴアの監督（司教）より接手禮を受けて司祭の職に就きしが、未だ以て安心するに至らなかつた。當時ゼスイト派の經營にかゝる聖保羅學林に赴きザビエーの教を受けて大に感服し初めて悟る所あり、こゝに彼が知らずして追求しつゝありし偉大なるものを得て欣喜に堪へず、フランシスカン派より轉じてゼスイト派に入門し、ザビエーに伴ふて日本に來れり、彼は即ち日本に來りし最初の宣教師の一人であつた。彼は日本へ來てから布教に従事すること二十有一年、ザビエーの日本を去れる以後は師長として日本宣教師團を總轄し、生死の間に往來して切支丹傳教の爲に盡瘁した。彼れ身を持つること極めて嚴格、粗衣、粗食に甘んじ、酷暑の候と

雖も常に徒跣を苦としなかつた。人あり其の行狀の酷に過ぐるを難じ、健康を維持する爲に少しく緩にして時に其の身體を休め、滋養食を取らんことを勧めしに、佛教僧侶の放縱なる生活に比して我徒の行狀嚴格ならんば人を教化し能はず、日本に在も効なしと云て容れざりしとぞ。非切支丹の徒はトレーを以て日本切支丹の創業者、佛教の破壊者を以てし、彼を嫌惡せしも、切支丹の徒は彼を聖老と稱して之れを崇敬せり、其の死するや、ゾイレラ師葬儀を司り、工其の價を得るは宜なりと云ふ聖書の本文を題として説教し、其の功勞を賞讃した。衆皆涕泣して其の死を惜まぬものはなかつた。先にフェルナンデ逝き、今又トレー師を失ふ、爰に於てザビエーと偕に渡來せし最初の宣教使一行は皆昇天してしまつた。而して又印度へ歸還せしゾイレラ則ち最初の京都の宣教使も亦馬拉加へ到着後、久しからずしてトレー師等の跡を追ふて逝いた。而して彼等の後を承て、日本傳道界に活躍せし宣教使等今後の動作は編を重ねて叙述すべし。

宣教使ワイ
ラ逝去す

第參編 安土桃山時代の基督教

第一章 織田信長と基督教 (その一)

一 信長と切支丹との關係、日本傳説の誤

東洋の大使徒フランシスコ、ザビエーが日本傳道の使命を帯びて薩州鹿兒島へ上陸せしは天文十八年七月三日にして足利の末葉、群雄割據の時代であつた、而して是の新來の宗教を保護し、日本の切支丹を盛ならしめたものは、我國稀世の英傑、織田信長其人であつた。信長はザビエーが來朝の年を以て其の父信秀に嗣ぎ尾州那古屋の城主となり群雄駕御の首途かきてに登つた。(信長の父信秀の死を天文十八年となす説と二十一年となす説とあり前者に従ふ。)誰か豫期せん此の織田の呆痴者と呼ばれし吉法師が當時雲の如く各地に蜂起せし群雄を統一して撥亂反正の偉功を奉せんとは、況んや又彼が新來の宣教使を保護し、新宗教切支丹の庇保者たらんとは。信長の基督教に接觸せしは何年頃の事なのか、それに關し我國に傳はる切支丹の記録には往々事實相違の點尠からず、中には全然信用するに足らざるものもある。されど是の時代に關する切支丹の傳説少なからざるが故、勢是れ等の傳説に言及せなければならぬ。切支丹宗門來朝實記の記する所によれば南蠻の切支丹に

破天連宇留岸と云ふ者あり、永祿十一年戊辰日本肥前國長崎へ着岸す。態と人目に懸るやうに異形に立、毎日常々、所々の神社、町方を廻りあるき、其の人相、大にして異形なれば國人不思議となし見物するもの群をなす。はや此の事都へ聞え、長崎へは異體の唐人渡り不思議をなせりと評判せり。信長その噂を聞き何卒見度おもはる、家老管谷九右衛門長秀に仰せて安土へ呼び寄せたまへり。信長御覽すれば宇留岸常人とは替り長け九尺餘り、頭ちいさく色く赤、目は丸くして黄なり、鼻高く耳は肩に懸り、口廣く、齒は馬の如く雪よりも白く、瓜は熊の如く長く、髮鬣は鼠色、年は五拾斗りと見えたり、云々。而して信長は彼が遠來の目的は法を弘むるにありとの言を聞き、家臣とその許否に關して評議せし結果、儒者文教院道仙の反對があつたのにか、はらず、破天連の望みに任せ弘法することを許可せりと云ふ。(南蠻寺興廢記等の記事も大同小異なり) 爰に云ふ破天連宇留岸とは即ちソルジ、オルガンチノ Soldi Organino の事にして、彼が京都若くは安土に於て信長に謁見せしは事實なるも、彼が京都に來たのは永祿十一年に非ずして、それより二年後の元龜元年の終りであつた。而して其の初て信長に接近せし宣教使はオルガンチノに非ずして其の先輩ルイ、フロエー

傳説の誤り

Louis Froez その人であつたのだ。又其の會見の場所も安土にあらずして京都であつた。蓋し永祿十壹年は信長が足利義昭を奉じて上洛せし年にして、當時安土は未だ築城されず、信長濃州岐阜に在城せし頃だ、而して其の年月は永祿十二年の四月頃であつたのは明白だ、又京都地方へ初て宣教使の來たのは、永祿十一年に非ずして、當時を去ること十有九年の昔、天文十九年にして、永祿二年以來宣教使の常住して布教し居たのは既に前編に叙述せしが如しだ。(吉利支丹物語上卷には伴天連が三好長慶時代京都へ來りし事を認めたる記事なり併し其伴天連をうるがんと云は誤である)

永祿十九年一月織田信長が前將軍の弟義昭を擁護して上洛し立て將軍となすや、和田伊賀守惟政を芥川に封す。惟政は元と足利將軍旗下の士だ、初め義昭の亂を避けて奈良の一乘院を遁るゝや、行て近江矢島の城主和田泉守秀盛の家に館す、惟政來り従ふ。義昭、細川藤孝をして六角義賢に就て事を議せしむ、義賢命を奉ぜず、其の子義弼、義昭を圖らんとするを覺り、走て若狹に至り妹婿武田義統に依り、又轉じて越前に赴き、朝倉義景に依る。既にして惟政、藤孝等と共に義昭の爲に織田信長に請ふ所あり、信長と偕に義昭を奉じて上洛し戰功のあつた人だ。惟政未だ洗禮を受ずと雖ど

和
田
惟
政
フ
ロ
エ
ー
に
紹
介
す

も其の弟高山飛彈守の關係より深く宣教使を信任し、大に之れを保護し、フロエーを堺より迎へて之れを信長に薦めた。信長厚く之れを遇した。西教史は當時の状況を詳述して曰く「其の後ち和田殿京に至り其の弟に（高山飛彈守）會せし時、其の弟は前に逆臣（三好三喜及び松永を指す）は公方の許可せる命を用ゐずして師父を追放し、大に之れを辱しめたることを語り、且つ信長をして復歸の命を公方に請はしめんことを求て曰く、師父は固より善人にして決して人の害を爲す者ならず、實に靈魂の救護を爲し、我等に生命を與ふる者なり。故に我は常に之れを尊信すること父の如くせり、今兄能く師父を保護せば弟の感恩之れに過ぐるなしと、和田殿は此の願を允さんことを約し、數日の後遂に此の事を果たせり、和田殿新公方に謁する時、信長、公方と共に逆臣追討の軍功を語り大に和田殿を稱揚せしに、和田殿は只管謙遜し、尋で和田殿二君に請ふて曰く、若し某を以て寸功ありとせば願くば其の賞として前に朝命及びダクサンドノ（松永久秀）の令に因て追放の辱を蒙つたる基督教師を京師に復するの願を允許せられんことを、是れ某の身に取りて莫大の恩とする所なりと。時に朝廷の攝政にして追放の命令に調印したる公卿會々其の座にあり、掲言して曰く彼等は數々安寧を害する者な

れば之れを復するは最も戒心せざるべからずと。信長此の人を見て慢言して曰く、我思ふに公は頗る賢明にして大度なり、如何となれば僅に一人の京に入るを以て都下の動搖に關するとなし、之れを憂懼するを以てなりと。又和田殿を顧みて笑て曰く、君の基督教師を復せんと欲すること、及び其の寺院を彼に反へす事、共に我同意する所なりと、而して公方は元と佛僧なれども亦和田殿に對して同意の旨に迷べたり、蓋し和田殿の功を重じ且つ己れ信長の擁護を受けるを以て信長の意に違ふを恐るればなり。和田殿既に公方と信長との承諾を得て猶天朝の許可を得んと欲し、攝政たる公卿に依て之れを奏せんとす、然れども公卿は之れを拒みて曰く、基督教師等は魔法を説き人の肉を食ふ者なりと。和田殿此の言葉を聞き、怒て曰く、既に公方及び信長の命なれば師父フロエーを師に招くこと亦何ぞ天朝及び公等に關せんやと、公卿は此の人望ある人の己に報ずる有らんことを恐れ終に承諾せり。和田殿は直に堺に在るフロエー師に書を贈て曰く、速に京都に来る可しと。此の書の達したるは千五百六十八年（永祿十一年）五月二十六日、即ちバーク祭の二週間中日なり、爰に於て速に懺悔、成聖の法式を行ひ、聖週の月曜日にて京に着し、在京の信徒盡く出迎へ其の喜悅の態、

言辭に盡す能はず。偕て師父は直に和田殿に問安するに、和田殿曰く速に信長を訪ひ新令の報謝を述べし、何となれば信長屢々堺の師父はまだ京に至らざるやを問ふを以てなり」と。

二 織田信長と宣敎使との初對面

斯て數日の後、和田惟政フロエーを案内して信長に謁見せしむ。和田殿は信長に其の時期を問ひ猶ほ師父に、榮光を與へんが爲に、馬三十匹を牽き師父を其の家に迎へ、自ら徒歩して宮殿に誘導せり、途間に架橋ありて宮殿造營の工人往來する所なり。此の橋上に至り適々信長と出會せり、師父は深く禮謝を述べ爾後の保護を請り。信長は鄭重に之れを接待す、時に日光赫耀たり、信長曰く、請ふ帽を戴けと、日本の禮辭既に畢り信長問ふて曰く、師は行年幾許なるや、勤學幾歲なるや、日本に來りて幾歲を経るや、何時か本國へ歸るやと、其の他云々、然れども信長の専ら問はんと欲せし事は日本人若し敎法を信するものなければ師父は印度或は歐洲に歸るや否や、師父の爲す所は如何なるやと云ふことなり。師父之れに答て曰く公若し基督教を日本に布くを許さば假令日本に於て敎ふる者も信する者も只一人なりと雖も、我は決して日

信長とフロエー
師との會見

フロエー師
佛徒と討論せ
んことを乞ふ

本を去るべからずと。又師父に問て曰く日本の釋徒の有する寺院の數に比すれば基督教の寺の少きは何の故なるや、師父曰く日本の釋徒は其の賣僧たることを掩ばん爲め、眞神の敎法を布く者を罵詈するに因て妨害せらるゝによるなり。其の時信長は釋徒に對して大に怒り罵りて曰く、彼釋徒は己れ驕奢放逸にして漫りに民財を聚收する者なりと。フロエー師は信長の好情あるを見て信長に對し、更に壯嚴の語を爲して曰く、公宜しく日本の最も學識ある釋徒を召集すべし、我が願は彼等と討論せんことなり、假令彼等説く所の理若し我に勝たば、京師は勿論日本より迫放せらるゝも亦甘心せん、假令彼らに賣僧の名を以てせらるゝも亦甘心せん、我れ若し公の眼前に在て討論し彼に勝つを得ば。請ふ正道を以て我を恵み我を保護せよと。信長は此の語を聽き驚駭せしと雖ども、亦之れを快として座中の諸候に對し笑て曰く、大才、大徳を生ずるは必ず大國に在りと。次で師父に對して曰く、日本の知識は此の討論のことを承諾す可きや否や我が知らざる所なり、何となれば、彼等は戰ふに舌を以てせずして動もすれば手を以てすればなり、然れども時機に因り此の事を行ふべしと。師父は才學を自負せる釋徒の前に於て、凡そ三時間程信長と對話し、退くに及んで京に住居を定むるの免

状を受んことを請ひ、其の免狀の寫を印度中に頒布し信長の英名と其の兵威を播揚せんことを誓言せしに、信長此の言を聞き喜悅に堪へず亦其の願を果さんことを誓言せり」云々。

以上の記事は宣教使フロエーが和田惟政に依て信長に紹介された時の實説ならんも、其の年月を一五六八年の五月となすは大なる誤謬だ。西曆一五六八年は日本曆の永祿十一年なり。然るに信長の足利義昭を奉じて上洛せしは永祿十一年九月廿八日なれば同年五月廿六日則ち上洛以前に京都にてフロエーに會見すべき筈なし、況哉當時信長は伊勢に在りて其の北部を侵略中であつたに於てをやだ。又其の會見の場所を宮殿造營の工人往來の橋上であつたと云へば、信長自ら監督して造營しつゝありし二條城建造工事中であつたやうだ。されば其の會見の歳月を一年後の一五六九年の五月即ち永祿十二年の三四月頃とせば、善く日本歴史の事實に合致するのである。蓋し當時に於ける信長經歷の梗概を舉れば左の如し。即ち其の第一回の上洛は永祿十一年の九月廿八日にして、其の後間もなく五畿内征伐の爲め出立、十月十四日京都へ凱旋。同廿五日京都を發して岐阜へ歸る。然るに永祿十二年正月五日三好の殘黨大舉して將軍

西教史の記事
に壹々年の誤
あり

義昭の居館本國寺へ迫りければ、信長其の報を得て正月七日岐阜を發し、同九日本國寺へ到着したるに。三好勢は既に敗走せる後であつた。是れ信長第二回目の上洛だ。是の時信長は同年五月廿一日まで京都に止まり一條妙覺寺に館し、諸般の政務を處理し將軍義昭の爲に二條城を築き、(二月廿七日
日録始末)又皇居修復の工事を計畫して居たのだ。信長のフロエーに會見せしは即ち此の間一事とするを事實に近きものとせねばならぬ。

三 京都に於る佛基間の軋轢

日蓮宗の僧落そうおちに朝山日乘上人と云ふものあり、才名ありて内外の文に達しければ禁中方の故實諸宗の取沙汰鍛鍊なりとて、堂上方並に諸寺諸公事の支配に加へられた。彼信長の切支丹宣教使を善遇するを見て快からず、一旦勅命によりて追放せられたものを京都に置くべからずとの説を持し、朝命を以て再び之れを追放せんことを謀つた、一日宣教使フロエーが日本人の傳道師魯連須を伴ふて信長に謁見するや、座に日乘上人あり、信長に迫り宣教使の追放を議せんことを欲す。信長許さず、却て日乘をしてフロエーに對して宗論を試みさせた。宣教使が靈魂不滅、死後審判の教義を主張する

日乘上人切支
丹の宣教使に
迫はんと謀る

や、日乗切齒、忿激暴言して曰く人は死するも其の靈魂は猶存在することを證せんと思はば。乞ふ之れを我に示せ、若し君之れを實とせば我れ諸君の首を斬つて其の靈魂不滅の證據を見るべしとて、直に起て壁間に懸る所の刀を取らんとす、信長忽ち起て背より之れを捕へ、惟政等又その刀を奪ひ、終に彼をその座より退去せしめた。是れよりフロエー、魯連須の二人交るゝ切支丹の教義を演述すること二時間の長きに及び、信長始め列席の諸侯深く感動する所があつた。蓋し魯連須は熱心にして辨才あり、殊に座談に長じ論理明晰、聴くもの皆感嘆せりと云ふ。當時貴族の改宗せし者は皆彼の説教に感じ其の勸諭によつたものだ。

信長はフロエーに京都に在任し教會堂を開きて布教することを許可し、課税及び、戦時徴發兵士の宿舍たるを免除し、且つ切支丹の布教を妨害する者を嚴罰に處すべしとの制札を書いて與へた。將軍義昭も亦大に宣教使を歓迎し之れを保護したので、基督教の布教は日に月に盛にして改宗者續々として興つた。あはや世は皆切支丹化せんとする情況をあらはした。爰に於て佛徒の驚愕一方ならず、彼等は再び活躍し始めた。日乗上人等は宮中に運動して謀議する所あり、朝廷終に勅使を信長の許へ遣は

信長切支丹宣
教使を保護す

織田家代々の
勤王

し、勅許を経ずして外教の僧徒を京都に在住せしむるの不當を責め給ひしが、信長は其の實佛僧の奸策に出たるを探知し、直に復奏せしめて曰く「洛中取締の事は宜しく武家に一任せらるべし」と。蓋し織田家は代々勤王の志厚く、信秀の時代にも區々たる小名にてありながら拾數萬金を獻納して、皇居若くに伊勢神宮の造營に當て。又信長はしばゝ皇室の御内用として數萬の獻金を爲したるのみならず、御所並に神宮の御造營を始め、御料地の整理等、苟も皇室に關する事には、萬事意を用ゐてその尊嚴を恢復尊重したりしかば。天皇もしばゝ勅を下して深く其の志を嘉みしたまふた。されば何人も彼の勤王の志厚きを賞せざるものなき程なるに、切支丹に關する勅諭に對して斯る復奏をなせしは、一は皇室が政教の爭議に御關係あるの不利を思ひ、又一は是の事佛教徒の奸策たるを看破せるによるからであらう、爾後頻繁と起り來りし政教の爭議が、累を宮中に及ばさなかつたのは信長の偉功と云はざる可からずだ。

(西教史には日乗上人朝命を以て宣教使追放の
事を公方に申し入れたれど聽れざりしとあり)

さて佛教徒の計略一たび敗れたるも、爾後佛、基間の暗闘絶ゆる間なく、和田惟政は常に切支丹を保護し、公方若くは信長の威權をかりて佛僧を抑壓し、日乗上人は佛

佛教僧侶の横
暴

徒を使嚇し、朝權を以て切支丹を迫害せんと試みた。さうして又信長は終始切支丹を保護し宣教使を優待して佛僧等を壓迫して居た。當時佛教徒の跋扈甚しく有名なる寺院は皆廣大なる領地を所有し、數千の僧兵を養ひ、其の本職たる衆生濟度を怠り、動もすれば戰爭に参加して以て其の慾望を逞ふした、大坂石山本願寺の如き、長享年中加賀の守護職富樫之助政親を亡ぼし、天文年間能登、越中を略して三ヶ國を領し、さながら一大王侯の如く、事あれば必ず一揆を煽動し、彌陀の利劍を振ふて以て其の暴威を逞ふした。天台宗、眞言宗、日蓮宗の僧徒等皆然らざるはなしだ、信長が佛僧等の横暴を怒つて之れを懲らさんとするれば僧侶は亦信長を佛敵として之れに抗し、戰闘絶ゆる間なく、比叡山の燒打、長島征伐、本願寺攻撃となり、信長敢て切支丹を信せしにあらざると雖ども、佛法僧侶の横暴を惡むこと甚しかつたので、その反動として佛僧等の敵視せし切支丹の宣教使を愛し、之れを好遇したのである。

信長に謁見して厚遇を受け且つ教義を談せし宣教使は獨りフロエーのみに非ず、ソルジ・オルガンチノ・フランシスコ、カブラル・アレキサンドロ、ワリニャーニ等も信長に見えて其の恩遇に接したる宣教使である。ソルヂ、オルガンチノは元龜元年の冬

信長に謁見した宣教使は誰か

京都に來り、フロエー師父の京都を去るに及び主任者となり、長く京都、大阪及び安土に在つて布教せし宣教使だ、彼の信長に謁見せること前後數回、其の信長に贈呈せるものは鐵砲十挺、遠目鏡、虫目鏡八個、伽羅百斤、虎皮五十張、八疊つりの蚊帳、長さ十五間に及ぶべき猩猩緋の巻物、並に藥種類、野牛、羊、唐犬等であつた。又フランシスコ、カブラルは老宣教使トレーに代つて日本支部長となつた人だ。元龜元年彼が日本傳道地視察の道に登り京都に至るや、將軍義昭に見えて宣教使等の蒙れる恩命を謝し、又その岐阜に至り信長に謁するや、款待至らざるなく、其の去るに臨み、信長到席の諸候に語りて曰く「凡そ眞實の宗教は師父等の説く所を除き他にあるべからず、日本の宗教夥多あると雖も一も信ずるに足る者なし、若し或は基督聖教を非とし之れを論破せんとする者あらば、吾能く之れに當り辨論すべし。吾は夫の殘酷を逞ふして師父等を困めんとする所の釋徒の種族を悉く斷滅せしめんと決心せり」と。是れ信長が比叡山の僧侶等が朝倉、淺井に加擔せるを惡み、之れが燒打を斷行せんとしつゝあつた時の言葉たるを記臆せば、興味多かるべし。(是時は元龜元年の冬にして翌年十月叡山を燒き僧侶を斬れり)是の如く信長は宣教使を待遇する事極めて優渥であつたが、其の評判忽ち世間に傳は

信長大に切支丹を賞揚す

り、京師は勿論其の附近の豪族の宣教使を訪問する者多く、或は基督教に歸依し其の篤信者となるもの尠なからずだ、佛教徒の陰謀密計も其の効なく、切支丹の勢日々にますます盛になりつゝあつたが、元龜四年の一大政變は切支丹の爲に一頓挫を來すことになつた。

四 元龜四年の政變が切支丹に及ぼせし影響

其の政變とは足利義昭と織田信長との確執がそれである。是れより先、足利義昭は政權の信長に歸するを見て漸く不平に堪へず、密に諸國の豪族に教書を下して上洛をすゝめ、其の機に乗じて信長を除かんと謀つたので、近江の淺井、越前の朝倉を始め、攝州石山本願寺、伊勢國司北畠氏、尾州長島の門徒相尋て起り、内々義昭に通じて信長と戦ひ勝敗未だ定まらざるに、武田信玄も亦義昭の催促に應じて上洛の途に登り、味方ヶ原に出で、進て三州に迫るに至り、信長が前後左右に敵を受るの危急に陥いつたのを見て、義昭時機至れりとなし、元龜四年の初頃より公然反旗を翻すに至つた。而して其の結果遂に義昭の没落となつたのは正史に記する通りで爰に叙述するの要なしだが、唯是の事變の基督教に關聯せし點を略記しやう、初め義昭の信長を除かんと

謀るや信長の爲に壓迫されつゝありし佛僧等をかたらひて其の味方となしたので、信長の保護の下に在つた京都の切支丹は一時危殆の運命に頻せるが如しだ、されど、幸に義昭に味方せる大名の中にも數人の信者あり、就中内藤如安の如きは其の篤信者であつたので、戦亂中に於ても、能く切支丹寺を保護して破壊を免かれしめ、又た數多の信者を救助した。而して宣教使フロエー等は一時危難を避けて京都の近在に潜伏した。世に信長時代にも宣教使が京都より退去せしめられたと云ふのは此のことを誤傳せるものだらう。

宣教使フロエーの遺使

西教史は當時宣教使フロエー避難中の情況を詳述して曰く、信長の京都を圍む以前（信長の京都を圍みしは元龜四年四月四日）基督教者等既に市街の滅亡するを先見し、フロエー師に京都を退かんと勧めければ、師父は其の言に従ひコスモと名けたる教會の友一人と共に京を距る半里許の地ゴゴに退かんと決定せり。此時アントアンと名けたる信者は、己の從弟の家屋に當める者あるを以て師父をこゝに誘導せり、既にして信長の兵來て此の村を犯して放火せんとするに困り、師父等は己むを得ずしてこゝを去り一佛徒の家に寄宿せしに、其の家に一人の老たる基督教者ありて、師父等を隠匿するに宜き場所あらざるを以て、家の側在る鶏舎の内に師父等を密に入れたり、村民は隊長に大金を與へて損害を免れたれども、兵卒等或は村に侵入し鶏を奪はんとて其の鶏舎を目掛け發砲すること數回此の時師父は銃聲を聞けども僅に帽子の端を傷

けたるのみにして身に少しも傷を蒙ることなかりしは亦奇と云ふべし、然れども佛僧は師父等か前に其の家に入るを認視し、兵士に告ぐ曰く、基督教師此の家に潜伏せり、或は之れを屠戮するか、或は之れに莫大の贖命金を食するも意の儘なるべしと、兵士直に往て老父を責問して曰く、汝の家に基督教宣教師の伏匿するを告る者あり、彼等は何處にあるやと、老父答て曰く然り。前に宣教師等はこゝに在れども今は既に去れり、若し猶こゝに在るも我能く彼等の危難を救護すべし、如何となれば彼等は信長公の寵客なればなり。他人或は彼等に害を爲すものあらば何の處に潜伏するも公之れを搜索し直に之れを屠すべしと、兵士は此の言の爲めに勢を挫かれ遂に師父等の探索を断念せり。

次夜に至り、信者等は師父等の潜伏せし家に會し、師父等をして他の村に移轉せしめんとす、此の村に人口四百にしてトホと名くる佛僧の所轄なり、師父等は密に此の村に入らんと謀り、夜九時こゝに到るに、村の諸門は既に鎖されたれば、之れを開かしむるは甚だ難く且危し、如何となれば兵亂の時に際し長夜間の出入を監護して怠らざればなり、然れどもアレキサンドルと稱する信者の従弟三人此こゝに住む者あり、彼等に頼りて開門の方略を得たり、本と此の村は分つて二區とす、中間に一湖あり、頗る大なれども甚だ深からず、故に徒歩して渉るべし、一人の信者師父を負ふて之れを渉り稍々にして區内に入る時、二人の信女涕泣して師父等に告て曰く、佛徒は師父等の到れるを聞き之れを殺し其の隠れたる家に放火せんとすと、師父等は此の事を聞き大に驚怖し、急に路を轉じ門を出んとするも、門鍵は既に佛僧の手に在るを以て之れを得ること極めて難し、に於て、師父等は唯生命の危難を持つの外更に策の出る所知らず、此の危険の際アレキサン

京都の切支丹
益々盛になる

信長切支丹の
教を聞き且つ
質問す

五 信長宣教師を以て腦髓に異状ある人物とす

既にして、信長、足利義昭を迫り、淺井、朝倉を滅し、大敵信玄亦病死したれば、本願寺を除くの外、近畿地方亦信長に抗する者なく、隨て京都も亦靜謐にして切支丹の布教倍々盛になり、天正六年の頃、京師の基督教信者を算するに、其の數二萬に及びりと云ふ。當時フローエー師に代つて京都寺院の主宰たりしオルカンチノは、京都若くは安土に於て、しばしば信長に謁見して、敬意を表し、時に下問に應じて説教を試みたこともある。信長京都に在る時、一日(天正七年の初)オルガンチノはローレンスを伴ひ祝賀を表せん爲めに司候した。

信長師父等の來るを聞き一室に伴ひ凡三時間説話しローレンスに質す所あり、ローレンス力を盡して聖教の眞理を説明しければ信長之れを聞て甚だ欣然たり。信長此の對話を諸候に聞かしめんとて、撃を低やしてローレンスに謂て曰く、吾今故らに大聲

を發し怒氣を含むか如くせん、必ず之れを顧慮することなく十分に答辨せよと、即ち室の戸を開き列席の諸候をして自由に見聞するを得せしめ、數種の難問を出してローレンスに質し、その周密なる答辨に接し、終に再び問ふこと無きに至り、信長大喝して曰く、我説既に屈したり、誰か能く來り我を援くる者ぞ。又諸候等に請ふて曰く、君等及び君等の夫人及び子弟も皆共に基督信者となるべし、歐州より來る所の和尚には遂に抵抗する能はずと。尋てローレンスに對して曰く、請ふ此の衆諸候の前に神は唯一なり、神は善を賞し惡を罰する者なることを説けと。爰に於てローレンスは辨を逞ふし理を盡して精密に此の事を説く衆諸候甚だ敬服せり。終て後信長再びオルカチノ及びローレンスを別室に誘ひ、人なき處にて問ふて曰く、「卿等は果して其の説く所の教を眞に信するや否、乞ふ隠す所なくありのまゝに予に告げよ。佛僧は曾て予に告げて曰く、伴天連等の謂ふ所の眞神は一にして、靈魂は不滅なりとの教義は、彼等決して自ら信する者に非ず。斯の如き妄説を以て人民の信仰を要むるは何事か其の本國の爲めにする所があるのだらうと云へり。予又曾て佛僧に、この疑問を發したるに、彼等は答て、佛教は愚民を諭すに便利なる方便なれど、實は吾等自身は之れを信

信長宣教師を別室に誘ひ其の説く所の教を信するや否やを問ふ

じ居らぬと云つた、卿等も亦其の説く所は方便にして、自らは之れる信ぜざるにあらざや」と。オルガチノ、之れを聞き色を正ふし答へて曰く、「天に在りては上帝に對し、地に在りて信奉する所の宗教及び君公閣下に對し、吾曹の説く所の教は一として眞理ならざるはなく、又一として眞理と信ぜざるものなきを證言せん、若し吾をして百千の生命を有せしむるも盡く之れを呈して以て吾が説く所の教義の眞實なるを證せん」と。魯連須も亦其の言を同ふす。やがてオルガチノは偶々其の坐に在りし地球儀を執り、その表面にあらはれた伊太利を指し、是れ吾が出し處の本國である、又指頭を以てその道筋を指し、是れ吾が經過し來りし所である、閣下は吾が説く所を聞き吾に榮譽を與へ、吾を宣教師として尊敬せらるゝ處を見れば、閣下は吾曹を以て才能もなく學識もなさ白痴者と見做さざるを信ず。たとへ吾曹をして虚誕の説をなさしむるも、吾曹の爲には何等の益もなく、却て之れが爲め種々の苦難を招き、果ては残酷なる虐殺に逢ふのみである。然るに吾曹にして虚誕の教を布かんが爲めに安樂なる故郷を辭し、長途の危険を犯して、遠く外國に來るのは、實に愚の至ならずや。日本の佛僧が己れ自ら信ぜざる所の虚誕の説を述べて愚民を欺くは、利益を貪り、放逸安樂

の生涯を送らん爲めで、現に彼等は廣大美麗なる寺院を有し、衆人の布施を受けて莫大の富を積み、人民の尊敬を受けて安逸、放縱なる生活を爲すに非ずや。然るに吾曹の日本に來るは實に困苦の生活を爲すためである、何となれば日々食ふ所の物は本國の物に非ず此の味に慣るゝ間の困苦も亦尋常一様の事に非ず、吾曹は常に斷食、齋戒して嚴格に身を持ち、窮苦の生活をなし、以て聖教を奉ずるは閣下の知り給ふ所である。吾曹が斯く困苦、勤勉の中に在つて、唯希望するものは死後天國に入り、現世にて受くる所の一切の困苦の報酬として、永遠の幸福を受けることのみである。現世に於て百千の忍耐を爲すは他に非ず、唯天父の吾曹の爲に備へたまふ所の實を得んと欲するのみである、閣下乞ふ之れを諒せよ」と。信長之れを聞いて深く喜び、その廉潔を愛し、又その心事を疑はなかつた。されど、彼等の腦隨には多少の異狀あるに非ずやと疑つて居たやうであつたと云ふ事だ。

六 京都南蠻寺に關する傳説

京都の南蠻寺建立に關する我國の傳説には大なる誤謬があるやうだ。切支丹宗門來朝實記に云く「其の後京都は管谷九右衛門に被_レ申付_レ京都四條坊門に四町四方の地を

南蠻寺に就いて

給はり、北山の太石を引出し石垣を築き、金銀をおしきまず七堂、伽藍を建立あり、則ち時の年號を以て永祿寺と號す。此時比叡山の大衆立腹して、座主明圓僧正に訴へければ、僧正の曰く當時武威盛にして佛法王法も武威に勝事なし、今永祿寺の儀さゝへなば、信長立腹し、いかなる騒動に及ぶも計り難し、先此儀暫指置べきと有れ共、大衆不聞入、文珠樓に登り鐘をつき、大講堂の廣庭に集り詮議す。中にも横川の和松院阿闍梨教覺進み出申しけるは、夫我山は人皇五拾代桓武天皇王城の鬼門守の爲、傳教大師と共に當山建立ありて時の年號を以て延暦寺と申す、此外に年號を寺號とする事なし、既に五十一代平城天皇大同二年に大和國片岡山に大同寺御建立有しに、叡山不聞大同寺の額を打破りし事、先例慥の證據也。今新寺を以て永祿寺と號する事、先一天下の王位を輕ずる也、其分に可_レ差置_レ道理なしとて詮議致ければ、皆尤と一同して大衆百三拾四人、衣の下に腹巻して各々訴狀を携へ紫宸殿に差出す、殘る大衆は三王七社の神與をかきこみ、をめきさげんで訴へける。帝大に驚き給ひ、百官評議有て、花山中納言廣政卿を勅使として信長方へ遣被_レ、扱て此の度び、京都にて寺院建立の事は弘法崇敬の故と、君も叡威有しかど、年號を以て寺號とする事、延暦寺の外不成事也。仍て山門

の訴狀叙慮を苦しめ給ふ。早く寺號を改め可_レ然との綸命也。信長心には無念に思へ共勅定もだがたく、永祿寺を改め、南蠻寺とを號しける。夫より信長憤深く我が建立の寺なれば偏執の事而已多く、宇留岸一人にては患ふ様に弘法致しがたかるべし。南蠻より出家を呼び寄せ、随分廣く弘法すべしと申渡す」云々と。

書中記する所の永祿寺々號の一件は事實大に相違せり。西教史等西洋に傳はる記録によれば、宣教使等が京都の切支丹寺を建築し始たのは天正四年のことにして、それまでは京都市中の普通の民家を改修して假の寺院となして居たやうだ。前編に既に叙述せしが如く、永祿七年頃ヱイレは信徒より寄附金を集め、市中にて一家屋を買取其の一部を改造して寺院とせしが、ヱイレ等退京後修繕もあろそかになしたものが、元龜元年オルガンチノが京都へ來た頃、その寺院は甚だ貧弱なるものにて普通の風雨にも支へがたき程のものであつた、信長が宣教使の京都在住を許せる時、フロエ一師に返却せりと云ふ寺院は、此の假教堂のことだらう。而して天正年間、新に建築したる寺院も信長より下賜されたる費用にて建てたるに非ず、當時の切支丹大名及び近畿地方二萬人の信徒の寄附により、其の基礎を置くに至つたのだ。佛僧等はその建

永祿寺の事件
に傳説の誤

昇天寺が本名

築の永久的事業なるを見て、百方之れが妨害を試みたので。京都の守護職、村井定勝は、爲に特別の保護と便宜とを與へ、幾分の資金を寄附し、材木を供給し又自ら工事もも監督し天正五年を以て落成し、之れに昇天寺の名を命じた。蓋しその奉獻式の日は西暦一五七七年の八月十五日でザビエーの鹿兒島上陸廿八年、聖母馬利亞昇天祭日に相當せしを以てである。之れを南蠻寺と云は佛僧等が輕蔑の意味を以て命名したるものであると云ふ。是の寺院にあつた鐘は今現に京都妙心寺春光院に傳はり、此の高さ二尺餘、口徑一尺五寸、口の厚さ、約一尺八分、量目拾八貫、外面の中腹に 1577 と十字の記號あり、一五七七年は即ち天正五年にして其の制作の年代と知るべし。

南蠻寺の位置
に就て

南蠻寺即ち昇天寺の位置に關してはさまざまの考證があるが、京都帝國大學文學部考古學研究報告には當代記吉利支丹物語、其の古書を考證して、左の如く記してある。

四條町中でありしと「當代記」に見ゆるは四條通邊の何處なりしか、是亦位置を決し難しされは寛永年代の新舊兩版の京都古圖に四條堀川西に「大うす町」の町名見え、慶安五年までは尙其町名を有せり。此地或は慶長十九年熱拂はれし寺の所在を示すものにあらざるが。信長時代に四條坊門（鎗藥師通）に建てられしといふ所謂南蠻寺を、其通りの西部に假定せずして、之れを東部鴨漕の地に擬定せんとする説あれども、それは單に石垣町また先斗町などの町名より想像附會せしに過ぎず。石垣町は南蠻寺の石垣に由りて命名せられし

にあらず。唯鴨川に沿うて築がれし石垣に接せる新開地のみ。先斗ほんどに至つては、蓋し南蠻博奕の習留多より出で、鴨漕の洲崎地に附與せられし元祿時代の流行語を取りしものにして、吉利支丹に涉らず。

寛永の「吉利支丹物語」には五條堀川に大寺を建てたる由見ゆ。是或は慶長の末年に毀却せられし四條町中の寺と同一の地にはあらずるか。即ち慶長以前の吉利支丹寺の廢墟に再建せられしものにあらずるかとも推測せらる。従ひて寛永の古地圖に載せたる四條堀川の位置を吉利支丹寺の遺址と假定せんには、物語に五條堀川とあるは四條堀川の誤にはあらずやとも考へらるべし。物語も古圖も、慶長十九年よりは約二十五年後の編纂なり。

更に二十五年を下りて寛文五年出版の「京雀」卷二に釜座附抜通の高辻下る所に「だいうす町」の名を掲げ秀吉が破壊したる南蠻寺の舊址なりと稱せり同書卷六には五條松原通新町西へ入る所敷の下町より北へ上る町を「だいうす町」と稱し、秀吉時代に教徒住したるを破壊せる趣見ゆ、惟ふに同書二ヶ所に擧ぐる所、同一の地を指すものなるに相違なく、畢竟この高辻松原間なる五條坊門の地は、或は更に後れて元祿頃に編纂せられし俗書「南蠻寺興廢記」等に四條坊門を信長が建立を許可し秀吉が破壊を命令せる南蠻寺の所在となせどもそれは寧ろ五條坊門の地に擬定すべきにあらずるか。四條坊門と記せる書物は、後世の所傳にして而も信用薄き野乘の類なれば、予輩は比較的古今編せられ、比較的信憑すべき「吉利支丹物語」と「京雀」との所記に傾きて寧ろ五條坊門とする方眞に近しと思惟するなり。

第二章 織田信長と基督教 (其の二)

一 安土城下の切支丹寺及び修學院

信長の造營したる安土城あつちの落成するや。(天正四年落成) 領内一般に布告して士民の拜觀を許可す。爰に於て士民、僧侶の安土に來る者續々相次ぎ、一日數千人の多きに達した。オルガンチノ師も亦一日安土に至り、この美麗なる宮殿、城砦を參觀して、頻りに賞賛せしかば、信長大に喜び、佛寺は一字も新に建立するを許さなかつたのにかゝはらず、オルガンチノ師には市街に於て一區の土地を與へ、基督寺院を建つることを許可した。この寺院は信徒の熱心なる助力によつて成つた。殊に高山右近の如きは一千五百人の人夫を寄附して、その工事を助けたので、僅々數ヶ月にして竣工し、大成寺と稱す、是れ天正七年のことである。其の後ゼスイト派支部長アレキサンドロ、ワリニャーニが來つて信長に謁見せし時、安土に學校設立の許可を受け、直に京都にて工事中であつた學校の建物を此處へ移して建築し、貴族の子弟二十五名を集めて西洋の技藝并に語學等を教へた。信長自ら開校式に臨み、生徒中の一人日向國都

安土城の落成

信長安土に切支丹の寺院及び學校の建築を許す

於郡の領主伊東義益の子伊東ゼロームの西洋音楽を奏するを聞き大に興味を感じたと云ふ。(天正九年)オルガンチノは大成寺に於て布教を勤め、時々信長の招きに應じて教義を説明し大に功を奏した。

佐々木義堅の一族

當時安土に居た近江の前領主佐々木義堅は夫人と偕に洗禮を受し後間もなく死去したので、佛教徒は之れを以て神佛の罰であるとして公子等を寒心せしめ、爲に洗禮を受けることを延期せしめた。信長の三子信忠、信孝、信雄等も亦オルガンチノの説教を聞き、大に心を動した。斯の如くして安土の教會は一時大に繁榮せしが本能寺凶變の時、明智光秀の爲に焼かれて烏有に歸したと云ふ事だ。

織田信忠と基督教

信長の子信忠一日オルガンチノ師に會して曰く、我若し基督教に於て要求する所の正直、潔白を行ふを得ば自ら基督教とならんことを欲すと雖も、是我力に及ぶ能はざる所あるが如し。或人我に謂て曰く聖法は嚴格にして娛樂に耽り易き人の守り得る所に非ずと。此の時師答て曰く眞正眞實を守り此の世に生息するの義務を以て單に人類の設立したる法規と爲す時は、人類の意に任せ之れを寛宥し之れを變革し、又甚しきに至ては之れを破毀するを得べしと雖も、此の法規を設けたる者は人類に非ずして、則ち宇宙の主宰立法官の首長たる上帝なり、故に全世界に在ては此の正權の上に位し、之れを破ふるの權あるものなし、上帝は實に神明正直にして能く我輩の情弱を知る故に、我輩に負はしむるに我輩の決して耐へ得可らざる者を以てすること

なし、假令耐へ難き事有るも必ず我輩の力の不足を助けて重を負はしむべし、天理上に於ては固より我輩の遂行し難き事あるも、容易に之れを行はしむるは則ち上帝の恩恵を賜ふて我輩を扶助するに由るなり、日本に於て基督教を奉じ其の職を正行する者は皆驚くべき忍耐、謹慎の中に生活するを見て、其の事の虚ならざるを知るべし、公若し一度歐洲に航せば生涯婚姻を結ばざるの誓を爲し、唯潔白の生を送る者夥多あるを見るべし、精神潔白なれば何ぞ心に娛樂の感を起すことあらんやと。公子は之れを聽き大に感服の色ありと雖も、基督教者となりて遂に神聖の身となり得べきかは決して信ぜざりき。(西教史)

信長記並に耶蘇天誅護前記に天正九年二月南蠻國亞媽港の伴天連日本に渡り京都に到りて信長に謁し安土に於て宅地を賜はり、教堂を建て宗旨を弘めたりとある。

二 近畿地方切支丹の盛況

其の頃切支丹のありし京都、高槻、飯盛、若江、八尾、岡山等の地方に於ては基督教の祭日に集會して盛なる祭禮を行ひ行列をなすの風があつた。天正九年の復活祭に高槻に集りし信徒の數一萬五千人の多數に達し彌撒祭を行ひ、音楽を奏し、一大行列をなして其の盛況を示した。其の行列は現今も尙歐洲の天主教國に行はるゝそれと同じく、基督又は馬利亞の像を擔ぎ、數萬の信徒盛裝して行列を練り行く様は頗る美觀であつた。日本の祇園會はそれより出たるものならんと云ふ説がある。午後に至つて餘

復活祭の盛況

興あり、其の最も日本人を喜ばしめたるものは黒奴の舞踏であつた。その黒奴は教會支部長ワリニヤーニが印度より同行して連れて來たものだ。遠近傳へ聞て之れを珍として見物した。ワリニヤーニが是の黒奴を携へて京都に入つた時衆人は皆之れを見んとて群集した。ワリニヤーニは又此の黒奴をして信長に謁しせめしに、信長大に驚き以爲らく、人間の皮膚は斯くまで黒き理なし、是れ必ず僞ならんと、因て衣服は勿論、犢鼻褌までも脱せしめ、仔細に點檢して、その僞ならざるを知り、珍奇なる人間となし、奴僕として常に已に隨從せしめて居た、本能寺の變に夜に紛れて行衛不明となつたと傳へて居るが或は戦死したのかも知れない。

二月廿日大臣家御出京本能寺に御滯座これあり同月廿三日南蠻吉利支丹國より黒坊主一人來朝す、年の齡廿六七計りに相見え總身黒くして、牛の身を見るが如し、けんたがらきつはなま健體、ちから強力、はなま膚竝の人に越えたり、伴天連召しつれ候うて、御禮申上げ畢んぬ。誠に以て是れ御威光の致す所乎、(織田軍記)

信長の執政時代、近畿地方切支丹大名の興廢盛衰尠ならず、芥川の城主和田惟政は信長の命を奉じ紫田勝家と共に殿軍して負傷し、(元龜元年九月)高槻城中(芥川)に在て治療中洗禮を受た、或は云ふ、此の時聖教を學びつゝ、ありしも未だ洗禮を受る

近畿地方切支丹大名の興廢盛衰

に至らなかつたのだと。偶々其の弟高山飛彈守が、池田の城主勝政の攻むる處となり之れを援けんとて高槻城を出しに、途中敵の伏兵に遇つて戦死し、惟政の子太郎丸は叔父高山飛彈守と隙あり、之れを殺さんとして、却て弑され、高山代て高槻の城主となつた。其の子は即ち高山右近南坊である。既にして信長攝津一國を池田黨の一人荒木村重むらじまに與ふるに至り、高山右近之れに隸屬せしが、天正六年十月村重信長に反くに至り、高槻先づ圍を受けた、信長先づ右近の切支丹信者たるを知り、人をして傳へしめて曰く、若し降らずんば宣教使及び信者を殺戮すべしと。右近決せず、オルガンチノ師の意見問ふ、信長も亦オルガンチノに書を贈り右近を説かしむ。爰に於て、右近密室に入り祈禱すること良久ふして、遂に意を決し、剃髮敝衣してオルガンチノ師に従ひ信長の陣營郡山に至る。父飛彈は止まつて高槻城を守り防戦に努めしが、衆寡敵せず、城陥るに及び、信長右近の歎願を容れその父の死壹等を減じ、柴田勝家の領地越前へ放つた、飛彈守夫妻は彼の地に於て一意布教に熱心し、多くの信者を得たと云ふ。信長高槻を右近に與へてその領地とした。

高山右近の降参

こゝに高槻城主高山右近 後南坊と號す 年久しく耶蘇宗門に歸依するの儀聞し召し及ばれ、彼の宗師伴天

連を召し出され、似出され候には、此の時高山味方に参り、御忠節仕る様に才覺致すべく候、左仕候は、向後伴天連門徒相違なく立て置かるべく候、若し御請け仕らず候は、彼の門徒永く以て御斷絶なさるべきの由御細似付けられ候ふ處に、伴天連御請仕り、佐久間右衛門尉、羽柴筑前守、宮内卿法印、大津傳十郎と同道せしめ、高槻の城へ罷り越し、種々教訓申す處、高山事尤も荒木方へ人質出し置き候へども、小事を以て大事を扶くる事に候ふ間御味方に参り、御忠節仕るべき由申上げ、則ち高槻の城進上申し候云々、
(織田軍記)

天正七年十二月五日高山飛騨守事伊丹へ走入り不届したるに依て青木鶴御使にて北國へ遣はされ柴田に御預けなさは候。

丹波龜山の城主内藤德庵如安は將軍義昭が信長を討たんとて兵を擧げた時、其の催促に應じ、弟玄蕃頭と共に十字架の旗を翻し、兵二千を率ゐる京師に来て義昭を援けた。さうして、フロエー師に勸告して京師を去らしめ、手兵を以て切支丹寺の保護に任じて居たが、義昭の敗るゝに及び、彼も亦其の領地を失ひ暫時其の姿を匿せしが、後ち秀吉の朝鮮征伐の時、再びその名を顯した。其の弟玄蕃頭は此の戦亂中に洗禮を受たが間もなく死去した、其の夫人及び三子は柴田勝家の許に寄食した。三好義繼の亡ぶるや、其の領地若江は切支丹大名池田丹後守の所領となり、此處に切支丹寺が建立せ

内藤如安と其の一族

白井サンゼン

切支丹信者の總數

宗論開催の動機

られた。河内の岡山も亦岡山氏の居城となつた。彼は教會の爲に常に喜捨する所が多かつた。飯盛の城主白井サンゼンスは信長と善からずして和泉の長浦に逐はれ、彼地にて熱心布教に勤め、家門の不幸を慰めて居た、但し其の子マンシオは信長に事へて居たが、後ち父と共に明智の陰謀に加擔せりと云ふ。如此切支丹大名の盛衰甚しかつたのであるが、その興るものも、衰へるものも、各々其の境遇、地位に應じて基督教の爲に盡瘁せざるはなく、從來未だ一人の信徒だもなかつた越前、其の他の地方に基督教の傳播せしは、切支丹大名黜陟の結果であつた。當時日本人の信者幾何の數に達せしか。信長本能寺の變ありし天正十年の統計によれば、その總數拾五萬人にして、九州地方にあるもの拾貳萬五千人、其の他の地方貳萬五千人、其の中近畿地方に在るものは貳萬人にして、京都市は戦亂の爲め、信徒諸方に散在し、僅に三百人を有せしに過ぎなかつたと云ふ事だ。

三 安土に於ける佛基の宗論 其の一

日本の傳説によれば織田信長は其の居城安土に於て佛僧と伴天連とを召集して法論をなさしめたと傳ふるが。その實否は措置き、そのこゝに至つた顛末を略記せんに、先

づ信長が切支丹伴天連の布教を許可せしことを後悔せりとの記事に始まる。これより先き、信長が切支丹の宣教使を引見してその所説を聞き、信長自身はその教を信ずるの心が毫もなかつたにかゝらず、佛僧等の横暴を憎むの餘り、切支丹の布教を許可し頻りに之れを保護して居たのだが、幾ばくやなく、京都に於ける南蠻寺の取沙汰、あやしき宗門の傳教振を見聞して大に疑惑を起し、その布教を許可せしを悔いたのだと云ふ。南蠻寺興廢記は當時に於ける切支丹傳教の奇怪なる光景を記して曰く、

奇怪なる記述

彼等は本國より財寶夥しく取寄せて金銀に替へ、七寶の瓔珞、金襴の幡、錦の天蓋、六拾一種の名香、門外まで薫じ。往來の人々止まる、是れを博聞して五畿内は勿論、四國、中國、京近國より來集すること夥し。南蠻寺は日々群集を成すと雖も宗に歸依せざる者には本尊を拜することなし、南蠻寺は此の群集の人には聊も不構、洛中洛外へ人を出し、或は山野の辻堂、橋の下等に至るまで尋ね搜し、非人、乞食等の大病等の者召連れ來らしめ、風呂に入れて五體を清め、衣服を與へてこれを暖め、療養しける程に、昨日の乞食、今日は唐織の衣服を身に纏ひ、病も自ら心よく快復

イルマンの説

せる類多し、就中、癩瘡等の難病は南蠻流の外療を受け數月を歷ずして全快し、誠の佛菩薩今世に出現して救世、濟民し玉ふなりと、近國、他國風説區々なり。故に諸國の大病、難病に侵され貧賤にて、我が力に不叶者或は諸醫療養に治すること能はざる者、貴賤共に南蠻寺に群集すること不斜、ケリコリ、ヤリイス兩イルマン（神弟と云ふ傳道者のことである）悉く是れを南蠻寺に留めて良藥を施し、醫療半ばに快復する病人共を率ゐ、是等に説て曰く、抑も、我が本國は四十ヶ國と雖も此の國の類に非ず大國なり、然れども天の帝釋を敬ふが故に貧賤の者難病に侵さるゝ者なし我が國王仁慈にして國民を憐み、恵む、其の上世界の諸國皆天帝を崇敬して貧苦病難の患を通る、現安、後安の宗法なるを知らず、今世の苦患のみならず、未來永劫の罪に陥ることを憐で、今我等の如きものを世界に渡して、此の天帝の法を弘通せしめ給ふ所なり、此の日本等の如きは天帝を敬ふことを知らざるが故に、貧賤なる者多し、是れより起て邪欲深く、盜賊、惡黨をなし、或は難病等の患に沈で、未來善所の願も不叶されば、貧なる時は邪起る、邪起る故に難病又身を責む、されば今生の病は我等の療養を以て治すとも、未來の難病は治すること能はず

身の不淨は大海の潮にも滌ぎつきず、然るに今世に邪なる事をなさずと雖も惡病、貧苦に責めらるゝ者は前生の惡業の然らしむる所なり、然れば其の前生を果さざる時は永却の罪遁るゝこと能はず、各々心を清淨にして未來の惡緣遁るゝや、遁かわざるや、此の鏡を拜せらるべしとて、三世鏡と號する寶鏡を恭しく拭て拜せしむ、此の者共心に信心を起て我が未來の儼おもひを見ること誠に有難ことなりとて、是を拜みけるに、或は牛、馬、鳥、獸の形或は醜き偏形の類ひ鏡にうつりて顯れければ、此者ども驚き怖れ泣き悲み天帝の大慈悲を垂れて、未來の罪を助させ玉へと、兩イルマンになげきければ、兩イルマン曰く、各なげき悲む所最なり、天帝の崇敬する所の眞言を授け與ふべし、心を清淨にして他念なく此の珠數を以て眞言の一遍唱へて一粒づゝ外へ繰るべしと云ひ、權立ごんたつと云ふ珠數四十二粒あるを與ふ、陀羅尼文たらにぶ

配後生天破羅章 増有善生摩呂、

切支丹きしたんの伴天連ばんてんれん等がその本國より財寶を取寄せて之れを傳道の資となすに何の怪しい所があらう、又之れを以て難病人を施するの資となし且つ之れを乞食、非人に施して貧民を救助せしは賞すべきの善事ではないか。然るに、南蠻寺興廢記等の記者は之れ

を以て伴天連等が野心を逞ふするの預備的行爲なるか如くに見做せるのだ。慈善のみの行爲は以て人心を得るの不可能なるは昔も今と異なることはない。當時切支丹の隆盛になりしは別に理由ありで、伴天連等の德行、熱心が佛僧等のそれに勝れたること、その教義が戰國の人心に適應したる事等がその重なるものだ。又た記事中にあらはれたる兩イルマンの説教は、宛がら佛僧の談義の如く、現世の惡病、貧困の原因を前世の罪業に歸するが如きは伴天連等の口より出でしものと思はれず。その三世の鏡云々に至つては沙汰さたの極かぎりと云ふべしだ。要するに、この記述は其の中に差少の事實と思はるゝ點なきに非ざるも、その大部分は誤傳、捏造にして誣妄、杜撰固より取るに足らざるものだ。因に云ふ權立ごんたつとは天主教徒の用ふる珠數にしてコンダツと云ふ、又その陀羅尼文たらにぶと稱する配後生天破羅章はいごせいてんぱらしょうは恐らく死後天のハライン則ち、天國に生るゝと云ふ意にして増有、善生、摩呂はデウス（神）ゼスス（耶穌）マリヤ（聖母）と云ふ意の誤傳ではなからうか。

七日の間晝夜惡念を生せず此の眞言を唱へて兩破天連へ拜謁し、天帝の宗經を戴き、天帝の御影みかげを拜せば、今日の鏡にうつる所の未來の罪業消滅して天帝の大慈悲

を蒙るべしと教化しければ、皆同音に眞言を唱へて一七日信心を疑し晝夜に眞言を唱ふ、兩破天連兩イルマン愚蒙を誑して邪法に陥し入ることは是等の方便なり、サンタ・マリヤ、サンタ・マリヤ、斯て一七日勤行を致させ、兩イルマン此者共を率ゐて、佛殿に至る、美麗、壯嚴、金銀をちりばめ金欄の衣を纏ひ佛殿に出、又眞言を授け、天帝の宗法を説き終て、兩破天連を拜せしむ、兩イルマン又其者共を率ゐて三世の寶鏡を拜せしむるに、前後の像に引替て天子の容貌四十二相を備へ我身知らず天上に至る心地にて愚蒙の者共聲を放て悦び泣く。兩破天連曰く、汝達終に一七日眞言を唱ふと雖ども心既に改て天帝を尊敬するが故に其の精誠今世にて天上に到達して天帝の恵を得たり、況哉生涯信心を疑して崇敬し奉るをや、然らば面々心を疑して天帝の尊恩を忘れ奉らず、縱令今世は火、水、磔罪、牛割、車割の苦を受るとも、それを以て未來永却の苦に替へて今拜し奉る所の天上に至らんと思ふべし。然らば天帝本尊を拜せしめん逆クルスと云ふ物を取出す。此のクルスと云物は黄金を以て先二寸四分程にして針を植たる如くにして二尺計りの柄を付たる物、彼者共の肌を脱がせ、彼のクルスを以て脊を搔しむる、骨痛み、血流れ出る滴る所の血を

クルスに就て

以て左右の手に塗て兩手を合せて帝釋天の畫像を拜せしむ、金欄の戸帳を捲き揚れば美顔容麗なる女體の尊容懷中に小兒を抱き乳を含めたる本尊（口傳なり）玉の冠を戴き身に七寶衣を穿てり。兩破天連示して曰く、此の帝釋天は智恵を世界に降し、汝等の悲苦を以て母の子を懷に抱入れ乳味を欲する如く憐み給ふ。必ず今世を願ふこと勿れ、未來永却を頼み奉れと云ければ、多くの者共血まぶれの手を合せて拜み退去す」云云。

此の記事は切支丹に了解なき人が傳説を基として之れに自己の想像を加へたる杜撰のものたるや一見して明白なり。異國日記に載する所の宗門吟味要件十五ヶ條の中、その第二條に切支丹に元付ものは團單國より毎日金七厘を與へ天下を切支丹に成すべし云々、又その第七條に切支丹、悲田宗、不受不施三宗ともに一派なり、彼れ尊む所の本尊は午頭切支丹丁頭佛といふゆゑに丁頭大うすと名乗るなり。此の佛を頼み奉り鏡を見れば佛面と見え、宗旨を轉て犬と見ゆる、是邪法の鏡なり云々とあり。（此の規則は慶長十八年十一月に（家康時代）發布されしものとあるも詳かにその内容を研究すれば、五代將軍綱吉時代に制定せられしものたるや明である。思ふに當時三世

傳説と宗門吟味要件

の鏡云々の奇怪なる傳説が一般に行はれて居たやうだ。その迷妄むしろ憫れむべきである。

斯くて信長上洛の際、その保護を加へた南蠻寺の盛況を見聞して得意の色があつたが、その患者に施療、投薬して報酬を受けざるが如き、乞非食人を狩り集めて之れに金銀を施與するが如き、世上の取沙汰怪しき節少なからざるを聞くに及び、その傳説振りに疑惑を起し、後難を醸すの恐あるが如く感じて、心中窃に切支丹を保護せるを悔ひ、その年五月十三日（永祿十二年）安土に歸着し密に諸士を會て其の意を告て曰く、我が 立たる南蠻寺の事に關し色々怪しき説あり、殊に宗門に歸依する者には金銀を遣すとの事だが。凡そ法を弘むるに當りては歸依者より寺へ布施すべき筈なるに、却て寺より俗人へ施與をなすとは合點の行かぬ宗旨である。さきに切支丹許可の可否を諮詢せし時、文教院桃仙の意見を用ひなかつたのを今更後悔するのだ。若し南蠻寺をこの儘差置かば如何なる大事を惹起するも計り難い。因て向後此の宗門を破滅し寺院を打潰し伴天連を本國へ追歸さんと思ふが。諸士の意見は何かと諮問した。一坐肅然として一語を發する者がなかつた。時に前田德善院を以て進出て曰く、「本朝に

信長南蠻寺の
取沙汰を聞いて
怪む

は既に神儒、佛の三教あつて其の教化行はれつゝあるに、正邪不分明なる新宗門を御許可あらせられることの利害如何を窃に懸念せしに、君公には斷然之れを許可あらせられた、而して臣等實は新宗門の正邪を辯じ難き事とて、各々黙してその可否を明言しなかつた。然るに今に及んで切支丹を禁じその寺院を破却せられんとする御思召はさる事ながら、聊か時機を失する嫌あり。その故は最早都は申すに及ばず、近國までも弘まり、その上公家、武家、御旗下の大小名並に此の座に在る家人の中にも此の宗を尊み傳字須（神）の門徒に入り候者多しと聞く、若し今破却の沙汰に及ば、忽ち一揆起り不測の變を生せるも知るべからずだ、今暫らく猶豫し時機をまつて處分の儀仰出されて然るべしと。信長打ちうなづき、切支丹を保護せしは我が一生の不覺だつた、此上は宜敷思案もあらば延慮なく申し出ずべしと云つた。時に伊賀伊勢守座にあり。玄以の説に同意し、進み出て曰く、此のまゝ理由なくして南蠻寺を破却せらるゝは宜しからず、因て先づ切支丹の伴天連と佛教の僧侶とを一堂に會して宗論をなさしめ、その勝敗によつて正邪を決することに定め、新宗門邪なる時は之れを嚴禁するも唯か違背仕るべきと。信長その説に従ひ、佛基の宗論をなさしむるに決した。

基督教論の開始

四 安土に於ける佛基の宗論 (其の二)

かくて信長は宗論の期日を定めてその旨佛教諸宗の僧侶並に南蠻寺の伴天連に通達し、之れを安土に會せしむ、爰に於て佛教よりは南禪寺の印長老、淨華院の理道和尚永觀寺の深海律師、其の他諸宗の碩學來會し、南蠻寺よりは伴天連、普留考務その他の伴天連イルマン等皆安土に來着す。普留考務とは永祿十二年京都で初めて信長に會見せし宣敎使フロエーのことだらう、その經歷の一斑は後に記するの折もあるべければ之れを略し、爰には日本側の古記録にあらはれたる普留考務の人となりを書さう。

「此の普留考務は始て長崎へ渡來し、一年に一切經を三遍熟讀して、佛法に通じ諸宗の大概を諳ず、其の全体頭髮鼠色にして、頭上に蓋を伏せたる如き月代あり、眼は丸くして目鏡を掛けたる如く内に黄金の色あり、鼻は榮螺貝のイボをすつて付けたる如く、面は馬に等しく、口廣くして五六寸許り、齒は馬の齒の如し、馬上に在つて鞍の上に立て行き、己が爪より火を出して多葉紛を吸ひ、或は木の上に鳥杯すはりたるを見て馬をすゝむるに、其の鳥動かず、遂に其の枝を手折りて持つに鳥不動して造付

宣敎使フルコ

伴天連の面容

けたるが如し。その外種々の幻術を作し奇妙の目を驚かしむ」云々。

魁梧たる異人、博學なる伴天連の面容を畫き得て髮髭かりだ。彼れは果して佛教の經典を破究せしことがあつたか、恐らくは三遍は愚か一遍も一切經に手を觸れしことはなかつたらう。その幻術に至りてはさながら下手なる奇術師のそれに似て極めて拙なきものだ。切支丹の魔法としてはあまりに貧弱だ。一たひ口を開いて呪文を唱ふるれば天地乍ら震動し數多の天人に圍まれたるゼスス、マリヤの出現まします如き大々的奇術を施さなかつたのは不思議である。思ふに切支丹が魔法を行ふものと想像せられたのは徳川三代將軍以後のことにして信長時代には斯ることを信ぜしものは一人もなかつたに違いない。さて、

佛基の問答

双方安土に到り期日を定め其の時刻に及で諸宗の僧侶座すれば普留考務を論師として南蠻寺の學徒出席す、時に普留考務蜀紅錦の衣を着して二尺計の劍を帶して向ひ進み、僧家より南禪寺の印長老是れに對す。時に普留考務曰く、如何なるが佛法、印長老答て曰く、即心即佛、普留考務又曰く、如何なるが即心即佛の奥意、長老又答て曰く、即心即佛、其の時普留考務座を立ちて長老の胸をつかんで劍を抜きて胸

に押當て、如何なるが即心即佛の奥意と、責掛けて問ふと雖も、長老不_レ動眼を塞いで默然たり、淨華院の理道和尚これを見兼ね、進みて是れに對せんとす、印長老の弟子中少も不_レ騷未だ落着見えず暫く待ち給へと止む、因_レ茲理道進むことを得ず、暫くありて長老眼を開きて喝と一喝を吐きければ、普留考務眼を塞いで忽に氣絶す、僧家口々に邪法正法に敵せず新宗邪法なりと罵る。南蠻寺の宗徒怒つて、法問未_レ分、勝劣誰か知らんと。既に鬪諍に及ばんとす。信長大に制止して曰く、論は邪正を分つにあり、何ぞ鬪諍して勝負を可_レ分や、違背せば夫れを以て劣れりとせんとありければ、騷亂忽ちに鎮まる。然る處に攝州荒木攝津守村重中國の毛利に與力すと注進す、是れ急務なり、法論は邪正未だ分明ならず、重ねて召合すべし、双方歸寺あるべしとて、宗論落着なかりければ、新宗教破却の沙汰も止みぬ」と。

これは南蠻寺興廢記やその他の古書に記載せられたる佛基安土問答の状況なるが、その南蠻寺を代表すてふ普留考務の扮装と舉動は宛がら山門の荒くれ法師を引張り出したるが如く、又その問答の貧弱なる其の舉動の粗暴なる、宛がら壯士同志の討論の如く、乍ら鐵拳相飛ぶの修羅場を演出せんとし、信長の一喝にあふて鎮正に歸し、尋い

問答の中止

佛基問答の批評

て問答を再開せんとするに當り、偶々荒木村重反逆の警報至り爲めに之れを中止延期したのだと云ふ、然も無期限に、而して新宗教切支丹の破却はいつしか自然沙汰やみとなりしは奇怪千萬ではないか。

五 安土に於る佛基の宗論 其の三

この問答は現今にても切支丹のことを記述する者が好んで引用する所のものであるが、その史實に關して疑はしい點が尠からずである、先づ其の時日に關して觀察を下さんに、此の問答の前提とも云ふべき信長の南蠻寺に對する不審即ちその傳道振を見聞して伴天連の舉動に疑惑の念を起せしことを、事實と見做して—永祿十二年の夏信長の上洛の時だと云ひ、その居城安土に於て家臣と會して之れが善後策を評議せしを同年五月十三日であると云ふ（内政外教衝突史）これ怪むべきの點だ。信長が始めて伴天連フローエに會見せしは永祿十二年の三四月の候二條城建築工事中なりしは史實の證明する所だ。されば、信長は宣教使と會見後僅々一二ヶ月にして切支丹の傳教を許可せしを後悔し、これを禁止せんとせしものと解せざるべからず、信長如何に性急の人なりとは云へ、持種の事情なき限り斯る輕卒なる舉に出たりとは受取り難き

佛基問答に關し疑惑尠なからず

南蠻寺に就いて

談なり。傳説の記者は信長の後悔せし持種の動機を南蠻寺の不審なる舉動、即ち伴天連等の不受施の行爲に歸すといへども、これ亦問題にならず、何となれば貧者に施與し、病人に施療することが信長に不審を懐かしむべき理由とならざるのみならず、(魔法の鏡云々は取るに足らず)問題の中心なる南蠻寺なるものは未だ世に現出せざりし時代なればなり。蓋し俗に所謂南蠻寺と稱する京都の切支丹寺のことは前に述べしが如くその本名を昇天寺と云ひ日本切支丹の開祖ザビエーが鹿兒島に上陸せしより廿有八年聖母馬利亞昇天祭の日を以て落成せしとあれば、その時日は天正五年七月にして傳説にあらはれたる永祿十二年より七ヶ年の後ならざるべからず、さすれば、永祿十二年頃には南蠻寺の建立は勿論その設計だも未だ世にあらざりし時なり、永祿年間において京都の切支丹寺は普通の民屋を改築したる假寺院にして極めて貧弱なるものなるのみならず。三好三黨の亂によりて破壊せられたれば、フロエーが信長より之れを申請たる時は殆んど荒廢して見る影もなき景況だつた、因つてフロエーは之れを修繕して漸くその用に充てしに過ぎざりしと云へば、固より傳説に云ふが如き南蠻寺の盛況は夢にだも見る能はざる始末であつた。況哉問題の起りしと云ふ。當時は未だそ

問答開始の期日に就いて

の修繕も完からざりし時なるに於ておや、又信長が切支丹禁止の善後策を安土に於て協議せしと云ふも疑はし、何となれば安土は當時を去る六ヶ年後の天正四年を以て造築なれし城地にして、永祿十二年の頃は信長濃州岐阜に在城し居たればなり。

又問答開始の期日に關しても疑ふべき點あり、傳説は信長が切支丹の舉動に不審を懷き家臣を會して之れが善後策を協議せしを永祿十二年の五月なりと云ふ。然るに外交史稿は信長によつて其の問答の開始されしを天正五年の十月となすのである。その頃安土は既に信長の居城となり南蠻寺も亦落成し居たれば物語の辻褄はよく合ひたるやうなれど、信長が後悔せしと云ふ時と問答開始の時との期間が餘りに長きに失するではないか、信長は伴天連等の不受施的傳道が由々敷國家の大事を醸すの惧ありと思惟し、家臣と協議の結果、基佛問答を開始して之れが善後策をなさんと決しながら、斯る大問題を八ヶ年間も等閑に附し去りしは何事ぞや。たとへ軍國の政多事なりしとは云へ一日も忽かせにすべからざる大事件を棄て置しとは不思議の至だ。況哉信長の如き何事をも迅雷疾風の處理せし軍人政治家が切支丹の處理に限つて此の如く怠慢であつたとは受取難き談ではないか。

次に問答中止の理由に關しても亦疑ふべき點あり。傳説に云ふ所によれば、この問答の開始時間は僅かに一日數時間に過ぎなかつたやうだ、然もその問答たるや、壯士と乞食禪の喧嘩の如く二三言にして騷擾場裡に終りを告げ勝敗未だ決せざるを以て尋いて問答すべき筈であつたが、時しも伊丹の城主荒木攝津守村重が中國の毛利氏と相通じて謀反せりとの警報に接し、爲に是の法論を中止せりとある。而してその警報の安土に達せしは天正六年十一月なりと云ふ。天正五年の十月に開始されて一日で終つた答問が、一ケ年と一ヶ月の後なる天正六年十一月に中止されたとは不可解のことではないか。伴天連が佛僧と問答せしは僅かに一二日にして残る三百九十餘日を何等爲すことなくして空しく安土に滞在して光陰を消費せしことはあり得べからざることだ。而して其の後天正七年三月には有名なる法論、即淨土、法華兩派間の宗論を安土に於て開かれしにかゝはらず、一旦中止されたる佛基問答再開の擧に就ては否として聞く所がない。これ怪むべきに非ずや、或は云ふ信長荒木の亂に切支丹を利用して敵方の驍將高山右近を降参せしめたのを徳とし、新宗教破却の詮議も沙汰止みとなつたのだと。果して然るか敵の一部將を招致せし功に代へて國家の大害と思惟せし切支丹をそ

のまゝに放任せしのみならず、その後安土の城下に切支丹寺を建立し(天正七年)又基督教の學校を設立せしめしが如き(天正九年)その保護ますく厚きを加へしが如き觀あるは咄々怪事ならずやだ。

要するに信長と切支丹とに關係したる傳説には虚妄のこと多く、就中伴天連ウルガソ招致の始末、南蠻寺の建立、之れに關聯したる叡山僧徒の訴告、扱は勅使派遣の記事等は全く捏造したる妄談なるが如く、信長が切支丹の事に就き後悔せしと云ふ話も亦これ虚妄の談なり、彼が切支丹を保護せしは終始一貫して變ることなく其變死の時に至るまで毫も後悔したる形跡なし、隨つて問答を開催すべき必要もなく(他の動機によつてはいざ知らず)又その内容の貧弱なる、其の時の前後矛盾せる、何れの點より考察するも問答そのものも亦架空の妄談に過ぎざるものである。

思ふに我國に於て切支丹にあらゆる悪名を附して之れを擯斥せしに、信長程の人物が、切支丹宗を終始保護せしとありては、大和民族の面目を汚すが如く思惟し、爲に後悔云々の臆説をなして信長を辯護せんとせしにあらざるか、而も其の結果は信長を誣て偽善者となすに至る最員の引倒しとは斯る類のことだらう。

六 信長が基督教を保護せし理由如何

信長が切支丹宗を保護せし理由如何。切支丹宗門來朝實記の記者は織田上總介信長とてふ人は奸邪の心内に深く、外には神社、佛閣を破却し、其の領地を奪ひ、我慢放逸の振舞多し。故に守護の善神も見放し給ふにや、天魔其の虚に乗じ、外道邪法を此の土に引入れ云々と云ひ、天魔の所爲に歸せり。是れ當時の神官僧侶の意見を代表したものであらう。「君主たる人の本心却て神の主宰する所にして、正裁を行はんが爲めには、假令仇敵と雖も之れを擧て用ゆるものか。信長は其の姓殘酷、傲慢なりと雖も、神之れを擧げ聖教の援となし、之れを保護せしむ」云々。これゼスイト派宣教使を代表する所の西教史記者の説である。惟ふに信長が切支丹を保護せしには諸種の理由があつたやうだ。放縱なる生活をなせし佛教僧侶の跋扈を惡み、其の反動として謹嚴篤實にして布教に熱心であつた伴天連の宣教使を愛したのも其の一理由だらう。他人の賞讃を受けることをこよなき愉快とせし所の稚氣ある信長が外國人に對し其の賞讃を博し、且つ彼等に其の威光を示さんとせるのもその一理由だ。或は之れを政治に利用し切支丹大名を其の部下に引き寄せ、其の勢力を遠く九州地方にまでも及ぼさんとの

信長が切支丹
を保護した理
由

野心もあつたのだらう。更に彼が敦盛の曲の中熊谷直實が敦盛を打取つて後ち無常を觀じたる道心發露の條に見えたる、人間五十年げてんの中を比ぶれば夢幻の如くなり、一度生を受け滅せぬ者のあるべきかと云ふ所を愛誦したることを見れば、信長も亦一種の人生觀を抱いて居たやうだ。されば彼は新宗教によつてその人生觀を解決せんと試み、且つ之れによつて戰國時代の民心を緩和慰藉せんとの志望もあつたのではなからうか。

要するに信長が世間の區々たる宣務使國害論に耳をかさず、常に反對を退けて終始之れを保護せしは其氣宇偉大なりと云ふべしだ。天若し信長に假すに、更に数十年の歲月を以てせば、日本帝國の國運發展に絶大の効果をもたらせしやも知るべからずで、噫惜哉と。嗟嘆せざるを得ない。信長晩年に至り切支丹伴天連の野心を看破し之れを保護せしを悔むたりと云ふは爲にする所ある臆説にして固より採るに足らざるものである。

區々たる世論
に耳をかさず

第三章 大友、有馬、大村三家の遣歐使節

一 初て歐洲に赴きいた日本人

日本人にして初て歐洲へ赴きし者は何人なるや明ならず。西教史に據れば、天文二十年ザビエーの印度へ歸りし時、日本の信徒ベルナルド・マツシユーの二人を同行せりと。彼等は日本基督教會の初穂にして鹿兒島にて洗禮を受し以來常にザビエーに隨從して京都及び山口へ赴きし人である。然るに、マツシユーは歐洲へ赴くの途次、印度の臥亞にて病死し、ベルナルドは羅馬より葡萄牙へ至り、コイムブラの學校に學びしも、これまた中途にして死没した。是時豊後王の一貴臣聖師ザビエーと同船せしが、此の者は印度の總督と同盟の約を結び、我國に弘法の爲に來れるゼスイト教會の僧を得ん爲の豊後王より印度の總督への書翰を携帶せりと、是の使者は即ち大友宗麟の遣したる植田玄佐及び渡邊宗覺等のことだらうか、玄佐等は印度總督に會して使命を果したる後進で歐洲に渡り、羅馬へ到りしものゝ如し、聞く伊太利亞の舊記に一五五一年に羅馬にて死せし日本人ありと、少しく年代の相違あるもこれ或は植田のことならんか。

最初の渡航者は何人か

一説に植田は歸航中に死亡し、從者の其の遺物と、報告書とを携へて歸り來りたるに、是れ又薩摩海にて暴風に遭ひ船は難破したれど、辛ふじて生命を全ふし使命を達するを得たりと。而して玄佐の隨行員たりし渡邊宗覺は、羅馬滞在中砲術を傳習して歸朝したりと云ふ事だ。

二 三家の遣歐使節

其の後三十年を経て天正十年に至り九州の切支丹大名、大友、大村、有馬の三家より法皇グレゴリーの第十三世、及び西班牙皇フェリツプ二世の許へ派遣したる使節一行の事は、内外記録の詳記する所だ。是の使節派遣の舉は、當時の視教官たりしアレキサンドロ、ワリニャーニの發議に出たるもので、其の目的とする所は日本人をして、親しく歐洲の文明に接觸して歐洲各國の富強、及び切支丹宗の盛大なるを目撃せしめ、日本及び支那を以て地球上最高の文明國と自負せる、日本人の宿病たる井蛙の見を破らんとためであつた。又一は歐洲人をして東洋にも日本人の如き才能智力の勝れたる文明人あるを知らしめ、併て宣教使の開拓せる新傳道地の極めて有望なるを覺らしめ、因て以て外國傳道の熱情を喚起せんが爲であつた。而して日本の布教に關聯して

使節派遣の目的

更に重大なる目的が是の使命中に含まれ居るのを見る。即ち日本宣教區の獨立及び教育制度の擴張がそれだ。從來日本の傳道地は印度傳道區の附屬なるが如き觀あつて、宣教使は皆印度を本據として日本傳道事務を管理し居た。又日本には宣教使を養成すべき高等の學林なく、又司祭を任免すべき獨立の監督なく、布教開始以後來既に三拾餘年の歳月を経て、未だ日本人にして司祭となつた者は一人もなかつた。これ日本の傳道に於る一大缺點であつた。ワリニャーニは爰に見る所あり。日本人に高等の教育を授け、司祭たるべき人物を養成するのは、彼が年來の希望にして之れが爲め他の宣教使と意見の衝突を來し激論を交へたことさへあつた程だが、反對者の勢力も又強くして容易に其の所志を達する能はず、漸くにして二三の稍々高等なる教育機關を設置せるに過ぎなかつた。思ふに、ワリニャーニは親ら此の使節を帶同して法皇に謁見し、依て以て畫策する所あらんと志して居たのだらう、然るに、不幸にして其の身は印度に留まつて使節に隨行する能はなかつたが、同志の宣教使に托して其の計畫の實行を試みたやうだ。使節の法皇に謁見せる時、宣教使ゴンザレー師が法皇の御前にて述べた演説の中に「此の島の人民は才能あり記性あるを以て宗教を解得し甚だ進歩せ

り、能く此國をして宗教を維持せしめ、益々之れを盛大に爲さんと欲せば、陛下其の國の人民を以て許多の説教者を養成するに如くなきを知得し、此の國に於て幼稚者を教育する所を建設せんとするに、土地の隔遠にして費用の過多なるも亦甚だ難事にして妨害なき能はず、是を以て此の教育所は年月を閲して教導を盡し、信仰の心固くして後ち始て盛大に至るべし。此の如くならざれば即ち基督宗を維持し佛教の信仰を廢滅する事能はざるべし。陛下よ此の使節は其の國主貴族より羅馬遣使として選ばれたる者なり。今者陛下の教育所を建設するを聞き、其の良心を以て信仰禮拜して深く仁惠を感じ、其の國の人民に代り且つ其の身の爲め厚く之れを謝す」云々とある。又使節伊東マンシオが日本基督信者に關する所の簡條書を法皇に呈せる時、法皇は之れを被見して協議の上必ず使節に満足を與ふべしと云ふ記事あり。其の條書中には如何なることの記載してあつたのかは不明なるも、法皇グレゴリー第十三世及び次の法皇シキヌタス第五世が日本人の司祭教育所の爲に多大の資金を贈遺し、又日本の監督を任命せるを見れば、此の二大事項に關する請願の其中にあつたことは明白だ。惜哉、是の使節の日本に歸還せる頃は、日本の教情一變し、秀吉宣教使追放令を發布せる後に

遣歐使の一行

して充分是の計畫を實施するの期のなかつたことを。

是使節派遣のことは日本視教官ワリニヤーニが印度へ歸還の折から、急遽の衷に決定せるもの如く、大友宗麟は前の日向都於郡の城主伊東義益よしまさの子にして、宗麟の甥たる伊東ゼロームを以て己の代表者たらしめんとせるも、ゼロームは當時安土の學校に居たので、ゼロームの従弟伊東マンシオを派遣するに決し、大村、有馬兩家は純忠の甥にして晴信の従兄弟たる、千々岩清左衛門ドム、ミツセルを派遣するに決した。此の二人を正使となし、他にその親戚中浦ジュリアン、原マルチンの二人を副使とした。彼等は皆十六歳以下の少年であつた。其の外二三の近習及び宣教使一名修道士一名もその一行に加はつた、使節一行はワリニヤーニと共に天正十年一月三十日（一五八二年二月二十二日）葡萄牙船イニヤース、リマ號 Ignace Lima にて長崎を出帆した。途上暴風雨に遭ひ十七日間にして媽港に達し、是處にて便船を待つこと九ヶ月、馬拉加マラッカを経（一五八三年一月末）コチンに至り、又春期の好風を待つこと半歳、一五八三年（天正十一年）の十一月頃臥亞に達した。臥亞駐割の葡萄牙總督及び大監督僧等は使節一行を厚遇し、盛儀を以て之れを迎へた。總督は特に彼等に黄金の頸環と金

使節の出航と
其の行程使節一行羅馬
附近に達す

三千エクターを與へ、又堅牢なる船舶を供給し、二千ジュカーを投じて之れを裝飾し使節の用に供した。然るに、ワリニヤーニは其の時法皇より印度の司教に任ずとの辭令に接したので、使節一行を師父ヤコブ、メスキター及びヌネズ、ロドリゲーに托し、己は印度に留まることゝなつた。斯くて使節一行は一五八四年の二月八日（天正十二年）臥亞を發し、途中カナリー島に上陸し、葡萄牙の都府リスボンへ着せるは一五八四年の八月十日（天正十二年七月五日）であつた。これより使節一行の旅行は宛も凱旋旅行の如く、リスボンを始め至る所にて貴顯の送迎を受けた。西班牙の首府マドリッドに於ては、フェリツプ第二世より王公の待遇を受け、西皇に謁見して大友家以下三家の書翰及方物を贈呈した。西皇の離宮エスコリヤルに留まること數日、再びマドリッドに入つて王候、大使、貴人の訪問を受け、又武庫、金庫、學校、美術院等を參觀した。それより羅馬へ至る沿道アルカラ大學校は帝王の禮を以て彼等を饗應し、其の伊太利に入るに及んで、ピサ、フロレンス、シエンナに於てはタスカニー大公の歡迎を受けたが、羅馬に入るに及んで、彼等の驚異は其の絶頂に達した。使節は羅馬の都市を距る二日程の所に至つた時、法皇より派遣したる騎兵二隊の出迎を受け、一五

八五年（天正十三年）三月二十日金曜日を以て護衛兵を従へて羅馬に入り、ゼスイト寺院に至り、耶蘇組の總長アクヰヰアの歓迎を受けた。使節が長崎を出帆せるよりこゝに至るまで三ヶ年と一月二日を費し、行程七千里に達したと云ふ。法皇は使節を見るに先ち之れが待遇法を定めんとし。カルデナル僧等の評議により、歐洲帝王の使節と同一の待遇をなし、正廳に於て公然面謁すべきことに定め、歐洲の各國大使に對すると同一の敬禮を爲すべきことを命じた。

三 羅馬法皇と三家の使節

一五八五年（天正十三年）三月二十三日は使節が法皇クレゴリー第十三世に謁見の當日である。是の日早朝使節一行は西班牙大使の馬車にて法皇ジュリアス第三世の別殿たるデルボボロー市街の外まで誘引せられ、それより行列を正して羅馬市に入る、第一に美服を装ひたる法皇の近衛騎兵先導し、第二にスキズ護衛兵、第三に各官吏、次にカルデナル僧の従者、彼等は斷食の期日なるにより紫色の衣服を着して參列した。次に佛蘭西、西班牙、威尼斯其他各國の大使等列を正して進み、次に赤色の衣裝を着けたる馬上の貴族、官吏が行列した。日本三家の使節は日本の禮服を着し、金銀

使節の參内式

伊東萬千代

門々岩清左衛

原、中浦の兩
副使

寶石を以て裝飾したる大小を帶び、馬上ゆたかに肅々として其の後につゝいた。大友宗麟の使節伊東マンシオは二人の大監督を左右に隨へて先に進み、大村、有馬兩家の使節門々岩清左衛門、ドム、ミツセルは二人の監督僧の中央にあつて、第二に進み、副使原ドン、マルチノは二人の貴族の中央に騎して第三に進み、使節の通譯官たる宣教使メスキター其の次に列し、中浦ジュリアンは是の時病氣であつたので行列に加はることは出来なかつたが、非公式に參内して法皇に謁見し吻足の禮を行つた。而して羅馬の貴族、紳士等は馬上にて其の行列の殿をなした。又道筋の左右は羅馬の貴族より組織したる騎兵の一隊を以て守衛し、沿道の兩傍には滿都の士女集つて堵の如く、又人家の窓或は物見廊は無數の群衆で充滿し、皆歡喜して、使節一行を祝した。かくて使節一行の行列がデルボボロ門より羅馬市に入り、ヴァチカン宮に向て進むや、聖アンゼルの砲臺は禮砲を發し、寺院の鐘聲、喇叭の音響は市民歡呼の聲と相和して敬意を表し、法皇は全朝を従へて正殿に御し、王者の禮を以て一行を見た。使節等伏して拜禮す、法皇グレゴリー涙を揮て彼等を起し、順次に之れを抱擁した。使節等又各法皇の聖足を吻して後ち身を起し、佇立して、大友、大村、有馬三家の奉書を上る。其の書に曰く、

天主の代理として地上に於て恭敬せらるべき最高至聖の法皇陛下に書を奉る。
我が主君たる神の佑助を熱請し、敢て書を陛下に呈す、夫れ日月星辰を保持する所
の天地萬物の主にして其の宰たる神は、當時最も深き蒙昧昏瞑の裡に埋没せる我の
上に光明を輝やがし、我等の國々の住民に其の恩恵の寶藏を開示したまへり。今よ
り凡そ三十四年前神は人心に神の言葉を播く所の師父等を我等の國々へ遣はし給ひ
しにより、神の御旨により我も亦其の恩澤にあづかるを得たり。是れ偏に聖父陛下
の功德と基督教民の祈禱とに基くことにして、我等の感謝に堪へざる所なり、我身
若し老衰と疾病とに悩まざるゝことなく、又戦亂によりて妨げらるゝ事なくば、親
しく聖所に赴き陛下に恭順を表し聖足を吻し、之れを頂戴し、又陛下の御手を以て
我心胸に十字架形を模するの恩恵を拜受せんと欲するも、以上の理由に妨げられて
其の素志を果す能はず。是れを以て日向國主の男にして我が姪たるドム、ゼローム
を以て我代理たらしめんとせしも、彼は家を離れて遠く他國にあり、且師父視教官
出帆の時日切迫せるを以て、其の従弟ドム、マンシオを以て彼に代へたり。地上に
於る神の代理たる陛下が今後も續いて我及び我管下の教民に恩恵と保護とを垂れ給

は、實に幸の至なり。先に陛下が師父視教官を以て我に贈遺したまひしレリクエリ
ー（記念物入の箱）は謹で拜受し恭しく之れを頂戴せり、陛下の御鴻恩に對する感
謝は口舌の能く盡す所に非ず、書意を盡さず、是れにて筆を擱すべし、蓋は我の身
上及び領地に關する詳細の事情は師父視教官及びドム、マンシオ口上を以て陳述す
べし爰に謹で全心を捧げ恭順の意を表す。恐惶謹言

主降生一五八二年一月十一日（天正九年十
二月廿七日）

陛下の最も神聖なる足下に伏して

豊後の王フランシスコ

次に有馬、大村兩家より奉れる書を高讀し畢つて後、葡萄牙僧カスバル、ゴンザレ
使節に代り拉典語にて上奏する所があつた。彼は日本帝國及び其の民族を賞揚し、此
の如き島國に傳道し其の貴族人民を教化し得たるは法皇の聖徳の然らしむる所にし
て、近頃新教勃興の爲に歐洲にて失へる處は東洋日本國に於て恢復したるの喜を述べ
て、羅馬聖公會の隆盛を祝し。日本使節の來朝は往昔羅馬帝アウグスタスの御代、
印度使節來朝の盛事にも勝る盛事なりとして盛に之れを敬賀し、日本將來の布教に關

葡僧日本民族
を賞揚す

法皇使節を優待す

する希望を述べて其の演説を終つた。滿朝肅として聲なく、宛ら水を打たるが如く、感極まりて流涕するものあり、尋てアントニー、ボカバチユリー法皇に代つて答辭を述べた、使節等再び法皇の聖足をすひ式畢つて後、法皇の姪なるカルヂナル僧シキスタスの響應を受け、再び法皇に謁見して親しく談話を交へた。法皇殊に彼等の爲に天鵝絨に金繡したる美服を調製して之れに與へた。又しばしば彼等を引見して之れを厚遇した、其の行幸の時は使節も亦騎馬にて隨從するを許され、聖ペテロ寺院を始め、其の他の大寺に參詣し。又各國大使の訪問を受ける等款待至らざるなしと云つた風であつた。然るに、老法皇グレゴリー第十三世は使節等到着後十八日にして殞落し（一五八五年の四月十日八十歳の高齡を以て）シキスタス第五世位を襲ぐや、使節等は復新法皇の恩命を辱ふし日本信者に關する請願書を奉つて其の受納する所となり、即位の當日大禮に參列するの光榮を得たのみならず、法皇より四人を金拍車の騎士に叙するの恩命に接した。其の叙任式には各國の大使參列し、佛蘭西、威尼斯の兩大使は彼等に拍車を着くるの役を務めた。法皇は自ら彼等の首に美麗なる金鎖を懸け、且つ授くるに劍と帶とを以てした。彼等感激して誓詞を奉り一身を抛て切支丹宗の爲に努力すべ

使節等四人金拍車の騎士に叙せらる

使節の一行羅馬を發す沿道の都市の盛大な極む

きを誓つた。新法皇は復日本の學校資金として毎年四萬エークを支出すべき先法皇の贈遺に更に二千エークを増加し、使節の旅費を給し、又大友、有馬、大村三家の羅馬聖公會へ加入の免狀、並に方物、答書を與へ、使節各々には清淨なる眞材の十字架を以てした。使節等の榮譽はこゝに止まらず、法皇は之れに政治會議を傍聽するの免狀を與へた。それば唯君主にして始て享くるの權利であると云ふ。又元老院は四人をカピトル堂内に招待し、之れに羅馬の公民たりバトリシアン（貴族）たるの資格を授與し、之れが表章として手掌の大にして指の厚さなる金印を捺したる羊紙皮の一札を與へた。その款待や至れり盡せりと云ふべしであつた。

四 使節羅馬を發し歸途に就く

使節一行は一五八五年（天正十三年）六月三日を以て羅馬を發し歸途に登つた。羅馬の市民及び軍隊は之れを城外まで護送し、沿道の都市の送迎は至る處に盛大を極めた、威尼斯共和國の統領、及び元老院議員は彼等の爲に有ゆる恩惠を示し、畫工チエントレットに二千「エクス」を與へて彼等の肖像を描かしめ、それを代々の統領の肖像中に列した。マンツァ、ミラン、ゼノアの諸市も、亦彼等を歓迎して至らざる所

がなかつた。西班牙皇帝は特に彼等に船舶を供給し、又贈るに方物を以てした。彼等の葡萄牙の都リスボンを發船せるは一五八六年(天正十四年)の四月三十日であつたが、途中モザンビクに留まること數閱月、其の臥亞に達せしは一五八七年(天正十五年)の五月二十九日であつた。而して是處に滞在すること又數閱月、印度總督の使者として日本へ渡る師父ワリニャーニに伴はれ一五九〇年(天正十八年十月二十七日)を以て漸く長崎へ安着したのである。彼等が本國を出てより八星霜、是の間日本の教情大に變化し、切支丹は又昔日の如く順境でなかつたのは遺憾である。此三使節が日本へ歸朝してからの行動は後に記述することにし、爰には彼等が威尼斯に残して置いた一二の書物を紹介しやう。

威尼斯のサンタ、マリア寺院の壁上に箝したる古碑あり。碑文は伊太利の古文にして碑の大きさは三尺四方ばかりである。其の譯文左の如し。

日本の喜捨を謝する文

チユガ(日向)國王の甥ブング(豊後)國王の使節として英邁且つ尊貴のイトオ、マンチオ、(伊東萬千代(アリマ(有馬)國王及び高貴なるバルトロメオの妹婿ミケ

八年目に日本に歸る

ル、チユンガ(千々岩ミケル)並にチゼン(肥前)國の名門高官なるジュリアのナル、カルハ(中浦)マルチャノヤーラ(原)の數人は前記各國王及び從臣等の代表者として地球の他の半球の一端なる日本より來りて當地の學校を訪ひ、大徳カルヂナル、ベツサリオネによりて納められたる神と遺物を禮拜し、彼等歸國の後當時の名によつて其の國民の間に聖教を流布せしむるの善行を勵ますと誓ひたり依て當時は嚴かなる儀式を以て彼等に名譽の法帽を贈り其の信心を表彰せり。願くは此の功徳を以て聖母の慈仁益廣く世に行はれんことを歸命頂禮一五八五年(朝日新聞西村氏譯)

その他ヴェネシヤノヴィチエンツアの劇場には大友氏以下三家の使節が羅馬にて歓迎を受くるの狀を描きたる壁畫あり。又別に威尼斯人民に對し使節等より贈つたる感謝狀がある。

威尼斯人に贈つた感謝狀

天地萬物の御作者又其御子、我々御扶手、世主子之御合力、令三染筆、侯訖、抑從日本國、豊後屋形之使者として日向屋形の満、伊藤鈍、満所又有馬の屋形、同大村

感謝狀

鈍、波留戸路銘之使者として千々岩鈍彌翁に、其外原鈍丸知野、中浦鈍、壽理安、肥前之兩侍至良摩罷出候。是又右屋形並日本諸貴理シタン爲レ代發波尊者之御足を奉レ吸ラベヂーを爲レ奉レ上、三年の波上を來レ凌候、然後部禰舎之事及承候至古今敵之安地被レ成候ハ又賢在所一見本意之條則罷出候誠從レ存茂結構驚目候。殊各衆對我々御慈情是又不及筆舌候然間爲ニ向後覺一筆染置候、是又甚深之御大切於自今以後忘却有間敷誌迄候、當所の事者雖爲ニ遠國ニ於ニ日域ニ無ニ其隠候萬一無事歸國候は我々見聞之所具於我朝一々令披露候穴賢々々

御お世千五百八十五年七月二日

是の使節派遣の結果として見るべきものは、歐州人に幾分か日本人を理解せしめ、傳道熱を勃興せしめたのは其の一である。高等學校設置の目的を達したのは其の二である。而して使節等自身如何なる感を懷いて歸朝せるかは不明なるも、必ず得る所があたに相違ない。彼等は歸途媽港に滞在中其の紀行を對話風に書いて残して置いたと云ふ事だ。就中、日本監督任命の實現されたのは其の最大なる効果である。使節の羅馬を去つた後、間もなく法皇は西班牙皇帝と協議してセバステアン師を選で日本駐割の監督

使節派遣の結果

僧となした。是れ日本の信者に堅信禮を施し、又日本の學校にて教育される人材を僧職に任じ、日本教會の基礎を堅固にせんが爲であつた。然るにセバステアン Sebastian は來任の途上モザンビクウにて病死したれば、法皇は印度の監督ペール、マルテネズ Pierre Martinez 以てを之れに代へた。是れ實に一五九一年(天正十九年)がだ、彼が日本へ來朝せしはそれより數年後の慶長元年であつた。以上は皆日本の基督教會に取つて重要な擧なるも時勢非にして其の實効を收むるの邊がなかつたのは是非もなき次第であつた。

遣歐使の中千々岩は一旦修道院に入りしも間もなく退學し後背教者となつた。伊東は一六一二年四拾五歳にして死した。中浦は一六三六年十月長崎に於て殉教す原の死は不明なり彼は葡語を譯するに妙を得て居たと傳へる。詳なる事は後に叙述する。

伊東マンシオ等使節が歸朝の途中媽港で著述した對話風の紀行は一五九〇年に日拉兩文のもの共に出版された。その日本文の方はどうなつたか不明であるが、拉典文の方は「羅馬朝廷へ派遣の使節と其の使節の航海日誌より蒐集したる歐羅巴に於て又全旅行中に於て觀察したる事物とに關する對話」と題し、耶蘇組の司祭ラウデ譯といふ、恐

使節四人の將來

使節等の著書

ろしく長い表題で、一五九〇年媽港で支那紙に印刷された。其の後二年にそれを香柏の箱に入れ結構なるカルタツタ布で、それを十重二十重どころか殆んど百重にも包み、さながら無比の眞珠でも取扱ふやうに丁重にして葡萄牙の大船マドラ、デ、デウス號の船中深く藏されたと傳へて居るが、その後の事は不明である。(古今紀要)

第四章 宣教使の動靜及び基督教の實況

一 カブラルの巡視

前編の末章に宣教使の動靜を略記しカブラル Cabral 副支部長の日本傳道地巡回の道に登り、大村へ到つた所にて筆を擱した。其後カブラルは豊後に至り大友宗麟に謁して是の地の布教を處理し、元龜元年東上して堺、三箇島、及び高槻を経て京都へ至り、足利將軍義昭に謁見して切支丹保護の思命に接し、數日にして濃州岐阜に至り、織田信長に謁見して敬意を表し、且つ切支丹保護の恩恵を謝した。信長引見して厚く之を遇し、師父等の學識、徳行の遙に佛僧等に勝れるを賞揚し、切支丹を保護し他教を絶滅せんことを誓つた。信長の宣教使を待遇すること極めて優渥であつたので、之れ

副支部長カブラル

を見聞したる近畿の豪族で聖教に歸依するものが多かつた。カブラルは岐阜に留まること二日、再び京都へ還り、將軍義昭に暇を告げ河内の三箇島に至りて豪族六拾人に洗禮を授け、堺を経て豊後に至り、天草島へ渡り、島主天草伊豆守に洗禮を授け、大村に至り、そこに暫く足を駐めた。(天草伊豆守の教名をドム、ミスセルト云ふ)

西教史にカブラル支部長が信長に謁見した時の狀を記して云ふ。カブラル大師は京師に在ること數日にして、美濃に至り信長に謁し、祝賀を呈せんと決定せり。信長は和田殿(惟政)の死亡以來、唯獨り基督信者等を保護することを務めて居た。大師父はフロエー師及び法兄弟ローラン(魯連須)と共に發程し、美濃の都府にして人民之れを信長の極樂界と稱する安土山(岐阜稲葉山の誤だらう)に到着し、信長の書記官の第に投宿した。書記官は師父等の到着を主君に申告したるに、其日は偶々、信長期を約して諸侯及び使節に謁見を賜ふの時なるを以て、諸侯及び使節は各自市街に群集すれども、信長は直に師父等と會見せんことを欲して此の事を次日に遷延し、師父等を召して、之を優待し、敬禮終て、信長師父等に美味の菓實一皿を供して曰く、晩饌を整備せしむるの間願くば師父等之を玩味せよと。信長は師父等

カブラル師が
信長に謁見す
るの記

が上帝の事を説くの外、又更に望む所なきを覺り、此等の事を質問し、以て師父等を響應せんと欲せり。法兄弟ローラン（魯連須）は言語の丁寧なるを以て信長の質問する所悉く之に答ふるに注意し又勉強したので、信長は大に満足したるもの如くであつた。ローランの答辨全く終る時、信長は師父等に對して曰く、日本の釋徒が動もすれば師父等に對し害を興へんとするは何の故であるか、汝師父等は之を知れるや、釋徒の師父等を目して罪人となす所以の者は、唯師父等が釋徒に比すれば學識德行遙に優るものにして、彼等の誤惑を論破し、又彼等の不品行を責むるを以てである、我ローランの説く所を以て信實となし、釋徒の謂ふ所を以て戲謔となす、是自ら保證する所であると。次で信長は列坐の諸候及び諸士に對し師父等を指して曰く、師父等は是我戀ふ所の人にして、其説く所皆正直信實を以てす、之に反して釋徒は唯虛誕をなし、以て世間を迷惑するの匪徒たるに過ぎざるのだと。偕て晚饌を供するの時、信長は師父等三人及び、京師の一候を誘引して別室に入る。此候は公方の使者にして、即ち公方（義昭）より信長に贈る所の莫大の物品を持ち來れるのである。此人は基督信者の最大なる仇敵にして、時機を窺ひ師父等に害をな

信長切支丹の
宣教師を賞賜
し佛僧等を罵
倒す

信長カブラル
使を留めて城
岩を一覽せし
む

さんと欲するの者だ。信長は候に對して曰く、我今師父等を響應せんとす、故に汝をして同席せしめんことを望むと、候は信長の恩を謝す。既にして信長二三歩を進めたる時フロエー師は候に接近して曰く、信長公は我等師父の爲に恩恵を興ふる亦大なり。願くば候も亦我等師父の危険を見て少しく保護するの恵を垂れんことを。時に師父の聲高くして信長も之を聞いた。而して候は猶未だ一言の答をなさざる中に、信長師父に對して曰く、今汝が請ふ所の事は或は他の外國人の爲ではないの乎、信長の敬愛する汝師父等の爲ではないのだらうと。候は此等の言を聞き大に驚愕し、信長に約するに、後來師父等の爲に力を盡さんことを以てし、又師父等に謝罪するに從來待遇の租薄なるを恕せんことを以てした。信長は師父等に宮殿及び城砦を一覽せしめんと欲するに由り、師父等を留めて安土山（岐阜か）に在る既に二日に及び、然る後信長は師父等に暇を賜ひ、旅中要用の諸品を以て之に供せよと命じた。既にして師父等が宮殿を出る時、信長は列席の諸候に語て曰く、凡信實の宗教は師父等の説く所を除き、他に有る可らず、日本の宗教夥多ありと雖も、一も信ずるに足る者あらず、或は聖教を非とし之を論破せんと

するも、我以て之を防ぎ辨論せんのみ、殘酷を逞ふして師父等を困めんとするの釋徒は悉く其種族を斷滅せしめんと決心せりと。此等の事に因て見れば、君主たる人の本心は却て上帝の宰する所にして、正裁を行はしめん爲には假令仇敵たりとも之れを擧げ用ゆるもの乎。如何となれば前に和田氏なる者あり、獨り聖教の援となりて之を保護せしが、其死するや今復た信長あり、其性殘酷傲慢なれども、上帝之を擧げ聖教の援となして之を保護せしむればなり。蓋し上帝忌憎して死に處せんと欲する釋徒に報ゆるに信長の手を以てせんが爲なのであらう、云々。

二 アレキサンドロ、ワリニャーニの事跡

日本に於る切支丹の布教隆盛なるに隨て、多數の宣教使を要すること倍々急であつたので、カブラル師は特に師父バルタザル、ロペーを印度へ派遣し布教の情況報告旁々宣教使の來朝を催促した。斯てガスバル、ケロートは元龜三年に渡來し、尋てアルフオンス、カンザレー、キリストツファア、ドレオン、ジャン、フランソア及びアントアン、ロペーの四人は有馬晴信の父義貞の洗禮を受た年即ち天正四年を以て來朝した。翌年に至り更に拾三名のゼスイト會員渡來して日本宣教團に加はつた。それは

宣教使續々來朝す

先にカブラルより遣はされたロペー師が印度より伴ひ來つた者にして、其の中六人は師父、七人は修道士であつた。カブラル副部長は彼等を大村、博多、平戸、鹿兒島及び府内へ配置し、且つ印度より新に渡來せし宣教使の爲に府内に日本語を教ゆる學校を設置した。

是より先き永祿十一年織田信長上洛の歳を以て、印度より來朝せるアレキサンドロ、ワリニャーニ Alexandro Valignani 其の任地五島に於て布教に勉勵し、島主の世子を始め數百人の改宗者を得たのは既に述べた通りだ。然るに、其の後、佛僧等は切支丹宣教使を放逐せんと欲し、島主に迫つて切支丹禁制、信徒轉宗を嚴命せしむるに至つた。信徒は皆死を決して之れに抗した。ワリニャーニの身邊が最も危険であつた。世子はワリニャーニに退島を乞ふた、ワリニャーニ聞かず、却て身を棄て世子を救はんとし、往て島主に見えて曰く、公の世子及び切支丹を信ずる家臣は皆善良にして忠義の心厚き士である。然るに之れを壓迫するは貴藩の爲に最も不利である。若し神を信ずるを以て罪なりとせば我こそ最も罪ありだ、何となれば世子及び家臣をして神を信ぜしめし者は我であるからである。されば乞ふ、一外國人たる我を殺して衆人

五島に於るワリニャーニ

の代りとなし、世子及び公の臣民を救助せられよ、蓋し彼等は天地の主宰たる神を信ずることを廢し、良心をまぐることを除く外、島主の命令を忠實に遵奉する忠義の士なればなりと。そこで島主はワリニヤニの言葉に感じ老臣と議り終に禁制の令を撤回せりと云ふ。

斯て五島の基督教がますます盛大たらんとするに當り、ワリニヤニは羅馬のゼスイト總長の召に應じ、元龜二年（一五七一年）日本を發し印度を経て羅馬へ直行し、彼地に留まること數年、天正七年を以て再び日本へ歸還した。先きに、彼が日本に在つた時は通常の司祭一箇の師父に過ぎなかつたのだが、今や視教官として副支部長カブラルの上席となつた。思ふに彼が羅馬滞在中、日本の傳教に關する將來の方針に關し當局者に建議して計畫する處があつたやうだ。其の日本へ歸還するや、直に口之津に宣敎使會を召集して協議する所があつた。是の時日本に居たゼスイト派の會員は五拾九名にして其の中二十三人は師父即ち司祭にして他は修道士であつた。是の會議に於てワリニヤニは日本傳道の方針を演説し、教育機關設置の急務なるを力説するに至り、端なくも副支部長カブラルと意見の衝突を來した。元來カブラルは凡庸の士に

ワリニヤニは羅馬馬へ行く

日本に歸還して宣敎使會を開く

ワリニヤニは日本の傳道の方針

コエルホ支部長となる

して日本傳道の方針に關する遠大の慮りなく、日本の布教は其の國情に通ずる日本人をして之れに當らしめざれば、健全なる成績を擧るあたはざるの理を覺らず、日本人の信者にして傳道に志しある者は之れを修道士として宣敎使の補助者たらしむるに止め、之れに司祭たるの資格を與ふるを好まなかつた。蓋し日本人に授くるに高等の教育を以てせば、さなきだに高慢なる性質の日本人は倍々増長して外國宣敎使を輕侮せんことを怖れたからである。之れに反しワリニヤニは日本基督教會の基礎を堅固ならしめんには教育機關を整備して以て有志の信徒に高等教育を施さざるべからざることを強く主張し、終に修學院及び幼年學校を設置し、併て印度より渡來せし修道士に日本語及び必須の課目を敎授することを發議した。然るに、カブラルは痛く之れに反對して止まなかつたので、終に彼の副支部長を免じて支那へ派遣し、代ふるにコエルホ Coelho を以てした。これよりワリニヤニは巡回視察の傍ら、専ら意を教育事業に注ぎ、天正七年有馬に修學院及び幼年學校を設置して士大夫の子弟及び一般少年を教育した。又豊後府内及び臼杵にも學校を設置せるが、更に天正九年京都にて信長に説くに、安土に學校を設立すべきを以てし、信長の賛成を得て、安土の市街に一區の

土地と、之れに要する資金を與へられたので、直に之れが設備をなし、オルガンチノを以て之れが主任となし、貴族の子弟二十五人を收容して、文學及び神學の教授を開示するに至つた。

府内の學校は見習僧十六人を收容して印度より來りし修道士と日本人各六人つゝを教へた。又他の校には生徒十六人を收容し之れに神哲の兩學を授けた。(西教史)

是時代の歴史家として權威ある村上教授の文を左に引照して以て其の實況を詳にしやう。

「耶蘇教の布教が段々と進み來るにつれて教育事業が起る様になつた、信長時代の天正七年(一五七九)の頃からである、即ち宗旨傳來以後三十年頃の事である。この教育事業に着手し諸般の設備を創始したのは伊太利亞出のアレッツサンドロ、ワリニャーニと云ふ宣教師である。彼は天正七年有馬晴信に勸めて有馬に學林及び修學院を建てさせたのを手始として、翌年には豊後に入り大友義鎮、義統父子に説いて府内及び臼杵に學校を設けさせ、更に其翌年の天正九年は京都に入り本能寺にて信長に對面し、信長をして其の新居城安土に於て修學院を建設せしむるに至つた。これらの學校にて

ワリニャーニ
と教育事業

は宗教教育を除くと、國語と葡語及拉丁語とを課したる外音樂が主なる修業科目になつてゐた、西洋にては所謂七科の自由學藝を授けたと云ふが、殊に言文、音樂は著しく進歩の績があつたらしい。而して繪畫をも學ばせた様である、有馬の學校以外、府内、安土にても有馬同様書學を教へたかどうかは疑はしいのである」云々。

ワリニャーニは學校の設備を爲したる後、翌天正十年大友氏等の遣したる遣歐使を伴ふて日本を出帆し印度まで赴いたのであるが、不幸にして事故の爲身親ら使節に同行して羅馬に至るあたはなかつたに拘はらず、使節をして教育事業に關して謀る處あらしめ、法皇より學校資金として數千金の寄附を得たるは前章遣歐使の部に記述したるが如しだ。其の後天正十九年遣歐使を伴ふて再び來朝するに當り、印刷機を輸入し活字の鑄工を舶載し、之れに由て出版事業を起して日本の文化に貢獻する所多大であつた。其の詳なる事跡は再び後章に述ぶることにしやう。

天正十二年基督教の布教いよ／＼盛なる時に際し、有力なる傳道者ルイ、アルメーダが天國へ召されたのは日本傳道界の一大損失であつた。前章に記述せるが如く。彼は元醫士にして貿易の爲め日本へ來つた者であるが、中ごろ感ずる所があつて耶蘇組派

其の他の事業

アルメーダの
死

に入門し、私財五千「エクター」を擲て、孤兒院及び療病院を設置し、アルメーダ自身は清貧なる傳道者となり、博多、島原、口之津、天草、府内、鹿兒島、五島の地に布教して切支丹寺を創建し、或は醫術を應用して難病を治し、大に人民の信用を得るに至つた。西教史の著者クラッセ彼を評して曰く、

アルメーダは溫和なる氣候に甚だ弊汚せる衣服を着し、食物を少ふして事に勉勵し、常に處々を徘徊して困窮人を搜索し、諸國を遍歴して暴行の佛僧及び偶像を拜する者に邂逅し、彼等の爲にしばしば危険に遭遇した。其の鹿兒島より追放せらるゝや、海濱にて草を喰ひて僅に壽命をつなぎ、小屋の中にて一ヶ年有餘の時日を送り、又偶像信者に苦められて、五島を去り、已を得ずして久しく荒野に住居し、又は洞穴に通れた。又盜賊に遇ふこと數回、或は衣服を奪はれ、或は傷を蒙り、終に小舟に乗せられて海中に放たれ、食ふに食物なく、その上病に罹りて衰弱甚しく、かてゝ加へて暴風の難に遇ひしが、幸にして意外の海岸に漂流して救はるゝを得たり。彼は天草に於て僧となれりとあれば修道士より進で司祭となつたやうだ。其の卒去の時享年五十九歳であつた。

アルメーダの傳道概

三 日本信徒の統計

アレキサンドロ、ワリニャーニが日本を去つて印度へ赴いた前年即ち天正九年の日本基督教會の狀況を西教史に詳記してある。今爰に之れを略記して其の一斑を知るの便に供しやう。ワリニャーニ視教官は日本全國を三部に區別し其の一部を近畿地方となし、又之れを三區に小分す、京都、安土、高槻がそれだ。京都教區には司祭二人、修道士二人を置き、説教及び儀式を司らしめた。安土教區に司祭二人修道士二人あり、司祭各自をして教務及び學務を分擔せしむ。其の學校に於て授けた科目は基督教の初歩、拉典語、葡萄牙語、日本語の讀書、作文等であつたと云ふ。高山右近の領地たる高槻教區には司祭、修道士各壹名あり、此處には高山氏の寄附によつて建立したる美麗なる寺院と教師館とあり。高槻を去る三里の地岡山、飯盛、三箇島には（河内國）各基督教寺院あり、是れ皆高槻教區の管轄にぞくす。三箇島より二里許にして八尾あり、其の領主ドム、シメオン、池田丹後守を始其の家臣領民八百人皆基督教信者である。又周防山口には、多數の信者ありと雖も寺院は一箇だもなし是れ領主毛利氏が之れを建設するを許さざるに因るのである。

日本全國を三部に區別す

第一部は近畿地方

第二部はシモ

等二部はシモと稱す、(九州を云ふ)是の部は基督教殷盛の地にして寺院及び教師館數多あり。大友氏の居城府内には小學校、大學校各一あり。此の大學校に於ては諸藝、神學、日本語學等を教授し大小學士の學位を授く、小學校には二十名の生徒があつた。又臼杵に於ては一の修學院があつて専ら僧侶を養成した、臼杵は即ち大友宗麟の居城である。府内を去る七里許にしてワルドシユと名くる地あり、是處に教師館あり、又ノセンの他にも教師館あり、宣教使は是處を本據として各地へ派出布教した。筑前の博多にも其の大友領であつた頃、教師館が一箇あつたが、秋月氏が此の地を領するに至つてそれを破却してしまつた。筑後には僅に一箇の寺院あるに過ぎず、龍造寺氏興るに及び、宣教使の爰に來るを禁じたので、有徳なる一信徒によつて漸く之れを維持せるのみだ。肥後國は龍造寺と秋月との折半して領する所で、此の國に耶蘇組會友の居宅二戸あり。一は天草の市街にあり、一は本渡の地にあり、此の兩所を本據として國中に在る二十箇の基督教寺院を總轄す、又天草島に接する志岐島に於ても一箇の切支丹寺あり、其の信徒五千有餘人を數ふ。此の島の領主は宣教使の來るを許すも居宅を造るを許さなかつた、故に司祭は天草より出張して祭式を行つて居た。

五島に於てはドム、ルイの死後、基督教の寺院も教師館も破却せられてしまつた、何となれば世子の叔父にして後見人たる玄雅は基督教の大敵であつたからだ。平戸の領主松浦氏は佛教徒なれども司祭二人修道士二人の居宅を造ることを許した。司祭等は此所に在て世子の叔父ドム、ジャン及び其の子ドム、アントアン(籠手田氏父子)を教導した。

大村及有馬は豊後に次で基督教の最も盛なる地である。大村はドム、バルトロミー純忠の領地にして宣教使の居宅三戸あり、大村、長崎、クリの市街にあるものがそれだ。是の三ヶ所より大村領内に在る四拾有餘の寺院と五萬有餘の信者とを管理する。有馬はドム、プロテール晴信の所領にして此處にも教師館三戸あり、其の一は有馬の市街に在り、五六人の宣教使が常に在住する、是の内二人は學校を管理する。此の學校には貴人の子弟二十人あり。其の二はアリ(有家か)の市街に在り、有馬にある者に比すれば一層宏大である。其の三は口之津にあり、此の港は貿易が最も盛である。薩摩は聖フランシスコ、ザビエーが始て日本へ來つた時安着せる地である。此の國には僅少の信者あり、宣教使も時々來ることがあるも居宅の定りたるものはない。佛僧等が國主の威

大村、有馬の
教勢

を借つて宣教使を放逐したからである。九州地方に在る信徒の數約拾三萬人である。

第三部は四國である、此の地方には前土佐の國主一條兼定唯一人の信者あるのみだ。

以上日本全國の基督教信者の數は拾五萬人寺院の數は二百、之れを統轄する宣教使三拾九人である。信徒の數を地方に依て細別すれば、

五 萬 人	大村 領 内
壹 萬 人	大友 領 内
六 萬 五 千 人	有馬、平戸、鹿兒島地方
貳 萬 五 千 人	近畿中國地方(或三萬と云ふ)

計 拾 五 萬 人

大名貴族にして信者となつた者は、大友宗麟、大村純忠、有馬晴信、内藤如安、高山右近、池田丹後守等を始として數拾名あり、其の勢力なか／＼盛であつた。

當時日本帝國の人口幾多であつたか固より正確なる統計を得る能はざるも、ムルドツツ氏の調査に據れば

徳川時代よりさかのぼつて秀吉、信長時代の人口を一千五百萬乃至貳千萬人と見積るに至當と思はれると、天正八年頃(信長時代)の歐洲各國の人口は英國一千六百五拾萬人、佛國一千四百三十萬人、西國八百萬人、英國四百七拾萬人であつたと云へば日本の人口を貳千萬人と見積るに少しく過大の嫌なきに非ずだ、假に之を一千五百萬人とすれば拾五萬人の信者は、全人口の百分の一に當る割で傳道開始以來約三十年の成績としては豈驚くべきの進歩に非ずや、況哉其の中には貴族武士多數なるに於てをやだ。

第五章 豊臣秀吉と基督教 (其の一)

一 秀吉の基督教宣教使に對する態度

天正十年明智光秀の信長を弑するや、切支丹の徒は危害の宣教使の身に及ばんことを恐れて戦々競々として居たが、光秀は切支丹を害するの己に不利なるを覺つたのか、或は他に思ふ仔細があつた故か、毫も彼等に危害を加へざるのみならず、其の頃安土に在つたオルガンチノ師の難を避けて琵琶湖の島中に居るを探知し、相當の禮儀を盡し、護衛を附して之れを京都へ赴かしめた。或は云ふ、光秀オルガンチノ師をして高山右近等の切支丹大名を説得せしめ、己に加擔せしめんと謀つたのだと。果して

明智光秀の反
丹亂に於る切支

第三部は四國
切支丹信者の
總數

切支丹大名

然るや否や、其の眞偽知るべからずと雖も、先に信長の不興を蒙つて追放されて居た白井サンゼンス父子の外、切支丹大名は一人も明智の反に應ぜざるものなく、高山右近の如きは信長の吊合戦たる山崎の役に、明智征討軍の先鋒となつて大功を奏せるは人の知る所であり。既にして明智の亂平ぎ、信長の遣子群臣等が織田家相續問題や、政權爭奪の駆引に没頭して餘念なかつた際、右近は獨り切支丹の安危を氣遣ひ、直に馳せて安土に赴き、焼け残れる學校及び教會堂の始末をなし、之れをその領地高槻へ移して保護を加へて居た。さうして明智方に味方した白井父子は戦後大和に遁れ、筒井順慶の許に寄食して居たと云ふ事だ。

秀吉が信長に代つて政權を掌握し天下に號令するに當り、其の始め基督教に對する政策には何等の變更なく、海外の貿易を奨励すると同時に、基督教宣教師をも保護し、基督教布教の自由を許し、之れを放任して敢て干渉する所がなかつた。或は云ふ、秀吉は基督教の國家に有害なるを看破し之れを禁止せんと欲せしも、天下未だ一定せず、加ふるに、九州地方には有力なる切支丹大名の割據するものあり、其の部下にも亦切支丹大名なる功臣尠なからざるのみならず、切支丹の感化は延いて秀吉の殿

秀吉宣教師を保護し其の布教を放任す

秀吉大坂に切支丹寺及び學校を建設せしむ

中御奥にも及び、其の勢力なかく盛であつたので、此の際愁ひに手を下さば、却て由々敷大事を醸すの恐れあるを以て暫く隱忍して以て時機の至るを待つて居たのだと。それか果して秀吉の心事なるや否やを知るべからずと雖も、兎も角も、其の執政の初めは信長と同じく宣教師を優待し、切支丹の布教を放任し。別に切支丹に對して一定の改策はなかつたやうだ。西教史の云ふ處によれば、秀吉は宣教師に對し、殿中の侍女等の中、切支丹を奉ずるもの、其の操行端正にして信仰の厚きを賞讃し、基督教の宗規にして今少しく寛大ならしめば、余も亦基督教を信奉したいものだと言せしとぞ。是れ必ずしも外交的辭令とのみ見るべからずだ。而してその宗規の寛大云々とは、一夫一婦の主義の餘りに嚴格なるを難じたのだと云ふ事だ。

又曰く、「オルガンチシノ師の秀吉に參賀せるとき之れを引見して厚く待遇し、大坂の地に於て一區の土地を興へて寺院及び學校の敷地となし、高山右近の明石に移さるゝや、ゼスイト派宣教師を諭して高槻に在つた學校を大坂へ移さしめた。又その寺院の建築成るや、秀吉自ら其の獻堂式に參列して祝意を表し、且つ侍女の寺院に參詣するを許し、家臣の教を奉ずるを喜び居た」と。秀吉が親しく切支丹教堂の獻堂式に

参列したとあるのは事實であらう。蓋し秀吉は非常に威儀を盛にするを喜びたるの風があつたが、一面には又甚だ眞率輕易にして馬上宮中へ参内の途上見物の婦人に聲をかけ、今から内裏で能を舞ふから見物に來いといひ、小牧陣の時 先陣よりの注進を得て茶の湯の席から直に尻をまくつて曳々聲で出掛けたと云ふが如きは其の例である。されば彼が輕装して獻堂式に臨んだり、或は馬上途中にてフランススカン派の僧侶と要談せしと云ふが如きも必ず事實であつたのだらう。

天長十四年（西教史は十三年と云ふ）秀吉關白となつた翌年のことだ、耶穌組派の支部長ガスパル、コエルホ Casper Coelho は大坂に來り、高山右近、黒田孝高等の紹介により、ゼスイト派の會員八名、日本人の傳道師十五名、士人六名を帶同して秀吉に謁見した。秀吉大に喜び、遠路來つて神の教を宣布するの熱心を祝し、印度の近況につきて種々尋ぬる所があつた。會見の式終て後、秀吉其の親臣に對するが如き態度にて師父等と談話を交へ種々の物語をなした。其の折、参列して居たフロエー Froez が傳ふる所によれば、此の時秀吉は滿面に生氣を帯び、見受くる處吾人宣教使に對して少しも疑念を挟むの様子なく、最と眞率なる態度を以て、先づ西南諸州の處

秀吉と宣教使との會談

分案を述べ、九州諸大名の領地を幾分づゝ減少し、肥後の地方は高山右近と行長の父小西隆佐りゅうさとに分與することになし、長崎港は特に基督教會の爲に存し置き之れが許可狀を與へやう、然しそれは日本全國を征定して諸大名より人質を取つた以後の事と理解せられたい。これ師父等が肥前の領主等より嫌忌せられるゝの虞がないやうに諸事を整理せんことを欲するからである。而して基督教會に對して斯る寄附をなすのは余の創意にして、敢て他人の行爲に習ふのではないのだと。秀吉又語をついで曰く、余は特に日本全國を殆ど征服し終らんとするに至つた、既に全國を掌握せば、又他の國土と財寶とを得んとするの慾望はないが、唯余が名と譽とを不朽に傳へることを切望するのだ。されば、日本の國事を整頓し、之れが基礎を確立したる後、之れを秀次に譲り、自分は支那、朝鮮を征服する爲め、彼地へ渡航の志があるので、之れが準備として許多の樹木を採伐せしめ、軍船二千艘を建造して、以て軍隊輸送の用に當てたいと思ふのだ。此の事につき、余が師父等に期待する所は他ではないが、その斡旋により葡萄牙人より堅牢にして武装したる大船二艘を購ひ得る事だ。代價は望のまゝに仕拂ふべく、又軍艦乗込の士官には高祿を與へやう。師父等の斡旋により是の希望を遂するを

外征の準備に
つき宣教使の
斡旋を乞ふ

得ば満足に至りである。余は此の計畫中不幸にして萬一倒るゝことあるも毫も意としない、日本に於て斯る偉大なる計畫を創始したる者は秀吉であると認められなば、それにて満足だ。若し又幸に成功せば支那は余に服従するだらう。されど、余は支那の國土を掠奪しやうとの意思はなく、其の人民が余を以て支那の皇帝として仰ぐを願ふのみだ。其の時には全國各地に切支丹寺を建設し、人民をして悉く切支丹の徒たらしめん爲め、聖教に歸依すべしとの命令を發しやうと。西教史の傳ふる所は少しく之れと異なつて居る。是の準備をなす間に日本の大半は基督教を奉ずるに至るだらう。又支那を征服したる後、我國の都市、邑村に於て眞神の爲めに殿堂を建築し、又人民をして悉く基督信者たらしむるの命令を發すべしとあつて、明白に日本とあれど、フロエーが傳へた處は征服したる支那の人民に切支丹となることを布告すべしとの意味であるやうだ。何れが是なるか不明である。

其の後久しからずして、師父等は小西行長の母マダレン、ワクサの手を経て御奥へ差出したる願書の許可を得、秀吉の押印したる貳通の布教免狀を附與された。この二通の中、一通は日本國內に於て所持すべきもの、又一通は歐羅巴へ送遣すべきもの

切支丹布教の
免許狀

である。同時に秀吉は師父等に傳言して曰く、余が斯の如くする所以のものは師父等を尊敬寵愛することを歐羅巴の基督信者たる諸王に知らしめんが爲であると、其の免狀の内容は第一、其の管内に於て自由に布教すること、第二、師父等の住宅及び基督教の建物は兵士の宿所として徵發せざる事、第三、耶蘇組派の會員に限り諸税を免除する事等であつた。此れ非常の特典ではないか、殊に第三を以て然りとすだ。

二 秀吉の家臣中の切支丹信者

秀吉の家臣の中に切支丹を奉ぜるもの少なからずであつた。小西行長は其の頃高山右近の誘導により天正十二年に洗禮を受けた。彼は泉州堺の豪商彌九郎の次男にして備前の領主浮田直家の家臣某の養子となり、直家の信長に従ふに及び、直家の子浮田八郎の従者となつて秀吉の許へ人質となつて居たが、秀吉其の才器を愛し拔んで家臣の列に加へた。八郎は即ち秀家である、耶蘇組派宣教使の書翰によれば、行長は切支丹大名白井サンゼンスの子にして、彌九郎の養子であると傳ふ。行長の父、彌九郎に後ち隆佐と稱し泉州堺の奉行となり、しばしば秀吉の軍に従ふて運輸の事を司つた。行長の兄如清は播州室津の奉行として令名があつた。又其の母は教名マダレン

小西行長と其
の一族

小野木ゼーン

と云ひ、秀吉の夫人に事へて其の右筆となつて居た。彼等も皆切支丹信者であつた。隆佐も如清も切支丹教名であることは明白だ。又小野木ゼーンと云へる婦人あり、丹波福知山の領主小野木公知の妻にして公卿の子である。彼女も亦切支丹を信じて同じく秀吉の夫人に事へて居た。其の他秀吉の親臣にして切支丹を奉ずる著名なる者を黒田孝高、浦生氏郷の兩氏とす。孝高幼名萬吉、長じて官兵衛と稱す、近江國黒田村の産である、其の父美濃守職隆播州赤松家の權臣小寺政隆に事へ其の姓を受けて小寺と稱し、後ち黒田に復した。そこで西教史には小寺官兵衛として知られて居る。孝高幼にして穎悟、初め和歌に耽つたが、後ち専ら兵法を考究し、長ずるに及び謀略、深遠、秀吉に仕へて其の帷帷の謀臣たり。實に長政の父にして黒田候爵家の祖先である。後ち如水と號す、教名シモン、切支丹の爲に盡す所が多かつた、浦生氏郷は近江日野の城主秀堅の子である。秀堅が信長に事ふるに至り、氏郷は信長の近臣となつた、信長その才略あるを愛し、其の愛女を以て彼に娶はした。教名レオと云ひ、伊勢松島の城主となつて居たが、後ち會津百萬石に封ぜられ、東北の雄鎮となつた。秀吉の侍醫にして醫術の大家である。今王路道三も亦切支丹信者となつた。彼が改心の始末に

浦生氏郷

今王路道三

就いては頗る興味ある話がある。一日師父フイグレットウ Fernando 病で今王路の診察を受く、今王路は、師父の老年なるにかゝはらず、其の體格の極めて健康なるに驚き、如何にして斯る健康を維持せるやと尋ねしに、師父は幼時より食慾を節制し、勞役を以てその身體を克服し、且つ物事に満足するの秘訣を知るが故であると答へ。又たとへ今回の病氣によつて倒れることあるも毫も遺憾とする所はない、何となれば死は是れ吾人を現世より永遠の生涯に移らしむるものであるからだと述べた。永遠の生命に關して知る所なき道三は、師父の是の答を聞いて驚き怪んだ。それより其の問題につき研究の結果、師父の教訓に服し、遂に洗禮を受くるに至つた。其の弟子八百人も亦。「此の人にして信ずるからには基督教は必ず真理でなくてはならぬ」と云ひ、續々相續いて改宗した。今王路は其の地位を利用し、秀吉をして基督教を保護せしめやうと努力することが多かつた。伊勢の領主牧村正春も亦其の放縱なる生涯を改め回心して基督教を信じ、其の朋友を誘ふて改宗せしめたる程の熱心家となつた、彼れは後ち兵部大輔と稱し、伊勢國多氣渡會兩郡を領し岩出の城主であつたが朝鮮の役に陣没して跡が絶えた。其の他基督教に志のあつた大名は尠ならずであつたが戰亂に妨げ

牧村正春

高山右近其の領地より佛僧を追放す

られて其の志望を果し得なかつた者も多かつたと云ふ事だ。

秀吉の北伐東征して其の政敵を降し、或は之れを滅ぼすに従ひ、功臣を須要の地に移封して其の藩屏となした。爰に於て諸侯の移封、轉換頻々たりだ。近畿地方の切支丹大名にして移封せられた重なる者は高山、池田の兩氏である。高山右近の領地高槻は京都、大坂間の樞要の地なるを以て、秀吉が高山氏の封を播州明石に移し、高槻を以て公領となし、其の地に在つた切支丹學校を大坂へ移せしは、既に叙述せしが如くだ。高山右近は明石領内に佛法を禁じ、速に偶像佛器を携へて領外へ退去することを佛僧に命じた。僧侶争へども力及ばず已を得ず、佛像及祭器を船に積み、海路大坂に赴き、秀吉の夫人政所まんごころの佛教信者たるを便り、之れに訴へたが、秀吉は高山が其の領内にて施す所は彼の自由にして其の意に任せて行ふも敢て干渉すべきに非ず佛徒は其の偶像を持ち歸つて可なり、若し之れを運送するに困難せば、海中に投ずるとも又薪として燃くも、之れを山中に棄るも亦隨意にすべしと云つて措て問はなかつた。是れより佛僧等の高山を怨むこと一層甚しく、之れが因となつて後遂に佛僧等の爲に陥る所となり、其の身に災害を來すに至つたのは是非もなき次第である。又池田丹後守は河

池田丹後守

内の高屋より美濃へ移封せられ是の地の教會は保護者を得て繁榮した。其の封土は何れの地であつたか審かでないが、元來丹後守は岡山、鳥取、兩池田家の祖先信輝のぶてるの親戚にして、小牧の役信輝父子の戦死せる時、丹後守敵の包圍を突破し、信輝の第二子輝政を助け出せりと云ふ。是れ等の關係より推定すれば多分輝政の領地大垣附近であつたかも知れないのである。

三 秀吉之九州征伐と基督教 (一)

基督教は秀吉の九州征伐によつて多大の打撃を蒙つた。天正十四年四月豊後の國主大友義鎮よししむ、宗麟そうりん大坂に至り、秀吉の援を乞ふた。是はより先き、九州の諸大名は足利氏の末葉より織田氏を経て、豊臣氏の時代に至るまで、各地に割據し、互に戰鬥を事とし、殆ど獨立の姿であつたのだが、爰に至つて秀吉に干渉の機會を與ふるに至つた。當時九州に於ける有名なる切支丹大名は豊後の國主大友義鎮よししむ入道宗麟そうりん肥前高來たかくの城主有馬修理太夫晴信はるのぶ、同大村の城主大村丹後守純忠にして、彼等の基督教を奉ずるや、先ず其の領内の神社、佛閣を破毀し、神佛の偶像を焼き捨て、如何なる歴史あるも、如何なる由緒あるも、之れが保存を許さず、又佛僧には改宗を迫り、肯せざる者

大友義鎮秀吉に援を乞ふ

九州の切支丹大名

九州に於る切支丹の盛況

には速に領内を立退くべしと命令し、更に士民對しては速に改宗して切支丹に歸依すべしと諭告した。それは佛僧等が士民を煽動してしばしば切支丹大名に反抗し領主たるの地位を危殆ならしめたからで、勢止を得ざるものがあつたのだ。されば九州地方は切支丹尤も盛にして、豊後の府内、臼杵、津久見、肥前の大村、島原、長崎、有馬、肥後の天草等の地を根據として其の勢力を各地に及ぼした。大村領内の如きは士民殆ど擧げて切支丹を奉じ、其の數七萬人の多きに登つた。西教史によれば支部長ガスマ、ロエネホ Casper Coello が秀吉に謁見して歸途豊後へ赴いた時、壹ケ年の受洗者が四萬六千四人あつた。又宗麟の子親盛の領地の士民四百人は悉く聖教を聞き洗禮を受けんことを乞へりと。當時大友、大村兩氏の管下のみにて十四萬人餘の信教者があつたと云へば、九州全地には少なくも二十萬有餘の信者あつたのだらう。(前章の統萬人であつた。信者天正九年より十五年に至るまでに漸く増加したのだ)前編既に叙述せるが如く、大友氏は名家にして世々九州の探題であつたが、宗麟の世に至り、其の家運大に榮え、國富み、兵強く、その居城府内を中心として豊前を始め肥、筑、全國及び日向の一部にも其の勢力を及ぼし、九州の豪族殆ど皆其の旗下に屬し威權赫々であつた。宗麟はザビエー來朝以來切支丹

大友義統の一族及び其の耶黨の切支丹

義統不肖にして大友家衰微す

を保護し來つたのだが、それより廿七年後の天正六年に至り、漸く自身も洗禮を受けて信者となつたのみならず、其の親族郎等にも切支丹信者たるもの尠なからずであつた。即ち其の子には親家教名セバスマアン、親盛教名バンタロンあり。其の女婿には前の土佐の國司一條兼定、毛利輝元の叔父毛利秀包あり。その家臣の中には田原親堅ちかた紹忍しやうにんの養子親虎ちかこ、岩屋の城主高橋紹雲しやううん、是れ有名な立花左近統虎ひなとこの父だ。岡の城主志賀太郎親次ちかぢ、教名バウロ、老臣清田重時外數十名あり、皆切支丹に熱心の徒である。日本の記録には往々田原親堅を以て切支丹信者となし、宗麟之れを用ゐて國政を誤るとあれど、其の實田原は基督教に反對し、宗麟の退隱後其の嗣子義統の時代に至り、國政を亂せるもので切支丹信者ではないのだ。宗麟の長子義統は不肖にして大國に主たるの資格なく、日夜酒食に耽り、政治を其の叔父田原親堅に任せて顧みず、綱紀大に紊亂した、其の生母田原氏は西教史の所謂イゼベルと呼んだ、反切支丹を以て有名なる夫人であつたので、内には佛、基の爭議、家臣の軌轢、絶ゆる間なく、外には島津、龍造寺、秋月の領土を侵略するあり。内外の形勢非にして、國威日々にちゞまり、果ては豊後一國さへも維持するの困難を感じ、今更夢の醒めたるが如く後悔

し、津久見に退隠し居たる父宗麟に乞ふて、再び國政を援けしめ、漸くにして豊前及び筑後の一部を恢復せるが、島津氏が龍造寺信隆を政めて之れを殺せる後、秋月と聯合して又々大友氏を攻むるに至り、大友家の家臣朝日嶽の城代柴田遠江入道紹案等の島津氏に内應するものあり、大友氏の軍頻りに破られた。義統其の同胞親家が敵に内應せるを疑ひて之れを毒殺せしめた。宗麟心平ならず、父子分離、國勢日に蹙まる。宗麟即ち意を決し、病をつとめて、大阪に至り、秀吉の援を乞ふに至つたのである。これより數年の後、フランシスカン派僧侶が西班牙皇帝に奉つた書中に、大友氏に關し驚くべき讒誣の言がある。曰く、當時耶蘇組派切支丹の威勢は九州諸大名を勸諭して比律賓の大守を主權者と仰がしむるのは容易の業であつたにかゝらず、大友氏をして援を秀吉に乞はしめたのは、彼れ耶蘇組派の徒が、西、葡兩國の君主に對して忠義の念を缺くが故である云々と。それはフランシスカン派の僧侶が日本に於る耶蘇組派の勢力の盛なるを妬みて之れを誣ひたるの言である。試は思へ、當時航海の術幼稚なる時代に在つて。西班牙本國と數千里を隔て、遠く東洋に孤立する比律賓の如きは、我が島津氏の手兵のみを以てするも容易に之れを征服し得べしだ、假に大友氏に

フランシスカン派僧侶の讒言

野心があつて比律賓の援を乞ひたりとするも、何等得る所がなかつたのだらう。況哉宗麟は切支丹の徒であるとはいへ大和民族の精華である。たとへ其の國を失ふとも援を外國に借るが如き意向は毫もあらなかつたのである。又況哉當時の國情を熟知し居たる耶蘇組派の宣敎使が斯る愚擧を敢てして、累を切支丹に及ぼすが如き狂態を演ずべき筈なきに於てをやだ。是れ一笑にだも價ひせざる妄言である。

四 秀吉の九州征伐と基督教 (二)

秀吉素より西征の志あり、大友氏の援を乞ふに至り、先づ島津氏を諭して兵を解かしめやうとしたが、その聞かざるを見て直に九州征討の議を決し、天正十五年二月弟秀長をして先づ發せしめ、黒田孝高其の子長政之れに従ひ、〇關に毛利輝元及び其の兩叔父小早川隆景、毛利秀包の軍に會し、進て豊前及び筑後を攻めた、黒田孝高は熱心なる切支丹信者だ。孝高先づ毛利輝元に説いて其領地山口に於る切支丹の禁を緩和しめ、又毛利秀包をして切支丹に歸依せしめた。(教名シモン)輝元の老臣阿曹沼豊前守も亦改宗してメルキヨルと稱す。(彼は後に殉教者の一人となつた)黒田孝高の兩弟兵庫助利高、圖書助直之及び孝高の子長政も亦洗禮を受た。斯くて秀長の軍豊前、

黒田孝高諸將を説いて改宗

筑後に在つて秋月氏を牽制しつゝある際、秀吉は別に仙石秀久、長曾我部元親に命じ豊後に大友氏の兵と合し島津氏を撃たしめた。秀久の統率宜しきを得ず、戸次川の役、大友方大敗し、元親の子信親戦死し、秀久義統等遠く遁れて豊前に入る。大友氏の諸城相尋て陥り、府内亦島津氏の手落ちた。宗麟は佐伯の丹生島城に在りて圍を受け、大友氏の滅亡且夕に迫る。此際獨り島津氏の軍と勇戦して屈せなかつたものは榑牟禮の城主佐伯太郎惟定と、岡の城主志賀親次バウロとの二人があつたのみである。

是より先き宗麟は薩摩勢の進軍し來るを聞き、府内にあつた師父等に警告し、難を山口に避けしめやうとした。然も道路塞がつて通せず、師父等の進退極まり、住民と共に死するの外、策の施すべきやうかつたが、たま／＼當時山口に居た支部長コエルホの懇請により黒田孝高が師父等の急を救はんとて、小西の家臣某をして馬關か發せしめたる大船二艘の府内に來るあり、因て危難を遁るゝことを得た。されど、その中數人は尙ほ府内に留り住民と休戚を共にし、掠奪、飢饉、疫病の爲めに苦惱する人々を慰籍し、之れが看護に任じて居た。その頃から義統の生母田原氏イゼベルの切支丹に對する態度が大に變化した。先さには切支丹の徒を見ることさへも忌み嫌ふてゐたの

宣教師の避難

今は之に反し、信者を使用して召使となし、家僕家婢のミサ祭及び禮拜に參詣することを許し、その二女マゼンスとレーンの信者となるを喜び、彼女自身も亦入門せんと志望があつたやうだが、是の時疫病の犠牲となつて惨死した。或は云ふ島津軍の爲めに殺されたのだと、又府内は勿論豊後地方に在つた切支丹は殆ど皆島津軍の爲に破壊し盡され暴風過る所萬物荒廢實に無殘なる有様であつた。

黒田孝高は秀吉の命を受けて戦敗後の處分をなし、先づ仙石秀久を黜りて其の領土に還らしめ、大友義統の不義、不徳を詰責して之れを悔悟せしめ、終に切支丹に歸依せしむるに至つた。爰に於て義統は天正十五年三月一日（一五八七四年四月廿七日）中津に於て其の妻子及び女二人と共に洗禮を受けコンスタンチンと稱す。其の夫人はジュスト、其の男子はツユルジャンス、其の女子一はサピン、一はマキジムと名けられた。而して其の例に倣ひ許多の家臣も亦共に洗禮を受けた。白杵の丹生島城中に在つて敗戦に苦み、其の子義統の不明懦弱を痛嘆しつゝあつた宗麟は、是の吉報に接して夢かとはかり喜び、感謝措くあたはざるものがあつた。既にして秀長の軍府内に入り、島津軍退却す。是の時肥後の切支丹にして島津氏の麾下に居つた天草伊豆守ジャ

大友義統の受洗

天草伊豆守

志賀親次

ンは退却の機を失し、大友軍の爲に圍まれ、殆ど俘虜たらんとせしが、大友家の部將志賀親次バウロの爲に救はれて一命を全ふし武士的面目を維持するを得た。是れより秀長軍を進め島津氏を日向耳川の右岸に撃破し、秋月氏も亦連敗して遂に秀長の軍門に降つた。斯くて九州の軍略は定まると聞き、秀吉は三月一日を以て（一五八七年四月廿七日）洛陽を發し、同十五日下の關に達し、それより敵を破り、降を容れ、連戦、連勝、進で肥後に入り、日向、大隅の軍と聯絡して三方より鹿兒島に迫まる。本願寺の法主顯如上人、薩摩の獅子島の門徒をして秀吉の軍を間道より導かしむ、島津氏支ふる能はず、遂に出て降る、爰に於て九州終に平定する。これより先き、秀吉の西征の途上、馬關に在るや、耶蘇組派の支部長ガスパロ、コエルホ山口より來つて秀吉に謁見し、戦勝を賀し、降服人の助命を切願して多數の人々の生命を救つたと云ふ事だ。

秀吉島津氏を
征服す

切支丹大名の
轉封

秀吉九州を鎮定し大宰府に諸大名を集め、其質を收め、是地に多く切支丹大名を封じた。即ち黒田孝高には豊前六郡と、中津とを與へ、毛利秀包には筑後の三郡と久留米とを與へ、大友義統には豊後のみを還し、故義益の一族伊東祐兵の戦功を賞して之

れに日向の半を與へ、之れを其の従子義益の長男義賢と共に分有せしめた。天草の領主及び大村氏の所領は舊により、有馬氏は島津氏より島原及び三會の返付を受けた。以上は皆切支丹大名である、其の他豊前の二郡を毛利勝信に、筑後の半を立花宗茂に、筑前全國を小早川隆景に、日向の一部を秋月氏に與へ、島津氏には其の故土薩摩、大隅と、日向の一部とを領せしめ、高橋、龍造寺、松浦、五島の諸氏は本領安堵、差増減あり、肥後は始め佐々成政に與へられたのだが、成政改易せらるゝに至り、小西行長と、加藤清正の二人が各其の半國を領するに至つた。

九州の亂鎮定し、多年の間戦亂の中に彷徨して浮沈極まりなかつた切支丹の徒も漸く太平の世を迎へ、其の繁榮を近き將來に期待して居たのに、茲に端なくも悲むべき二箇の兇事が起つた。即ち九州切支丹教會の二大柱石たる大村丹後守純忠、大友義鎮宗麟の薨去がそれだ。純忠は基督教を信奉すること廿有五年、其の執政の始めは領内に一人の切支丹信者もなかつたに、今や領内の民舉て信者となり、復一人の異教徒なきに至つたのは彼の誇りとする所であつた。其の奉教以來、勉勵して切支丹の爲に盡瘁し、其の家臣及び領民をして基督教的生活をなさしめんことを務めて止まなかつ

九州切支丹の二
大柱石倒る

大村丹後守純
忠薨す

た。純忠其の死期の近きを知り、世子喜前を召し、遺言して曰く、汝は世子たれば我死後は汝に領地を譲り、汝をして我が爲し來つた事に過失あらば之れを改めさすべし、汝、神の恩寵、指導によつて、能く領民を治め、之れを撫育すべし。且つ汝の姉妹は必ず品行方正なる切支丹大名を選で之れに嫁せしむべし、決して異教徒なる大名に嫁せしむべからずと。又急使を派して其の女メムシヤに傳言して曰く、我過つて汝を政婚の犠牲に供し、其の信仰を異にせる者に嫁せしめしは、我慚愧する處にして深く汝の赦免を乞ふと。蓋しメムシヤは平戸の世子松浦久信に嫁して其の室となれる女である。又他の子女を枕頭に召し、之れに諭して曰く、我命且夕に迫れり、我亡後は長兄喜前を以て我として之れに仕事すべし。殊に母に仕へて孝養怠るべからず、我が神に祈る所は汝等が神の恩恵により、基督者たるの道を盡し、其の指導を得て、死後天に於る再會を期せんことであると。言ひ畢て薨去す、享年五拾五歳、大村の切支丹寺に葬る、是れ實に天正十五年四月であつた。純忠薨去後僅に十有八日を経て、大友宗麟も亦薨じた。宗麟は洗禮を受けてより數年、さしも戦闘好きの彼も、奉教以來頓に其の態度を一變し、己を得ざる場合の外は復戦はず、其の放縱なる生活を改めて

大友宗麟薨す

謹嚴徳行の君子となり、其の晩年は津久見に退隱して専ら斷食祈禱を勤め、殆ど聖徒的の生涯を送つて居た。彼は其の子女、親戚の多くが基督教信者となつたのを感謝して深く喜び居たが、唯其の世子義統の不肖は彼の常に憂苦して措く能はざる所であつた。其の病革まるや、一日も速に神の召を蒙つて世を去らんことを願ふて止まなかつた。其の状恰も將に切支丹と大友家との上に落ち來らんとする一大災禍を豫知したるものゝ如くであつたと云ふ事である。

五 秀吉伴天連追放令を發す

果して此の二大桂石の破碎は將に來らんとする一大兇變の前兆であつた。秀吉は九州の處分を終り、大宰府を去つて、博多に至り、駐つて港灣を修築した。これやがて起らんとする朝鮮征伐の際、此處を其の本營の所在地となし、軍隊輸送の便に供せんか爲なのであらう。時に耶蘇組派の支部長コエルホ急に來つて戰捷を賀した。秀吉大に喜び之れを引見して博多の地に一區の地を與へ教會及び宣敎使の住宅を建てることを勧め、又親ら答禮として支部長を船中に訪問し閑談を交へ、且つ常に基督教を保護すべきを約束した。然るに數日を出ずして紫電一閃雷雨乍ら來るの勢を以て突然切支丹宣

追放令の發布

教使追放令を發した。是實に天正十五年六月十九日の夜であつた。その追放令左の如し、

定

- 一 日本國は神國たる處、切支丹より邪法を授候義太以不可然事。(原文には切支丹と假名で書いてあるのではないか)
- 一 其國郡の者を近附け門徒になし、神社、佛閣を打破らせ前代未聞候、國郡、在所、知行等、給人に下候義は、當座の事に候、天下よりの御法度相守諸事可_レ得_レ其意、下々として、猥_レ義曲事候事。
- 一 「バテレン」、其智慧の法を以て心ざし次等に檀那を持候と被_レ思召候處如_レ右日域の佛法を相破事曲事候條「バテレン」儀日本の地にはおかせられ間敷候間、今日より廿日の間に、用意仕可_レ歸國候事。
- 一 黒船の義は商賣の事候間、格別に候條年月を経諸事商賣いたすべき事。
- 一 自今以後佛法のさまたげと不_レ成輩は、商人の儀は不_レ及_レ申、いつれにもキリシタン國より往還くるしからず候條、可_レ成_レ御意事。

追放令全文

以上

天正十五年六月十九日 (西曆一五八七年七月二十四日)

追放令發布の
原因

秀吉西征の結果が宣教使の追放令となり、切支丹の爲めに一大災厄とならうとは何人も豫期しなかつた事だ。是の急變の源因に關し我國に傳はる所によれば、信長晩年基督教の有害なるを覺り、之れを禁止せんと思ひながら果さなかつたので、秀吉その遺志を繼ぎ九州平定の好機に乗じ之れを決行したのであると。然れども、信長に切支丹を禁止しやうとの意思がなかつたことは既に叙述したるが如しだ。秀吉に於ても亦然りで、執權以來五ヶ年間よく宣教使を優待し、切支丹大名を重用したるを見れば、容易に是の說に首肯する能はずだ。或は云ふ、秀吉の九州駐在中耶蘇組派宣教使の秀吉に不禮を加へたものがあつた故であると。更に西教史及び耶蘇組派の報告書によれば其の原因も多々あるやうだ。就中、左の事は少なくも秀吉をして放逐令を發せしめる動機となつたやうだ。秀吉九州に居た頃偶々平戸へ來着せる葡萄牙の大船二艘を博多へ回航すべき旨を師父を以て葡萄牙商人に傳へしめたのに、航路の危険と海峡の狹隘とを理由として之れを肯しなかつた。因てコエルホ師は自ら秀吉に見えて其の理由を

施藥院全宗の
謔言

説明したるに、秀吉之れを諒とし表面には之れを首肯したるも、内心には衛商及び師父の不誠實を疑ひ、不快の感を懐いて居たが、人先づ疑つて而して後ち讒之れに入るの、折しも其の權臣寂印なる者の切支丹に關する謔言を聞き、更に憤怒を惹き越したるもの、やうだ。蓋し寂印とは施藥院全宗の事、彼は元叡山の僧徒にして素より切支丹を喜ばない人だ。彼は▲吉の爲に常に美女を求めて居たが有馬に至り美人を發見して之れを勸諭せるに、彼等は皆切支丹の信者たるを以て之れに應せずして、却て全宗を辱めたので、彼は大に之れを合ひで還つた。偶々秀吉近臣を集めて飲宴す、寂印、酒間に乗し秀吉に告げて曰く、切支丹を奉ずる者は小女に至るまで殿下の命を奉ぜず、外人にのみ心服し本國を忘るゝこと斯の如し、一朝事あるの日、彼等は外國に應じ、又本國を思ふものはないであらう。聞く切支丹大名中に切支丹を利用して不軌を謀るものがある。高山右近の如きは其の一人である。彼又虚實混淆、巧に捏造したる切支丹宣教使の亡狀。數件を擧げて之れを非毀せりと。更に又秀吉が切支丹禁止の理由として自ら述べた言であるとして傳ふる所によれば、從來基督教は日本の教法と反對する所あるを以て、余は之れを廢止したいと思つた居たのは久しい前よりの事だが、其

施藥院全宗の
權威

の遷延今日に至つたのは基督信者の巢窟たる九州が未だ平定しなかつたので、或は黨を結びて反狀を現はさんことを恐れたからである。是れ我國に傳ふる所と殆ど同一であるが、西教史の著者は之を以て禁止の理由を飾る詭言に過ぎないと云つて居る。

施藥院全宗

施藥院寂印とは何人なるや詳ならず。思ふに寂印即ち西教史の所謂「Eiji」とは法印又藥院の譯音には非ざるか、豐太閤の時、施藥院全宗なるものあり。其の經歷西教史の寂印なる者のそれと相似て居る、今試に之れを記さんに、全宗父子は施藥院使たるを以て遂にそれを氏とした。全宗初め叡山に登つて僧となり、後ち罷め去つて醫を曲瀬正慶に學び、豊臣秀吉に仕へて寵遇を受け、常に左右にあり、天正中施藥院使に任じ法印に叙せられた。初め聖武天皇の時光明皇后施藥院を置き善く賤民の病苦を濟ふ、後廢院となること久し、爰に至りて秀吉奏して之れに興した。蓋し施藥院は關白の配下にぞくするものだ、全宗其の長となる。全宗は秀吉の寵遇を蒙り殿中に勢力のあつたことは當時の歴史が之れを證明す。即ち諸候の秀吉に内奏せんとするものは多く施藥院の斡旋に倚頼したやうだ。其の適例とも見るべきは、夫の有名なる小早川隆景が秀吉に其の甥秀秋を以て毛利家の嗣となさんとするの意あるを察知し、寧ろ小早川家を秀吉に奉るも毛利家の血統を全ふせんと苦心し、秀秋を己の養子となし小早川家を嗣がしめんと謀つたとき、施藥院全宗に之

れが幹旋を倚托せしが如き、又伊達政宗が關白秀次の謀反に加擔せしとの嫌疑を蒙つた時、大阪に登り施薬院の家に入り救解を求めたるが如き其の勢力の一端を窺ひ知るべきである。

秀吉の賞爵の
背後に婦人の
あり

又秀吉の如き人が一小女の故を以て怒を宣教師に移せしとは如何にも信じ難きことにて、初は一笑に附て去つたのだが。後其の然らざるを發見した。即ち秀吉の賞爵の背後には多く婦人の關係あるのを發見した。たとへば有名なる茶師千利休を殺せるが如き、表面如何なる理由があつたはもせよ、裏面には矢張り婦人關係がある、即ち利休の娘にして一旦嫁して未亡人となつて居た某女が、秀吉の意に従はなかつたのを惡み之れが原因となつて利休の身に災を及ぼせるが如しだ。又信長の娘にして蒲生秀郷の室であつた某夫人は秀郷の死後有名美人たるを以て秀吉の召を蒙り、家臣の懇願拒み難く、大阪へ登つたが、途中竊に髪を削り尼となつて秀吉に見えたので、秀吉大に之を惡み幾日ならずして其の子秀行の會津百萬石を沒收せるが如きは其の適例だ。又之れに反し婦人の故を以て秀吉の思遇を辱ふせるもの少からずであつた。本願寺光佐の未亡人は秀吉と特別の關係があつたので光佐の長子を退け未亡人が愛して居た次子を立て、本願寺法王となしたる如きはその一例である、後年淀君の勢力が如何に秀吉の政策を左右せしかば人の知る處だ。されば有馬の一小女云々の話しも一笑に附し去るべきに非ずである。

佛基の關係も
原因の一つ

思ふに秀吉をして追放令を發せしめた原因動機は以上の理由に基いたのであるが、其の他に佛基の關係と云ふ大問題もあつた。秀吉は政略上の立場から佛教と切支丹との關係兩立せざるを見て、既に信長の打撃を受けて今や溫柔猫の如くなつた佛教を保護

し、駕御し難き切支丹に打撃を試みんとしたのもその一原因であつたらう。秀吉は當時其の政略上日本の神社を尊崇することは勿論、佛教をも併せて保護するを以て良策と思惟して居たやうだ。織田信長が佛教の專横を制せんとして數年の間惡戰、苦闘を重ねた辛き經驗を見聞したる秀吉は、宗教問題に關しても考慮する所があつたに違いない。然るに今や佛教は其の勢力衰へて復昔の如く政權に反抗するの憂なく、唯々として主權者に服従するを見るに至つた。即ち本願寺法主顯如上人の如き、九州征伐の時秀吉の軍を導いて間道より島津氏の領内に入れ偉功を奏せしが如きは、その例で、佛徒は寧ろ利用すべく壓伏すべしに非ざるを知ら、之れを保護するの意があつた。然るに、夫の切支丹は到る所で神社、佛閣を破壊し、極端なる排他主義を勵行して紛争を惹起するのみならず、動もすれば天理人道を盾に執て君主の命令にさへ服従せざるの傾向があつたので、それが因となつて、不臣、不孝、叛逆、賣國等の惡名を切支丹教徒に誣ゆるの諛言となり、主權者に不快の感を懷かしめたのは明白だ。蓋し君父の命とはいへ事の善惡邪正を問はず、絶対にそれに服従すべきを信條として居た國家に於ては、斯る讒言の起るは勢の免かれざる所だ。加ふるに佛教徒對信長の争闘に於て宗門

の勢力の侮るべからざるを實驗したる秀吉は、切支丹も亦他日佛教以上の勢力を扶せんことを慮り、その未だ甚しからざる中に之れに一撃を與へ置かんと意にてはあらなかつたのだらうか。されば佛僧侶を追放し、寺院を破壊し、排佛主義を極端に強行せる高山氏を退けたる外、黒田、小西の如き切支丹大名には勿論、其他の内地の信徒には敢て迫害を加へなかつたのである。其の目指す所は専ら外國宣教使の上にあつたのである。

伴天連追放 發布の夜、秀吉特使を派して支部長コエルホに其の旨を通達し、併せて左の四ヶ條を尋問に及んだ。(一)何故に強て日本人に切支丹宗門を勸むるか。(二)何故に我が國法に背きて神社佛閣を破壊し、佛僧と不和を生じ之れを苦しましむるか。(三)何故に耕作に必用なる牛を殺して食用となすか。(四)何故に日本人を買取つて南蠻に連れ往くか。此の四ヶ條明白に相答へよと。コエルホ師は夜半突然是の特使に接し斯る意外なる尋問を受け、驚愕自失其の所以を解する能はなかつた。秀吉は實に其の前日師父を船中に訪問し、數時間談話を交へ、基督教を愛護することを親しく約束して置きながら、電光石火的に突然斯る尋問を發す、師父のそれを怪しみ茫然

宣教使に對する四ヶ條の尋問

宣教使コエルホの答辯

として其の言ふ所を知らなかつたのは無理ならぬことである。特使頻りに回答を促がして止まなかつたので、コエルホは直ちに上書を認め其の宛を辨じて曰く、關白殿下は曾て書を下して基督教の宣布を許可し給へり、基督教は天地萬物の創造者たる唯一の眞神を崇拜するものなれば、殿下が基督教を許可せるは即ち偶像を拜するを禁し、眞神の教に背反する所の社、寺を毀つを許されたのである。さればたとひ宣教使等は領主の許可を得たる時の外は、自ら手を降して社寺を破壊したる事なしと雖も、信者等が偶像を破壊し、社、寺を破壊せんと欲するは當然の事だ。基督教と佛法とは明暗・眞偽・善壞の差あれば、基督教の教師と佛法の僧侶とは決して相和する能はずだ。されど耶蘇組の人々は決して佛僧を苦しめたる事はない、我宗門に於ては人を強迫することゝ爲さず、されば強て人々を我が宗門に引入れたことはない。牛肉を食するの一事に至つては宣教使も歐羅巴の習慣に従ひ、葡萄牙商人の饗應を受けるときは、之れを食せしと雖も、殿下若し之れを欲せざれば今後は決して之れを食せざるべし。葡萄牙商人の日本人を買て奴隸と爲すことは吾人宣教使の反對し非難し來つた事なるも、商人の行爲に對しては吾人一々其の責に任ずることは出來ない。それは切支丹の罪惡

て奴隷賣買に就

ではない。奴隷賣買を廢止せんとせば宜しく買ふ者よりも賣るものを制せられたい。殿下若し諸大名が其の俘虜及び罪囚を賣ることを禁止せられんには、此の弊害は容易に絶滅すべしである。切支丹諸大名の記者ステーチエン之れが説明をなして曰く、「其の頃九州の諸大名及び其の他の大名も俘虜を長崎へ送り、葡萄牙商人に賣つて印度より輸入し來る武器及び貨物と交易して居た。耶蘇組の宣敎使は此の事の罪惡なるを哀み屢々訓戒して之れを制止せんと試みたるも、商人等は之れを聞かなかつたのだ。蓋し此の頃日本へ往來せる葡萄牙商人の多數は初代貿易時代の商人と違ひ、其の品性放縱にして人道を解せず、驕慢貪欲であつたから、佛教徒等にさへ誹謗さるゝに至つた」と。而して葡萄牙商人等は其の買收したる人々を媽港、馬拉加の諸所へ輸出し、奴隷として賣り渡して居たのだが、其の價の廉なる遠く黒奴の下に在つたので、是れが爲め黒奴の相場に非常の影響を與へたと云ふ事だ。斯くて是の奴隷賣買は利益が多かつたので、容易に絶滅せずして、其の後も盛に行はれ、朝鮮の役、出征諸將の多くは韓人の捕虜を日本へ送り、それを葡萄牙商人に賣つては武器若くは軍用金に換へ、其の缺陷を支へて居たが、流石に切支丹大名は之れを罪惡視し、捕虜は皆自國の

領土へ送つて之れを仕役し奴隷賣買には關係しなかつたと云ふ事である。

第六章 豊臣秀吉と基督教 (其の二)

一 追放令の犠牲者

秀吉の切支丹追放令に觸れて最初の犠牲となつた者は播州明石の城主高山右近友祥(教名ジャスド)である。右近は切支丹大名中、大友宗麟、大村純忠と並稱せられた程の篤信の人にして、其の排佛、毀釋に熱心なる、其の領内の佛寺を破壊し、佛僧等を放逐して、一字の佛寺一個の僧侶の存在をも許さなかつたので、佛教徒の彼を怨むこと甚しく、その憎惡の集點となり、讒誣の標目となり、遂に彼等の爲に陥し入れられたのは是非もなき次第である。

伴天連追放令を發すると同時に、秀吉特使を高山右近の許に遣はして曰く、汝祖先の宗教を棄て、基督教に歸依し、神社、佛閣に放火して暴害を加へ、家臣を強て切支丹宗を信ぜしむのは何事ぞ。斯る行爲の人にして基督教にあらざる主君に對し忠義を盡すべき謂れなし。因て汝即刻基督教を信ずるを止めよ、若し之れを拒むに於ては所領

最初の犠牲は
高山右近

秀吉特使を以
て右近を尋問

を没收し流刑に處すべし」と。時に右近は博多附近の陣中に居たが、此の命を受けて、大に驚き、且つ怪み、自ら秀吉の面前に出て辯解せんとせるが、友人等は之れを危み止めて曰く、殿下の憤怒甚しく、此の際殿下に謁見して辨解を試むるも何等の効なく、却て危害の御身に及ばんことを恐る。若かず、假令内心基督教を棄てざるも、表面假りに殿下の命令に服従すと聲言して、以て一時の危急を通れんには」と、且つ諭し且つ勧め懇切至らざるなきであつた。右近爲めに感泣して謝して曰く、諸君の深厚なる友情、その懇篤なる勸諭は謝するに言がない。然れども、たとへ一時にもせよ、表面棄教を装ふて以て殿下を欺くのは、信者として予の忍びざる所である。諸君の好意はさることながら、其の忠言を容るゝあたはざるを遺憾とす」とて、靜かに使者に向て曰く、公歸つて我主關白殿下に告げよ、臣、右近は常に力を竭して殿下に事へ、忠職を勵み、未だ曾て殿下の意に戻つた事なく、殿下の爲めには、たとへ肝腦地に塗るも敢て辭する所に非ず。是れ基督教の臣等に教ふる忠義の道である。臣の切支丹たるは殿下の初より知りたまふ所である。然るに、今にして切支丹を棄て、眞神の教に背戻せんか、是れ殿下の知遇に背くものと云ふべしだ。且つそれ、我か家臣をして切支丹宗を奉ぜしめしは事實なるも、

高山右近の答

右近の告別

それは彼等をして永遠の幸福を得せしめんが爲めなのである。何となれば基督教にあらざれば吾人々類を救ふものはないからである。我が基督教によれば臣の君に事ふるや、苟も神の聖旨に戻らざる限り、何事にても主君の意に悖つて不忠、不義の行をなす能はざるのである。殿下乞ふ是れを諒せよ、臣右近は職祿、家財を惜みて主君に反くものにあらず、況哉眞神に對しておやで。假りに我に百千の生命あつて眞神の爲めに皆之れを失ふとも斷じて不忠、不義の行をなすあたはずである」と。衆皆慘然たり。秀吉直に右近の所領明石を奪ひ之れを追放す。右近即ち家臣を陣中に集め、告別の辭を述べて曰く、「我はからずも關白殿下の憤怒に觸れて此の奇禍に逢ふは予の最も哀む處である。然れども是れ苟も眞神の聖旨ならんには我所領を失ふも惜むに足らず、流刑に處せらるゝも亦歎くに足らず、唯憾むらくは諸君が予に盡せる忠義に報いる能はずして、却て苦難を蒙らすに至つたことで是れ我が痛傷して已まざる所である。然れども諸君若し危難に遇ふも怖れず、毅然として確く信仰の道に立て動かすんば、神は諸君に酬ゆるに予の諸君に酬いんと志して未だ實行し得なかつたものに數倍したる恩寵を以てすべし。諸君乞ふ務めて怠らず誓て神に背く勿れ」と。衆皆感激敢て諭旨を奉せんと答ふ。右

右近其の父と
共に追放せら
る

近之れを慰諭す、君臣相顧みて肅然たり又悽然たり、其の感慨果して如何、唯上帝皇天の知るのみだ。折から打出す陣太鼓の響に怖て鳴出せし樹間の蟬の鳴聲も哀悼をそゝるが如くである。右近、明石に還り其の父飛弾に告ぐるにその實狀を以てす。飛弾も亦熱必なる信徒である、其の子右近が秀吉の不興を蒙つたのは戰陣に於る失敗にあらず、切支丹信仰の爲めなるを知り、敢て哀まず、却て感謝して云ふ、「たとへ信教の爲め我が所有の一切を烏有に歸するも尙一物の残れるがある、一死以て神に奉せんとの赤心がそれだ」と。小西行長特使を以て右近一家を招き、之れを其の領内湯の島に潜伏せしめ、切支丹武士に命じて之れを保護し、他人の島内へ入るを禁じて以て世の耳目を避けしめた。後年小西行長が肥後に移封せらるゝに及び、右近の一家は秀吉の命を以て加賀に移り、前田利家に寄り三萬石を食み、その父、飛弾は別に越中に於て六千石を受け、晩年を献げて布教に勤め、其の信節を全ふした。而して右近は小田原北條征伐の時、利家に徒ふて殊功を顯はせるも、秀吉之れを稱讃せしのみにて、再用して直臣とはせなかつたと云ふ事である。

二 追放令に對する宣教使の動作

宣教使相會し
善後策を講
ず

宣教使會の決
議

宣教使は退去
するの覺悟で
あつたか

追放令發布の當時、日本國內に居た宣教使の數は百十三人で（西教史は百二十人と云ふ）師父四十八人、修道士七十三人、その中日本人は四十七人であつた。支部長コエルホは斯る多數の宣教使が一時に退去すべき便船なきを以て、其の狀を具して六ヶ月の延期を請ひ、更に平戸に會合して善後の策を講じた。師父の中、小西行長の召聘に應じて右近の配所湯の島へ赴いたオルガンチノと、其の他一二の宣教使の外は皆是の會議に列席した。其の決議の要點は、猶豫期限中は一切寺院を閉鎖して公然宗務を執ることを停止し、謹慎して以て嫌疑を避くることを務め、又懺悔修齋して以て神が秀吉の思想を變化せんことを熱禱すべしと云ふのである。而して其の間九州切支丹大名の保護の下に身を投じて大阪政府の注意を避けることで、師父十二人は大村喜前に依り、五人は平戸の籠手田氏に依り、二人は毛利秀包により、九人は天草に二人は五島に、其餘は有馬晴信によつて時期を待ちつゝあつたのである。

退去の期限は刻々迫りつゝあり、然もその前途は暗澹たりだ、宣教使等は果して日本を退去すべき覺悟であつたのか、否決して然らずで、如何なる事情あるも、此の際日本を退去すべからずとは彼等の確き決心であつた。殉教々々は、是れ平戸會議の標

コエルホ退去
令解除の策を
講ず

語であつて、數萬の信徒を見棄て、空しく身を退き、生命を全ふせんよりは寧ろ止まつて信徒を保護し、身命を擲ちて、天父に奉仕しやうとは彼等の切なる願望であつた。彼等は徒に基督の牧場にある群羊を棄て、豺狼の餌食に委するが如き似而非牧師にてはなかつたのである。信教の自由を與へよ、然らずんば死を與へよとは、彼等の日夜心をこめ熱涙を注ぎて祭壇にさげた祈願であつた。神意果して如何、是れ凡人の窺知すべからざる秘義だ。此の危機に際し支部長コエルホは俄然暗中飛躍の運動をなして退去令解除の策を講じた。彼は大阪政府の内情を探り、有力者に結托して秀吉の憤怒を緩和しその決意を翻さんと試みた。秀吉の正妻政所へも嘆願書を奉呈して救解を乞ふた。然も其の効がなかつた。期限は迫つた、葡船は將に出帆せんとす、爰に於てコエルホは船長と協議し、貨物多くして一時に多數の宣教使を乗船せしむるを得ずとの口實の下に、今年は若干の宣教使を乗船せしめ、餘は翌年まで延期せられたしとの請願書を認め、葡萄牙人エヌマエル、ロベツを特使として秀吉に歎願しめした。蓋し若干名の宣教使とは其の實僅に三名の修道士にして彼等は一旦媽港へ退去し、司祭となつて再び日本へ渡來せんとの計畫であつた。斯くて特使は大阪へ至り宣

秀吉數多の切
支丹寺を破壊
せしむ

教使の爲めに説く處があつたが、秀吉ますます怒り更に命じて近畿の切支丹寺二十二ヶ所を毀たしめた。

是れより先き、一五八七年（天正十五年）八月秀吉九州より大阪へ歸るに臨み、命じて有馬、大村領内の基督教寺院を毀ち十字架を倒し、其の城柵を破壊せしめて基督教に對する餘憤を洩し、又大村氏に告ぐるに長崎を收めて公領となさんとする旨を以てし、命を葡萄牙人に傳へて爾後宣教使を伴ひ來ることなかれと令した。又其の大阪へ歸城するに及び、京都、大阪、堺に在る寺院及び宣教使の住宅を沒收し、武士に命じて之れを管理せしめて居たが、爰に至つて。又々寺院を破壊し、更に淺野長政を遣はして長崎を大村氏より沒收し、有馬氏所領の小城を龍造寺氏へ返付せしめ、佐賀の鍋島直茂及び小倉の毛利勝信に長崎奉行を命じて之れが取締を嚴重にした。（天正十六年）是れ葡人及び大村、有馬二氏に取つては大なる打撃であつた。

長崎港の沒收と追放令發布と同時になりとなすものもあるも、其の翌年なるは左の法文によりて明である。

定

長崎港の沒收

當時御拜料に被付仰上は非分義有之の間敷事

- 一 有様の御公物納可ニ申上迄横没不可有之之事、附り、地子共得ニ上意可免之
- 一 當所の儀此の兩人へ被ニ仰出候間爲ニ代官鍋島飛彈守に預置候何も可得ニ其意事

- 一 黒船の儀前々の如くたるべきの旨地下人馳走として當所へ可ニ相付事
- 一 自然下として不謂義申懸る者有之共一切承引仕間敷事

右の旨相背輩於之有ニ者急度兩人方へ可ニ申越候堅く可ニ申付ニ者也仍如件

天正十六年五月十八日

戸田民部少輔

淺野彈正少弼

宣教使再び有馬領内に會議を開く

耶蘇組支部長コエルホは秀吉の憤怒尙ほ解けざるを聞き、更に有馬候の領内に會議を開いて協議し、たとへ殺さるゝとも此の際日本より退去すべからずと決議し、凡ての教會堂を閉鎖して一切の宗務を停止し。司祭は服裝を變じて常人の姿となり、れく各地に潜伏して窃に布教を勤めることにした。有馬にあつた學校の他所へ移されたのも當時の事であつた。西教史の傳ふる所によれば、宣教使會議の有馬に開かるゝや、有馬

有馬晴信の提言

晴信先づ發言して曰く、師父等を我領内に潜伏せしめ力の及ぶ限り之れを保護し得るは吾が光榮とんる所である。若し關白殿下が予の師父等を保護することを許さずんば、我れ務めて事理を述べて以て抗辨しやう。殿下若し我が陳述する所を容れずして却て我を征伐するに至らば、己を得ず我れも亦勇を鼓して防戦しやう。思ふに、神は常に救護を垂るゝを以て此の機に於て天佑が吾人の上にあるを信じて疑はざるのである。若し亦神の制裁によつて吾人の敗戦とならば、是れ即ち神の榮光の爲めに君位生命を抛つに同じで、固より我が甘心する所である。師父等が若し今日我れより兵端を開くを以て時機を得たりと爲さば我れ直に兵を擧げやう。如何となれば我が殿下の命に背いて、師父等を領内に留め、之れが保護に任ずる事は殿下の知る所であるからだと。師父等は候の好意を謝したるもそれが爲め、累を一般基督教に及ぼさんことを虞れて其の議を容れず、前述の如き溫和なる方針を取り、隱忍以て時機を待つに決したのだと云ふ。

淺野長政が九州へ派遣されたその使命は獨り長崎を收めて公領とするのみならず、肥後の領主佐々成政の失政を監察して之れが處分をなすのにもあつた。成政は罪に服

淺野長政の使命

加藤清正と小西行長

天草伊豆守種元の熱心

して。自殺した。因て其の領土を分て加藤清正、小西行長の二氏を封じた。行長は宇土城に居て大に基督教徒を保護し、毎歳米二千石を附與することを約して以て宣教使の急を救ふた。天草島も亦行長の管轄となつた。時に天草の領主天草伊豆守種元（教名トム、ジャン）は熱心なる信徒である。秀吉の追放令發布後頻りに伴天連等を保護し有馬に在つた學校を天草に移して子弟を教育せしめ、又公然切支丹寺院を開放し、鐘を鳴らし人を集めて宗門の儀式を執行すること平生に異ならなかつた。人あり忠告するに、關白殿下の憤怒に觸るゝの危険なるを以てす、彼答へて「我は唯神の怒を恐るゝのみだ、何を殿下の憤怒を畏れんや、其の信奉する所の宗旨の爲めに殉死するのは我が素願である。殿下若し切支丹寺を破却せば我も亦其の下に殉死するの幸福を得んのみだ」と高言して憚らなかつた。行長至るに及で其の命を奉せず、秀吉召せども應せず、因て秀吉、小西、加藤の諸將に命じて之れを討たしむ。有馬、五島、松浦の諸侯又各々兵を出して之れを援く。天正十七年十二月種元戰敗れて行長に降る、行長之れを赦し元の如く本渡を領せしめた、志岐、栖本、大矢野、上津浦には別に行長より切支丹武士の奉行を置いて之れを治めた。天草島の切支丹はますます盛になつた。

小西行長天草を領す

三 追放令發布後の切支丹

切支丹を迫害する大名、松浦氏

大友義統

諸侯の中、此の際切支丹教徒を迫害せるものは僅かに平戸の松浦氏と豊後の大友氏のみであつた。松浦氏は葡萄牙貿易の長崎に移りし以來、頻りに切支丹に反対し來つた人なれば、之れを迫害するも敢て怪むべきにあらずだ。然も彼の迫害や、單に寺院を破壊し、十字架を倒せるのみにして未だ以て一人の教徒をも殺戮しなかつた。大友氏に至つては然らずだ。義統の改宗は日淺しと雖も、其の父宗麟以來基督教を保護し來つた名家である。其の一族家臣の多くも亦基督教を奉ずるものである何を苦んで以て基督教徒を迫害するの要あらんやだ、然るに、義統は秀吉の追放令が出づるに及び、其の母方の叔父にして反切支丹を以て有名なる田原親堅紹忍の言を聞き、累の其の身に及ばんことを恐れたのか卑怯にも忽ち轉宗して佛教徒となり、宣教使を追放し數名の切支丹武士を誅して一族家臣の反對に遇ひ、又大友家の忠臣にして唯一の名將たる志賀親次。パウロを殺さんとして却て秀吉の不興を蒙り、狼狽、周章してその爲す處を知らずと云つた風の實に憫むべきの状態であつた。其の怯懦、輕卒の舉動が遂に大友家を滅ぼすに至つたのは自業自得と云ふべきである。

新に洗禮を受
くる大名貴族

伴天連追放令は何故か勵行せられなかつた。禁教令は未だ發布せられなかつた。切支丹大名は依然として基督教を奉じ、士民も亦轉宗するの要なく、却て此の後に諸侯の中で新に切支丹に入るものが尠くなかつた。秀吉の弟大納言秀長及び京都の所司代前田徳善院玄以とくぜんのみんけいの如き自身は信者にてはあらかつたけれど、切支丹に同情を表して之れが保護に任じて居た。秀吉の正妻政所まんどころの甥にして姫路の城主木下家定いげさだの子、勝俊かつとしの如き、信長の次子北畠信雄きたはたけのたけの如き、其の叔父織田有樂齋長益の如き、皆新に洗禮を受けたものだ。木下勝俊は若州小濱の城主である。長益は秀吉の愛妾淀君の叔父にして大阪城中の勢力家である。細川侯爵家の祖先、忠興の夫人玉子の切支丹宗に入つたのも追放令發布の前後であつた。忠興は當時丹後田邊の城主であつた。忠興は高山右近と友とし善く、右近より屢々基督教の要義を聞き、之れを其の夫人たま子に傳へた。それが夫人の基督教に接した始である。夫人は明智光秀の三女で、絶世の美人にして又頗る淑徳の譽高き賢夫人であつた。忠興深く之れを愛し伉儷の情最も睦まじかつたのであるが、夫人の父なる明智光秀の反逆事件起るに當り、忠興世の批判を憚り一時之れを其の領内三戸野の山中に移し、山伏の家に預け、殆ど離別同様の待遇をな

細川忠興夫人
の受洗始末

細川夫人微行
詣つて切支丹に

すの止を得ざるに至つた。夫人は此處にあること三年、いぶせき光陰を送りつゝある間も常に讀書三昧に耽つて修養を怠らず、知識と道念との向上は著しきものがあつた。これぞ後年彼女が基督教を信するに至る素因となつたやうである。既にして秀吉政權を握るに至り、玉子姫が配所に在て苦節を守りつゝあるを傳聞して大に之を憫み、自ら忠興に諭して再び同棲せしめたが、是より以來夫人は大坂の細川邸にあつて忠實に夫君に仕へて居た。斯くて玉子姫は時折夫君忠興が高山右近より説き勧められたる基督教の要義を傳へ聞き深く感ずる所あり、親しく宣教使に就き教を受けたいと念が頻りに起つたが、それは夫君忠興の同意を得るの望がなかつた。又故あつて夫人は堅く外出を禁ぜられて居たので、其の身は、さながら籠中の鳥の如く出るに由なく、僅かに聞き覺えた教義をたどりそれを沈思冥想しつゝ、其の心の開發されんことを祈つて止まなかつた。折から九州征伐の役起り、夫君忠興出陣の留守中、夫人は腹心の侍女をかたらし微服して潜に裏門より出でて切支丹寺に詣で宣教使カスペート Caspates 及び邦人の修道士ヴァンセンに見えて親しく教を受けた。爰に初て年來の志望を達し歡喜に堪へなかつた、直ちに洗禮を受たいと願つたのであるが、其の姓名を明かさな

かつたので其の願望を果すことが出来なかつた。蓋し宣教使は彼女を以て細川夫人とは知らず、關白殿下の貴嬪の一人だらう位に思つて其の志望に應じなかつたのである。既にして細川邸の留守居等は夫人の邸内に在らざるを發見し、周章驚愕直ちに手を別け轎を吊らせて市内の諸佛寺を尋ね、最後に切支丹寺にて漸く夫人に邂逅して歸館を促し轎に移して伴ひ去つた。是れより邸内の取締一層嚴重となつて復外出する能はず、寺院參詣の路全く杜絶したので、夫人は殊に伶俐なる侍女を師父の許へ遣はし、手書を以て教義上の疑問を質し、或は侍女を代參せしめて説教を聽聞せしめ、其の歸邸するを待受て其の日の教旨を傳聞し、疑問の點は翌日侍女を介して更に師父の説明を求めた。斯くすること數日、略々其の教義に通ずるのみならず、自ら斷食祈禱して宗教上の勤行を務めて怠たらなかつた。かゝる中に其の侍女等十七人も亦大に聖教に感服し、改心して洗禮を受くるに至つた。夫人は倍々羨望に堪へなかつた。其の身も亦洗禮を受くるの日が、一日も速かに來らんことを祈つて止まなかつた。既にして秀吉宣教使を内地より追放するの命令を出せしと聞き、此の際如何なる代價を拂ふも宣教使の退去前に、是非とも洗禮を受けねばならぬと決心せしも、天を隔て、飛ぶ鳥の

細川夫人侍女
マリーより洗
禮を受く

翅なき身を如何にせん。忽ち一計を案じ、夜中、柩中に潜みて竊に邸内の窓より出て寺院に詣でやうとはかり、侍女をして其の意を師父へ通ぜしに、その止むる所となつて果さなかつた。侍女中にマリーと云ふ婦人あり公卿清原外記（清原外記の事）の女にして足利將軍義輝時代に已に洗禮を受て居たのである。（は前に出づ）師父カスベートは細川夫人の信仰堅固なるに感じ、洗禮を授けやうと思ふも之れに接する機なきを以て、遂にマリーに洗禮の法式を授け、彼女をして夫人に洗禮を授けしめた。夫人の志望初めて達し、其の歡喜名狀すべからざるものがあつた。教名グラシヤ Gracia と稱す、充るに伽羅奢の字を以てす。既にして忠興還り之れを聞いて、大に怒り、しばし短刀を夫人の咽喉に擬して轉宗を迫つても應じないので果ては其の憤怒を侍女に移し、マリーの外悉く之れを放逐してしまつた。是れより以來益々夫人の外出を嚴禁して切支丹の信仰を放棄せしめやうとせしが、夫人の信仰ますます堅固にして動かず、あらゆる艱難、辛苦をも、信仰の爲めには甘じて受ける覺悟あり、其の上眞肅、溫柔にして善く夫君の意を承け、信仰意外の點に於て未だ曾て夫君に反いたことがないので、忠興も亦如何ともする能はず、遂に夫人の信仰を自由に放任して置いたと云ふ事だ。其の後夫人は專

ら慈善事業にはげみ、又宣教使より贈つて來た文法書によつて始めて歐文を學び、葡萄牙語及び拉典語に通じ、其の信仰文才兩ながら基督教内に嘖々たりであつた。後ち關ヶ原の役苦節を守つて忠死せるは世の偏く知る處である。(彼女は其三男忠利を受洗せしめた。其二人の娘及び其長男の受洗は後に詳てある。)

細川夫人の書翰 (西教史)

細川侯夫人よりカステド師へ贈つた書翰ペール僧官貴下

タクダサン、シヨ一の齋し到る新報に依りて、貴下等必ず日本内地を去らざるの議に決せしと聞き、予が欣慰は他に比する者なし、貴下等の勇膽を以て予れの情氣を奮發せしめ、又遠からず大坂に於て再會するの念を生ぜしめたり。貴下等の知る如く予をして佛教を放棄せしめしは固と人力に非ず。予をして正路を知らしめしは久しく祈願したる天主の洪恩によれり。且天主の仁惠を以て予の昏瞑を救助せられし以來其教の道に非されば決して天堂再生の方を得可からざることを確知し寰宇壤頽し海陸變遷、萬物消滅に至るとも、予は天主の洪恩に由りて、確乎として安全を保つべし。

貴下並に諸教師に背戻して聖教破滅の令あるは、是れ予をして甚だ憂慮せしめたり。然れども貴下等の勇剛信仰及び決心は甚だ予を安慰せしむ、予は貴下等の出發以來一日も心を安んずること無く、常に奉ずる所の宗教の爲め憂困苦惱を受く、然れども天主の恩惠に因り予に與ふるに死を恐れざるの勇を以てせり。又予の末子(忠利か)病に罹り危篤に至り醫師に看放なされしが、其の體の死を憂へされども來世に於て精神の罪せられんことを恐る、故にマリーに乞ひ灌水せしめしに(さきに夫人に洗禮を授くるの權を與へられし侍女マリーをして幼兒忠利に洗禮を授けしめを云ふ)直に平癒せしを以て、これにジャンの名を與へたり。

予の良人は基督信者を讐敵とし、予も亦常に苛刻の待遇を受く、其の九州より大坂に歸るの後、予が子女の乳母或る日、良人の意に適せざる些細の事故より直に其の鼻をさき兩耳を殺ぎ、且官女等を悉く剃髮して邸中を放逐せり。之れに由り予は是等を救助し、須要の物品を附與することに注意せり。又良人丹後の國に出發するに臨み、予に告るに、再び此の地に歸れば家臣中或は聖教の信者ある可し、然るときは須く之れを檢査すべき旨を以てせり。予に隨從する基督信者の婦人等は、假令予の良人

或は關白殿下が基督宗教を棄てしめんことを欲すと雖も、宗教の爲めに身命を犠牲に供して之れを固守せざる者あることなし。

予は貴下並に諸教師等の新報を受くることを甚だ欣稱せり。之れに由りて予は日夜天主を祈念し、教師等をして予及び子女の精神幸福の爲め新報を贈與せしむることを希望せり。予及び親族の爲めに貴下等の祈念あらんことを懇願し、且予の如き不幸に際し悲嘆に堪へざる者を閑却すること無らんを至願す。

十一月六日

大坂丹後侯の夫人グラス

四 印度臥亞總督の使節、遣歐使の歸朝

時に師父ワリニヤールニは臥亞にあり、彼は曩きに大友、大村、有馬の三家より使節を羅馬へ遣すに當つて同行して日本を去つたのだが、故あつて使節と歐洲まで同行する能はず。獨り臥亞に留まつて遣歐使の安否を氣遣ひ、傍ら、日本の政變、切支丹の發展に注意して怠らなかつたのであるが。偶々秀吉の追放令發布の事を聞いて大に驚き、自ら日本へ來り、親しく秀吉に謁見して追放令解除の策を講じたいと思つたが、宣敎使の資格にては日本に上陸を許されないことを發見し、東印度總督エドワル

ワリニヤールニ
印度に在つて
追放令發布の
事を聞く

ワリニヤールニ
遣歐使を伴ふ
て日本に來る

ド、ド、メネセズ Edward de Meneses と協議の上其の使節となり、偶々是の時歐洲よりの歸途、臥亞に到留して居た遣歐使の一行を伴ひて日本へ來り、秀吉に謁見して其の憤怒を緩和しやうと謀つた。一五八八年（天正十六年）四月一日臥亞を發し、途上媽港より書を以て東印度總督の使節として上陸を許されんことを乞ふた。秀吉之れを許した。因てワリニヤールニは直に媽港を發し、一五九〇年（天正十八年）七月長崎に着船す。有馬、大村の兩家の人々出て之れを迎ふ。遣歐使の慈母、兄弟、親戚等の出迎ふもの多く、一別以來相見ざること爰に九星霜、その出でた時は尙紅顔の少年だつた千々岩、伊東等の使節が、長き旅行の中に生長して、見迷ふばかりの青年となつて還り來つたのには、流石の慈母等も一見其の面影を見認め得ざる程であつたと云ふ。其の母子、兄弟相抱いて嬉し涙にかきくれし欣抃、愉快の状は筆紙の能く盡す處にあらずだ。是れより使節一行は親戚、故舊と相會し、歐洲の異聞、珍説を語り、感興湧くが如く其の盡る時を知らなかつた。

ワリニヤールニ師は切支丹大名に關する秀吉の嫌疑を避くる爲め、遣歐使事件を以て初め、之れを遣したる大友、大村、有馬三家の私事とせず、日本に政權を有する秀吉

遣歐使事件を
公事となす

の公事となさんと欲し、直接秀吉に其の到着を報告した、淺野長政の斡旋により、秀吉も亦遣歐使四名を引見することを許した。爰に於てワリニヤールニは一日も速く秀吉に謁見せんことを乞ふた。時に小田原の役未だ畢らずして秀吉關東に在り、尋てワリニヤールニ俄かに病て起つ能はず、遷延又遷延、漸く一五九一年（天正十九年）一月中旬長崎を發した。日本の遣歐使節一行と數名の葡萄牙人とは海路を取り、ワリニヤールニはオルガンチノ、メスキター Mequiua の兩師と偕に數名の葡萄牙人を伴ひ陸路下の關に至る。途中、大友義統の書を寄せて、その過失を謝するあり。ワリニヤールニはその父宗麟の功によつて其の罪を赦した、鍋島直茂の嗣子勝茂及び毛利吉成等使節一行を款待した。ワリニヤールニ等は下の關に於て日本使節一行に會し、それより海路播摩の室津に至つた。時恰も日本の正月に近く、西國の大名が賀正の爲め大坂に登るの途次遣歐使節に會見し、歐洲の珍談、奇物を見聞せんとて室津へ來るもの多く、その最も熱心だつたのは毛利輝元、宗義智、黒田長政、大友義統等であつた。長政時に歳二十三、父孝高に嗣いで中津の城主たり、彼は少年の時其の父孝高の勸により洗禮を受けしも、爾來從軍に忙しくして宗教々育を受くるの暇なく、其の信仰は頗る幼稚で

西國大名の室津に遣歐使を訪問する者多し

あつたが、今や使節一行に會して歐洲の談を聞き、且つ使節等の熱心を目撃して大に悟る所があつた。大友義統はワリニヤールニ師の親切なる回答に接し、之れに勵まされて室津に至り、其の從弟伊東マンシオの忠言を受て、再び基督教徒たらんことを約束するに至つた。

京都に於てはワリニヤールニ使節の使命に關し疑惑を懐いたものが尠なからずであつた。名は印度總督の使者と云ふも、其の實基督教勢回復の目的に外ならず、甚しきに至つては其の間何かの陰謀あるかの如く邪推したる流言、蜚語が盛に行はれて爲に秀吉の感觸を害せるのみならず、接伴掛任命の件に關しても亦尠なからぬ困難があつた。鍋島、毛利の二氏は長崎奉行たるの故を以て接伴掛にならうと望んだが許れなかつた。淺野長政は不在にして黒田好孝が之れに代らうとしたが、其の切支丹大名たるの故を以て秀吉之れを退けて願みず、一時秀吉は謁見を拒絶しやうとするの形勢であつたが、黒田等切支丹大名の斡旋功を奏し、漸くにして接伴の任を大和郡山の城主増田長盛に命ぜらるゝに至つた。黒田孝高は又秀吉の内意を探り、使節は唯印度總督の使命を述ぶるのみにして、決して教會再興の事に及ぶべからずとの意をワリニヤールニ

ワリニヤールニの使命に關する疑惑

に通じて事漸く定つた。ワリニャーニは室津に留まること二ヶ月、此の報告に接して直ちに途に登り、大坂にて、加賀より來つた高山右近其の他の信徒に會見し、此處に留まること三日、接伴掛長盛はワリニャーニ一行を大坂に迎へ淀河を上りて京都に入り、盛儀を列ねて聚樂の邸に入り、秀吉に謁見した、秀吉盛禮を以て之れを迎へ親しくワリニャーニと語り、又伊東等四人の遣歐使に就き具に歐羅巴及び印度、支那の事情を聞き、已も亦印度、支那、朝鮮を経て之れを征伐するの意あるを告げ、又其の切支丹を惡むのは伴天連等が佛僧の權威を破壊するが故であると告げた。秀吉はワリニャーニに京都、大坂、長崎、其の他、何の地方、何の處にても自由に滞在して以て答書の成るを待つべしと命じた、當時ワリニャーニの齋せる印度總督の書翰の原文は近頃京都にて發見し、新村教授之れが考證をなして藝文雜紙に掲載せりと云ふ、左に掲るものは西教史に記載しあるものだ。

貴國我國と相離ること遠なるを以て未だ曾て殿下と相交通せず。然れども貴國に於て職を奉ずる基督教宣教師等より。殿下の衆敵に克捷して日本全國を服従せしめたる偉業を聞けり。是れ全く上帝の殿下を愛して爲さしむる所なり。故に吾今敢て之

臥亞總督の書翰

れを祝賀す。又殿下宣教師を愛し大に恩惠を施し、能く之れを保護して之れに抵抗する者を防ぐことを聞く、詢に陳謝するに辭なし。抑も宣教師等は善心にして諸國に行き衆人を教へ眞神の法を説き、衆庶をして永生幸福を得せしむる道を宣布する者なり。今我が殿下に使節を遣し禮物を呈し、我に代りて謝辭を述べしめんと欲して、師父アレキサンドロ、ワリニャーニに此の任を命ず。蓋し師父は數年前貴國に在り、其の職を奉じ殿下の知遇を辱ふせしものなり。殿下従前の如く之れを保護し、且つ之れに恩惠に賜はゞ何の幸か之れに過ぎん、我れ師父等に代り深く殿下に謝し、又師父等をして長く恩惠を忘るゝことなからしめんとす。我れ使節に託して左の諸品を進呈す。

（是の書翰の原書は羊皮紙に書いた立派なもので、其の大きさは縦凡一尺九寸、横二尺五寸餘、それを錦の袋に包み銀にてちりばめ内側を金にて被へる小箱に容れ、また日本語文をも添へて持つて來たと云ふことであるがそれらはどうなつたのであるか不明である。）

劍二口、新製のアルクビユース銃二挺、亞拉比亞馬二匹、馬具之れに附す。金錦の帷幔、懷中劍銃一挺、印度製の天幕一張。

秀吉ワリニャーニを引見したる後、間もなく加藤清正等と偕に其の生地尾州中村に赴き、ワリニャーニ師は暫く京都に留まつて居たが、其の間諸候の師父を訪問する者多く、大納言秀次、毛利輝元、蒲生氏卿、羽柴秀秋、前田利家、宗義智等は新歸朝者

ワリニャーニ
京都にて諸候
の訪問を受く

より欧州の事情を聞き、其の齋らし來つた處の西洋地圖、地球儀、時計、樂器等を始め其の他の珍器奇物を見て大に興味を感じた。就中、使節四人の物語つた基督教國の文明、羅馬教會の隆盛に關する珍談、異説は痛く聽者を感動せしめた。宗義智は其の時ワリニヤニ師より洗禮を受け、對馬全國を基督教化せんことを約した、前田利家の如きも亦大に其の心を動かしたものの、一人であつた。義智の妻メリーは小西行長の娘にして熱心なる信者である。彼が改宗したのは其の妻の感化が預つて力あつたのだらう。ワリニヤニ師の京都に在ること一ヶ月其の間二十里三十里の道を遠しとせずして、集り來る善男、善女擧て數へがたい程で。或は新歸朝者の説話を聽かん爲め、或は懺悔をなし法會を勤めんが爲めにして、師父の旅館は早朝より夜半に至るまで多衆群集し、師父等は日々三ヶ所に於て彌撒祭を行ふと雖も、信者の數多くして彼等に満足を與ふことが出來なかつた。

既にしてワリニヤニは秀吉の許可を得て長崎に退き、是の地に於て命を待ち、獨りロドリゲス（或はメスキターと云ふ）を京師に留め、返翰の成を待たしめた、其の間ワリニヤニ師は伊東以下の遣歐使を伴ひ、途中、平戸を過ぎて籠手田兵部大輔の寡

ワリニヤニ
大友、有馬、大村の三家を訪問す

婦イサベラ及び大村純忠の娘にして松浦久信の夫人たるメンシヤに會して之れを慰籍し、それより順次有馬家、大村家、大友家を屢訪して羅馬法皇の親翰及び贈物交附式を行つた。その式中師父は法皇よりの贈物の中にある神聖なる十字架の遺片は大諸候にあらざれば附與せられざる貴重品にして、是の贈物を受たる以上は假令死すとも聖教を奉じ之れを保護せねばならぬ義務あることを演説して其の注意を促した。贈物中他の品々は劍一振、兜一個であつた。茲に於て伊東等四名はその使命を畢り、發心して耶蘇組派に加入し、天草の修學院に入つて司祭たるの修業をなした。伊東マンシオの弟ジャスタス時に歳十八亦彼等と偕に出家して學校に入つた。其の中千々岩のみは中途退學した。さうして後には背教者となつたらしい。

ワリニヤニ師の來朝以來切支丹の取締も大に緩んで自然廢棄せられたるが如き姿になつたので、九州地方を中心として各所に潜伏せし百四拾人の宜教使は復將に大に活躍する所あらんとせるが、偶々長崎奉行の取締勵行の建議となつて其の運動を阻碍せらるゝに至つた。初めワリニヤニの來朝するや、長崎奉行鍋島、毛利の二氏は殊に之れを欵待せしに拘はらず、俄然反對の態度に出でたのは何の理由であつたのか、

切支丹取締方
勵行の建議

切支丹の徒は彼等を誣ゆるに、ワリニャーニ師が秀吉に謁見の際、二氏に紹介を倚頼せなかつた事と、彼等に贈物の達せなかつた事に含む所があつたのだからだとする。そは兎も角も奉行等二氏は秀吉に上申して曰く、「ワリニャーニが來朝以來九州に在る宣教使等は皆殿下の命令に背き、公然切支丹宗を宣布し、禁令を犯して洗禮を施して居る。ワリニャーニが印度政府の使節たるの眞僞疑はしいものがある。たとへ正當の使節とするも其の目的は宣教使等の日本より放逐せらるゝを防がん爲の手段たるに過ぎずである」と。秀吉大に怒り將に盡く宣教使を殺戮しやうとした。ワリニャーニは之れを聞き一先づ宣教使團を率ゐて支那の一海島に避難しやうとしたが。有馬、大村其の他の切支丹大名は多く之れに反對し、奮て彼等を保護しやうと誓つたので、宣教使の大多數は支那へ行くことを廢し比較的交通不便の天草島に避難するに至つた。是れより天草は日本に於る耶蘇組切支丹の中心となり、宗教學校あり、印刷所あり、聖徒傳、教義問答、拉典語文法、拉典、葡萄牙、日本、三國對譯辭書等も是處にて印刷せらるゝに至つた。さうして其の印刷器械等は皆ワリニャーニが日本に携へ來たものであると云ふ。

天草は切支丹の中心となる

宣教師を留めて人質とす

既にして印度總督へ贈るべき禮物及び答書成る、然るに秀吉はワリニャーニを疑ひ、それを彼に附することを躊躇した。黒田孝高幹旋最も務め、京都所司代前田玄以を動かし、秀吉の信任厚きロドリゲスをして秀吉を説かしめ、オルガンチノ師の其の間に入て幹旋するあり、遂にワリニャーニ使節の僞物ならざるを保證する爲め、其の隨行員たる宣教使十八人を留めて人質となし、又極めて傲慢なる言語を以て宣教使を彈劾したる秀吉の答書を改削して稍々穩和なるものと變更し得た。爰に於て人質として長崎に留まつた司祭は復た變裝するの要なく、公然司祭として日本に在留し得たるのは信徒にとつて却て大なる僥倖であつた。秀吉の答書文面の宣教使に關する部分は左の如くである。

秀吉の答書

夫れ宗教の事たる我國は神國にして萬物資りて始まる。政府の整頓するや、また職として神明の舊法を遵奉するに由る。この法や君臣、父子、容婦の彝倫を叙ぶ。一家頼りて以て齊ひ、一國頼りて以て治まる。故にこの法一たび廢せば、彝倫また紊亂して收拾すべからざらん。之を以て耶蘇組教會の徒が異教を傳へんと欲して我國に來るは、適々以て國家の害をなすに足るのみ。是れ余が勅を奉じて外國宣教師の傳教を禁ず

る所以なり。余既に彼等の我國を退去すべき令を下せり、豈他に新説を流傳するを許さんや。然れども兩國通商の事に至りては舊に依て替はるなく。海には海賊を禁じ、陸には山盜を警し、以て兩國貿易の途を開き、葡萄牙の人民をして我國の臣屬と同じく共に其の業に安ずるを得せしむべし。貴輸載する所の贈物悉皆領收し、聊さ別紙目錄に載する當國の奇品を以て之れに答ふ。自餘の事に至りては足下請ふ貴使に聽け。(此の書翰の草案は一層激烈なる漢文にして其の日附は天正十九年七月廿五日とじてある) (附録參照)

文祿元年六月十四日

日本國關白

秀吉が此の書と與に贈つた進物は精製の鎧二領、金鞘かけたる槍一條、及び美麗に裝飾しだる長刀と精銅の短刀とであつた。斯くてワリニャーニ師が便船を得て印度へ歸還したのは文祿元年陽曆の十月にして(一五九二)時に朝鮮征伐の役己に始り、兵馬倥傯の際であつたので何人も深く之れに注意を拂はなかつた。

五 征韓の役に於ける切支丹大名

豊太閤征韓の役は切支丹大名の運命に至大の關係があつた。切支丹大名中の有力者小西行長は佛教大名中の有力者加藤清正と共に先鋒となつて互に競争した。小西の慶

ワリかヤーニ
印度へ還る

切支丹大名と
佛教大名

に屬せる諸將は宗、有馬、大村、五島、天草の切支丹大名にして、内藤如安も亦其中にあり、其の部下壹萬八千の兵士も亦多くは信者にして、獨り松浦鎮信と其の部下のみが佛教信者であつたのみだ。行長が先鋒隊を卒ゐて釜山へ上陸せるは文祿元年四月十三日にして、連戦、連勝、破竹の勢を以て進で京城を陥れたのであつた。是れより清正は元山方面に赴き、行長は義州行面に向ひ、進で平壤を取つたのは六月十三日にして釜山より京城まで百五里、京城より平壤まで六拾五里、四月十三日より六月十三日に至るまで僅々二ヶ月間に朝鮮を縦斷せしは偉大の功績と云はざるべからずだ。是の役小西行長は頗る硬論を主張し、諸將の異議があつたにかゝはらず、進で平壤を陥れ、此の勢に乗じて鴨綠江を渡り、直に明國の境に迫らうと主張せしも聞かれず。暫く兵を留めて秀吉の指令を待つて居た、其の間數ヶ月兵糧の缺乏、疫病の流行、さては諸將の異議、和議の談判は大に士氣を沮喪せしめ、尋て明軍の襲撃に遇ひ困憊せる孤軍を率ゐ一戰以て退却せしは此の際已を得ざるの處置にして敢て武を瀆すもの非ずだ。其の和議の談判に關しては其の間種々の込入たる事情あり、獨り行長を答ひきべではないのだ。説を爲す者あり曰く、此役秀吉は切支丹大名を朝鮮及び支那に封